

天理市埋蔵文化財調査報告 第6集

石上・豊田古墳群狐ヶ尾8号、9号墳

1998

天理市教育委員会

天理市埋蔵文化財調査報告 第6集

石上・豊田古墳群狐ヶ尾8号、9号墳

1998

天理市教育委員会



1. 8号墳横穴式石室



2. 8号墳石室墓壙

序 文

天理市では数年来、大和・柳本古墳群の調査を進めておりますが、ここに報告いたします石上・豊田古墳群は、天理市の北に位置する古墳群として有数のもので、特に古墳時代後期の大型前方後円墳がいくつも所在しています。

最近では同古墳群内のハミ塚古墳が発掘調査され、一辺が約50mの大型方墳が確認されました。内部に作られた横穴式石室も規模の大きなことが確認されました。このことは、7世紀になってもこの地域には、有力な地域首長が存在していたといえましょう。

このような歴史的背景を持つ、古墳群の一角で調査された小古墳ですが、遺構、遺物とも良好に残っていました。今後さらに、この地域の研究が進展しますと具体的な歴史像が作られるものと思います。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました地元の方々、諸機関の方々には心よりお礼申し上げます。

平成10年9月30日

天理市教育委員会

教育長 金 澤 運

例 言

1. 本報告は、天理市石上町1212番地の2における天理市水道ガス局の工事に伴う事前発掘調査の成果である。調査は平成3年6月3日に開始し、平成4年2月19日に終了した。
2. 現地調査は、社会教育課泉 武が担当し、遺物整理と実測は松原理恵の援助を受けた。
3. 本書で扱う8、9号墳は、実測図などでは1、2号墳で表示しているが、今後はすべて報告書の番号で扱う。ただこの地区古墳群の番号付けは錯綜している部分がある。『改訂天理市史下巻』792ページの5～11番は石上北支群に属し、またこの古墳群を最初に報告したときの番号とも齟齬が生じている。このため、今回の古墳の番号は、昭和35年報告（奈良県抄報第13輯）を基本とするため、『改訂天理市史下巻』の番号は踏襲しない。
4. 本書の執筆と編集は泉が担当した。出土遺物、実測図面、写真等は教育委員会で保管している。これもあわせて活用していただければ幸いである。

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 図1. 石上・豊田古墳群位置図 | 図21. 8号墳出土鉄製品、耳環 |
| 図2. 石上・豊田古墳群と狐ヶ尾8、9号墳位置図 | 図22. 8号墳墳丘上竪穴系小石室1、2の実測図 |
| 図3. 8、9号墳現況測量図 | 図23. 9号墳横穴式石室検出状況と墳丘断面図 |
| 図4. 8号墳遺構検出状況 | 図24. 9号墳石室墓壙と基底石 |
| 図5. 8号墳墳丘断面図 | 図25. 9号墳石室床面検出状況 |
| 図6. 8号墳石室墓壙と中央排水溝横断面図 | 図26. 9号墳横穴式石室と遺物出土状況 |
| 図7. 8号墳墓壙と中央排水溝検出状況 | 図27. 9号墳出土土器(1) |
| 図8. 8号墳石室基底部と墓壙 | 図28. 9号墳出土土器(2)、鉄製品 |
| 図9. 8号墳石室現況平面図 | |
| 図10. 8号墳横穴式石室実測図 | |
| 図11. 8号墳中央排水溝 | 表目次 |
| 図12. 8号墳東排水溝 | 表1. 8号墳出土須恵器、土師器計測表 |
| 図13. 8号墳西排水溝 | 表2. 9号墳出土須恵器、土師器計測表 |
| 図14. 8号墳石室遺物出土状況 | |
| 図15. 8号墳出土土器(1) | |
| 図16. 8号墳出土土器(2) | 写真目次 |
| 図17. 8号墳出土土器(3) | 写真1. 墳丘東西土層 |
| 図18. 8号墳出土土器(4) | 写真2. 石室北側墳丘土層 |
| 図19. 8号墳出土土器(5) | 写真3. 石室前庭部堆積土 |
| 図20. 8号墳出土土器(6) | 写真4. 8号墳墳丘北側出土埴輪 |

目 次

序文 天理市教育委員会 教育長 金澤 運

第1章 8号、9号墳の環境と立地

- 第1節 地理的環境…………… 1
- 第2節 歴史的環境—古墳時代—…………… 2

第2章 調査の契機と経過

- 第1節 調査の契機…………… 4
- 第2節 調査の経過—調査日誌抄—…………… 4

第3章 8号墳の調査

- 第1節 墳丘の現状と規模…………… 8
- 第2節 遺構の検出概要…………… 8
- 第3節 墳丘断面と墳丘の築成……………12
- 第4節 掘り割と丘尾切断……………15
- 第5節 墓壙と石室架構……………16
- 第6節 石 室……………19
- 第7節 排水溝……………23
- 第8節 遺物の出土状況……………29
- 第9節 出土遺物……………30
- 第10節 小 結……………45
- 第11節 堅穴系小石室……………45

第4章 9号墳の調査

- 第1節 墳丘の現状と規模……………48
- 第2節 墳丘の築成状況と墳丘断面……………48
- 第3節 墓 壙……………50
- 第4節 石 室……………51
- 第5節 遺物の出土状況……………53
- 第6節 出土遺物……………54
- 第7節 小 結……………57

図 版 目 次

- カラー図 版 1. 8号墳
1. 8号墳横穴式石室
2. 8号墳墓壙と墳丘築成状況
- 図 版 1. 調査地全景
1. 調査地と周辺状況
2. 8、9号墳全景
- 図 版 2. 8号墳調査前墳丘
1. 調査前状況
2. 表土除去後の現状
- 図 版 3. 8号墳全景
1. 8号墳遺構検出状況
2. 横穴式石室検出状況
(南から)
- 図 版 4. 8号墳横穴式石室
1. 横穴式石室検出状況
(南から)
2. 横穴式石室床面敷石
(玄室部)
- 図 版 5. 8号墳横穴式石室
1. 羨道部と墳丘西側盛土状況
2. 同上 墳丘東側盛土状況
- 図 版 6. 8号墳横穴式石室
1. 遺物出土状況
2. 同上
- 図 版 7. 8号墳横穴式石室
1. 東玄門部付近遺物出土状況
2. 西玄門部付近遺物出土状況
- 図 版 8. 8号墳横穴式石室
1. 玄室内馬具出土状況
2. 石室前庭部遺物出土状況
- 図 版 9. 8号墳排水溝
1. 中央排水溝(南から)
2. 同上 蓋除去後
(石室から)
- 図 版 10. 8号墳排水溝
1. 東排水溝(西から)
2. 同上 蓋除去後
(木杭から奥が東排水溝)
- 図 版 11. 8号墳排水溝
1. 西排水溝(西から)
2. 同上(東から)
- 図 版 12. 8号墳排水溝
1. 西、中央排水溝と西排水溝
覆土(東から)
2. 西排水溝分岐状況(東から)
- 図 版 13. 8号墳排水溝
1. 西排水溝分岐付近
(西から)
2. 西排水溝(東から)
- 図 版 14. 8号墳墓壙
1. 石室墓壙検出状況
(南から)
2. 同上(南から)
- 図 版 15. 8号墳墓壙
1. 石室墓壙検出状況
(東から)
2. 石室墓壙内出土鉄製品
(東から)
- 図 版 16. 8号墳墳丘土層
1. 墳丘断面全景(北から)
2. 同上(東北から)

- 図版 17. 8号墳墳丘土層
1. 北側墳丘と石室奥壁の関係
（東から）
2. 同 上石室奥壁の裏側
（北から）
- 図版 18. 8号墳南側土層
1. 石室前庭部掘り割の堆積状
況（東から）
2. 西排水溝覆土（東から）
- 図版 19. 8号墳竪穴系小石室
1. 竪穴系小石室検出状況
（西から）
2. 同 上 細部
（西から）
- 図版 20. 8号墳竪穴系小石室
1. 竪穴系小石室1（南から）
2. 同 上 2
（西南から）
- 図版 21. 9号墳墳丘と遺構
1. 9号墳調査前状況
（南から）
2. 横穴式石室検出状況
- 図版 22. 9号墳横穴式石室
1. 横穴式石室全景（西から）
2. 奥壁部遺物出土状況
- 図版 23. 9号墳横穴式石室
1. 奥壁北隅部遺物出土状況
2. 奥壁南隅部遺物出土状況
- 図版 24. 8号墳出土遺物(1)須恵器
- 図版 25. 8号墳出土遺物(2)須恵器
- 図版 26. 8号墳出土遺物(3)須恵器
- 図版 27. 8号墳出土遺物(4)須恵器
- 図版 28. 8号墳出土遺物(5)須恵器
- 図版 29. 8号墳出土遺物(6)須恵器
- 図版 30. 8号墳出土遺物(7)土師器
- 図版 31. 8号墳出土遺物(8)鉄製品他
- 図版 32. 9号墳出土遺物(1)須恵器
- 図版 33. 9号墳出土遺物(2)須恵器、
鉄製品
- 図版 34. 8、9号墳出土遺物、土師器

第1章 8号、9号墳の環境と立地

第1節 地理的環境（図1）

豊田山古墳群の立地するところは、天理市街地から北1kmの名阪国道が通じている丘陵に築造されている。地理的には高瀬川が東部の山間地から流れ出て、盆地部へ入る解析谷が平坦地を形成している。この谷間を国道が貫通しているわけである。そして南側の丘陵を通称豊田山丘陵と呼び、北側は東大寺山丘陵と呼ばれている。

谷との比高は約30mほどで丘陵上は比較的平坦な地形を呈している。地質学的には、この地形は複雑な様相を呈している。つまり東側から花崗岩主体の領家式岩類と、礫岩を主体とした藤原層群、白河池累層、朝和累層が順番に露出し、しかもここに南北方向に3本の断層が形成されている。

そして豊田山丘陵自体も、東側から延びた山腹が盆地に向かって八手の葉のように広がり、谷間には灌漑用の池が多数作られている。丘陵の範囲は東西約1700m、南北1000mである。

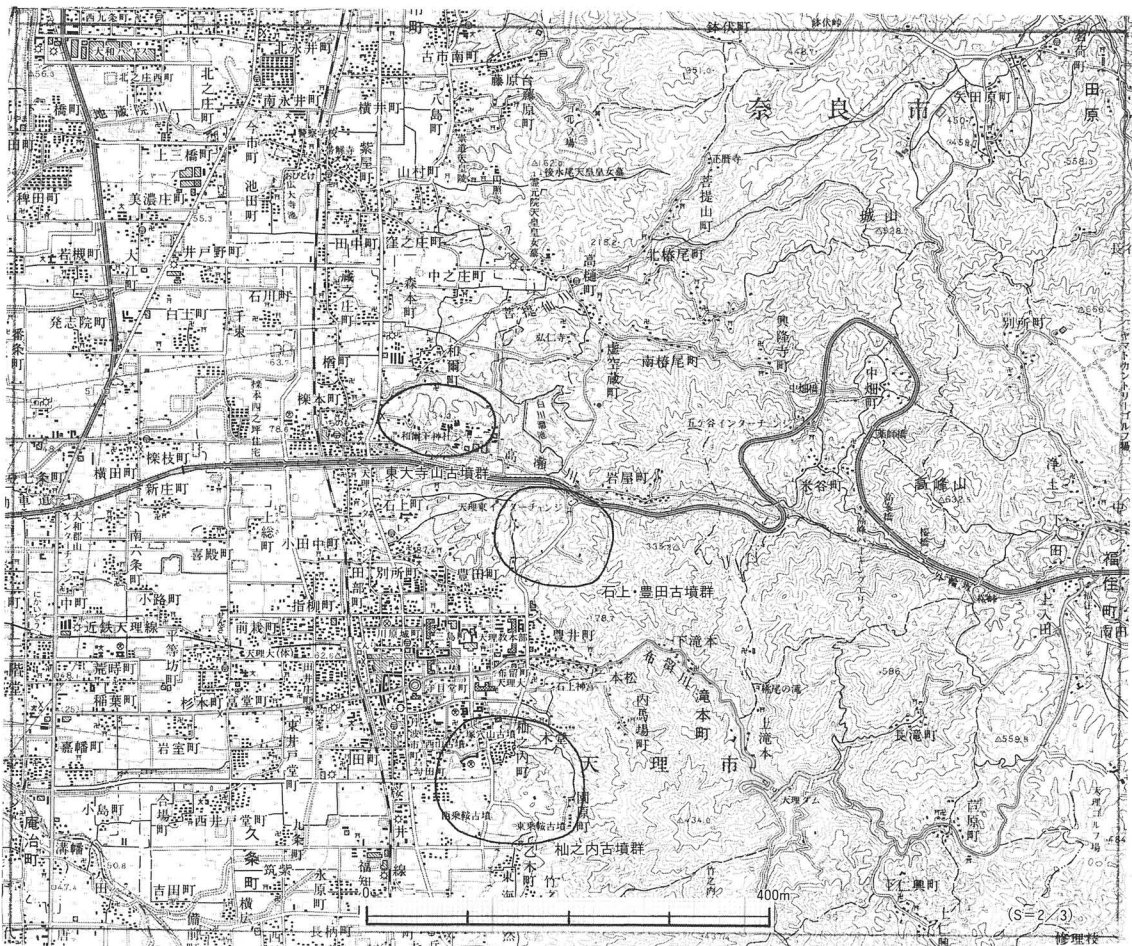


図1. 石上・豊田古墳群位置図

第2節 歴史的環境—古墳時代—（図2）

石上・豊田古墳群は、いわゆる豊田山丘陵に立地する古墳群であり、丘陵の北側にあたる岩屋谷を挟んだ北側の丘陵にも有力な古墳群が存在する。また岩屋谷にも前方後円墳である岩屋大塚古墳や大型方墳であるハミ塚古墳があり、これらの古墳群が谷を隔てていることにより、各々別グループに属するものか、あるいは一体的なものか議論のあるところであろう。

また豊田山丘陵全体では、古墳時代後期の大型前方後円墳が6基がつくられ、円墳が200基以上確認されており、天理市内では南部の龍王山古墳群とともに最大の古墳群と言える。

丘陵の南側は前方後円墳を中心にして形成されているが、北側では2基の大型前方後円墳（石上大塚古墳、ウワナリ塚古墳）と小型の前方後円墳が2基、円墳では5～10mの小型の円墳、10～20mの中型の円墳という群構成である。大型前方後円墳は全長が100m以上あり、このほかの古墳との規模的な格差は大きい。

中型の円墳はほぼ丘陵の尾根状に築かれているのに対して、小型の円墳は北へ伸びた尾根の端部に密集すると言う際だった立地の違いを示している。坪ヶ谷支群では25基の円墳群、狐ヶ尾支群では谷の西側では44基（このうち1基は前方後円墳）、東側では13基（このうち1基は前方後円墳）の合計45基で構成されている。今回の調査対象古墳はこの東の支群に属している。

このほかに、石上・豊田古墳群は東の山から西へ派生した尾根上にも数多くの円墳を作っている。これらは、アミダヒラ支群、ホリノヲ支群、石峰支群、石上支群、タキハラ支群が支群分けされている。そしてこれまで3回の調査により45基の古墳が調査されている。

これまでの調査成果によると、古墳の築造が開始される時期は5世紀後半にあたり、以後、7世紀初頭で終末を迎えている。古墳の築造がピークになるのは6世紀後半である。

出土遺物の特徴は、馬具類を多く副葬していて、このほかに鍛冶道具の鉄鉗、鉄鋤が一組、フイゴの破片、鉄滓などが出土している。

奈良県内の古墳から出土している鍛冶道具は、五條市猫塚古墳（5世紀中葉）からは鉗、鋤、床、鑿のセットが出土しているのが最も古い例である。このほか、御所市巨勢境谷4号墳（5世紀後半）、広陵町寺口忍海H-16号墳（6世紀中葉）、高取町イノヲク1号墳（6世紀後半）、大和郡山市菩提山2号墳（5世紀後半）など6基の古墳から出土している。

鉄滓については、これまで奈良県下では20基の古墳から出土している。出土する古墳は、ほぼ葛城山麓一体の古墳と、天理市内の石上・豊田古墳群および柚ノ内古墳群に限られ、これは鍛冶生産遺跡として知られる、新庄町脇田遺跡と天理市布留遺跡にそれぞれ対応するようである。

このことは、古墳と生産遺跡から出土する共通する遺物の存在から、それぞれの造墓主体の解明と言うことについては重要な手がかりを与えているようである。

参考文献

『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所 新庄町文化財調査報告書 第1冊 1988年

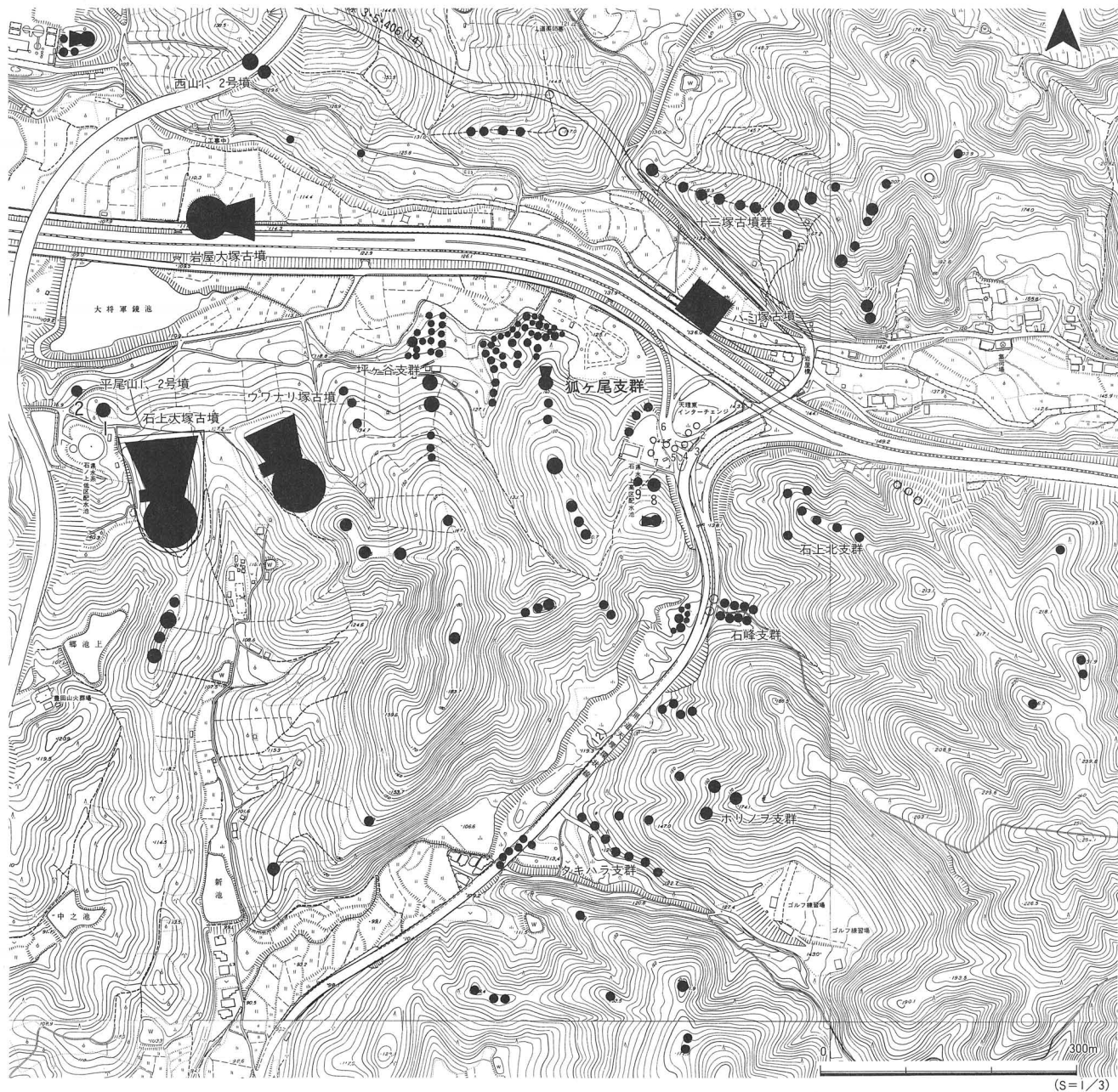


図2. 石上・豊田古墳群と狐ヶ尾8号、9号墳位置図

(石上・豊田古墳群調査報告関係)

1. 『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第13輯 奈良県教育委員会 1960年
2. 『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ』奈良県文化財調査報告書第20集 奈良県教育委員会 1975年
3. 『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第27集 奈良県立橿原考古学研究所編 1976年
4. 『奈良県天理市所在別所裏山遺跡・豊田山遺跡発掘調査報告』考古学調査研究中間報告13 天理大学附属天理参考館分室編 埋蔵文化財天理教調査団 1988年
5. 「平尾山遺跡(第2次)・平尾山2号墳」『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和61・62年度 天理市教育委員会 1988年
6. 『奈良県天理市石上町所在平尾山遺跡発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告15 天理大学附属天理参考館分室編 埋蔵文化財天理教調査団 1989年
7. 「石上・豊田古墳群」『奈良県遺跡調査概報1990年度 第1分冊』 1991年
8. 『奈良県天理市岩屋町西山・ライハナ地区の調査 杣之内町元山口方地区の調査』考古学調査研究中間報告18 埋蔵文化財天理教調査団 1992年
9. 「平尾山1号墳の発掘調査」奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 1996年
10. 『奈良県天理市ハミ塚古墳』現地説明会資料 奈良県立橿原考古学研究所 1997年

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

本調査の契機は天理市水道ガス局による、天理市石上町1212番地の2に所在する県水系高区配水池の拡張工事が計画された。当該地内には古墳が所在しているところから、事前協議を通じて発掘調査届けが提出された。

工事面積は約2694m²におよび円墳2基、古墳状隆起が確認された。このうち1基が奈良県遺跡地図8B-240として登録されている古墳である。

また昭和25年には当該地において、1～5号墳として調査が実施されているため今回の調査は、石上・豊田古墳群狐ヶ尾支群の8、9号墳として実施した。古墳状隆起は地山として確認した。

調査期間は平成3年6月3日に開始し、平成4年2月19日に終了した。ただ現地で作成した図面類は、1、2号となっているが、それぞれ1号墳は8号墳、2号墳は9号墳である。

第2節 調査の経過 — 調査日誌抄 —

平成3年6月3日～17日	調査現場の草刈り(1991年)と整理作業、現況写真撮影	7月11日	墳丘北側の表土の除去作業を行なう。
6月18日	航空測量のための写真撮影	7月12日	西側と北側の調査はかなり進んでいるものの、墳丘裾部や外部施設はいまだ不明な点が多い。天気は大変蒸し暑い。
6月19日	6号墳にトレンチを設定し東南部から表土を除去し始めた。	7月15日	昨日の作業を継続する。南斜面では須恵器破片が出土する。
6月25日	約20cmで地山が露出する。	7月16日	昨日の作業を続行する。今日でベルトコンベアー作業を終える。
6月26日	東側の掃除を行なうものの、木の根が多くあまりはかどらない。	7月17日	墳丘北側の表土剥ぎにより埴輪の基底部の破片が出土する。
6月27日	8号墳丘上の木の根を除去する。	7月18日	8号墳の本格的な調査は梅雨明けとして、古墳状隆起について調査を実施した。午後2時ごろから本格的な雨になる。
6月28日	文化財保護審議会のため出張。古墳周辺の掃除を行なう。	7月19日	古墳状隆起は2次的な堆積土で覆われている。遺物は出土せず。古墳ではないと判断された。
7月1日	午前中は墳丘東側の掘方を行なう。午後から雨が本降りとなり作業は中止する。	7月22日	梅雨が明ける。墳丘南、東側にかけて再開する。そして表土の除去作業を終えた。
7月2日	盗掘孔の内側と山側の調査。遺物は出土せず。	7月23日	西南斜面から裾部へと掃除を行ない、裾部において須恵器破片3点が出土する。埴輪類はない。
7月3日	昨日に引き続き盗掘孔内と墳丘東、南側の調査。また山側の傾斜面についても調査を実施。	7月24日	墳丘西側から北側にかけて調査を続行する。
7月4日	午前中は墳丘表土の除去と中央部の調査を続行する。午後から雨。	7月25日	8号墳はほぼ墳丘の表土の除去に
7月5日	墳丘南斜面から須恵器破片3点が出土する。午後から雨。		
7月8日	作業の主力は墳丘西側へと移る。		
7月9日	午前中は昨日の作業。午後は末永先生を偲ぶ会が行なわれる。		
7月10日	墳丘西側は山側ともほぼ表土を取り除くことができた。		

- ついて作業を終えた。この状態で写真撮影を行なう。
- 7月26日 今日からしばらくの間、墳丘の北側平坦面の遺構確認調査を始める。この部分は排土地として予定している場所である。
- 7月29日 昨日の作業の続き。
- 7月30日 昨日の作業の続き。
- 7月31日 昨日の作業の続き。遺物は出土せず。
- 8月1日 昨日の作業の続き。連日大変暑い。
- 8月2日 9号墳の北側についても表土の除去作業を行なう。遺構は検出できない。今日よりしばらく現場作業を中止する。
- 8月19日 現場作業を再開する。台風12号の影響で風が強い。8号墳主体部内を4分割して、盗掘孔内の精査を開始する。各調査区は東南区を1、西南区を2、東北区を3、西北区を4とする。
- 8月20日 1、2区の精査を行なう。約20cmで石材に当たる。天井石の一部と考えられる。
- 8月21日 3、4区についても精査を開始した。そして盗掘孔より石室の状況が判り始める。
- 9月20日 重機により8号墳の西側平坦部の調査。さらに9号墳の北側についても表土剥ぎを行なう。
- 9月21日 重機作業のみ。
- 9月24日 石室前庭部の調査では5層から土師器高杯、須恵器、鉄滓などが出土した。鉄滓はこれで3点である。石室内はようやく全体を表わしてきた。全長8mぐらいの規模である。
- 9月25日 前庭部東区から須恵器杯身、埴、壺、土師器高杯などについて実測の後取り上げた。墳丘の調査では掘り下げを行ない、石室掘方ラインを検出した。
- 9月26日 石室内は北西部から1～4の4区分をして精査を開始した。前庭部では暗渠排水溝があることが確認された。東側へ抜けているようである。
- 9月27日 石室内1、2、4の精査を行ない、4区の左袖部付近で須恵器が原位
- 置を保持して検出された。2区では堆積土内から耳環が出土した。鉄製品もあるが、小破片である。前庭部では畦の実測を行なう。鉄滓が出土する。
- 9月30日 石室前面の畦の取払いを行なう。また排水溝の検出を続け、ラップ状に広がる部分で石材を検出した。
- 10月2日 8号墳は昨日の雨で足場が悪く作業を中止して、9号墳の表土剥ぎの作業を開始した。9号墳は西側に開口している石室を持つ古墳である。東南区を1、西南区を2、西北区を3、東北区を4とした。3区の墳丘裾部では須恵器甕の破片がまとまって出土した。
- 10月3日 久しぶりに青空が広がる。8号墳西側の掃除を行なう。石室前面では排水溝の上面ラインを検出する。
- 10月4日 石室入り口の閉塞石の写真撮影。その後石材の撤去を開始する。この最中にも鉄滓や埴の完形品が出土した。東へ延びる排水溝の検出も終える。
- 10月5日 墳丘の排土作業。午前中に雨となり、作業を中止する。
- 10月8日 8号墳の排土作業が終わり、9号墳へ移動する。石室の調査も進む。
- 10月9日 石室入り口部の排水溝の写真撮影。
- 10月14日 ようやく長雨も去り、調査が再開された。排水溝東端の断面を実測する。
- 10月15日 石室内の調査が進み、敷石の全体が明らかになってきた。また敷石から約20～40cmは整地土があるようである。墳丘カット面の調査も継続する。
- 10月16日 午前中は全体の掃除を行ない、その後写真撮影。排水溝については墳丘西へも延びていることが判明した。
- 10月18日 明日の空撮のため8号墳全体の掃除を行なう。
- 10月19日 8号墳の写真撮影。9号墳は墳丘の調査を継続する。
- 10月21日 8号墳の石室内の写真撮影のため掃除を行なう。
- 10月22日 8号墳は作業を継続。9号墳は墳丘の現状写真を撮影する。

- 10月23日 8号墳は石室と遺物の出土状況の撮影を行なう。9号墳は墳丘上部から掘り始めた。天井石は三枚が残っている。
- 10月24日 8号墳は石室内の実測の割り付けを行なう。9号墳は墳丘上部から掘り下げ、転落石の除去を行なう。
- 10月25日 9号墳の排土作業。
- 10月28日 9号墳の作業継続。8号墳は遺物と敷石の実測作業。
- 10月29日 昨日の作業を続行する。
- 10月31日 石室平面、墳丘断面の実測作業。
- 11月1日 8号墳の2回目の写真撮影。
- 11月2日 午前中は3回目の空撮を行なう。その後遺物の取り上げ。
- 11月5日 8号墳の墳丘は東西と北側の中央部に畦を残して、墳丘土を除去する事にした。東南を1区、東北を2区、西南を3区、西北を4区とする。9号墳は危険な状態にある天井石を取り除いた。左側の石材もかなり落下していた。
- 11月6日 1、2区の作業を継続する。石室内では側壁、奥壁の実測を行なう。
- 11月7日 2区でようやく石室掘方ラインまで達した。この間遺物の出土はない。
- 11月8日 午前中で雨となり作業を中止する。
- 11月11日 8号墳の石室では敷石の東側を半分ずつ外し始めた。奥壁付近では馬具が部分的に出土した。4区での作業では土師器破片が出土する。9号墳では閉塞石の写真を撮影する。石室全体は8m、玄室部幅1.4mである。
- 11月12日 8号墳の馬具の写真と実測の後取り上げた。敷石は東半分を外したが石材は平坦面を上面にしている。しかし加工痕跡は見られない。9号墳は閉塞石の実測を行なう。
- 11月13日 敷石全体を取り除いた。かなり凹凸があり、整地土そのものも固く締まってはいる。墳丘部は作業を継続する。
- 11月14日 整地面の露出状況の写真を撮影する。その後排土作業。墳丘4区では掘方の検出面まで取り終える。9号墳は閉塞石の半分を取り除いて、断面の実測を行なう。
- 11月15日 8号墳では奥壁際において鉄製品が出土した。9号墳石室内は奥から1～4区として精査を始めた。床面の敷石はないようで、奥壁際では須恵器がかたまつて出土した。
- 11月16日 8号墳の墳丘の調査を継続する。
- 11月18日 1、3区の調査を継続する。8号墳は石室の調査で壺2、杯4、高杯1、土師器杯2などが出土した。
- 11月19日 3区の墳丘中に石の溜まっているところがある。中腹より上部に集中している。石室内では整地土の除去をほぼ終えた。
- 11月20日 今日は木枯らしが吹く寒い日である。3区の石材は調査の結果2つの堅穴系小石室であることが明らかになった。このうち1は墳丘表土から掘方が見られた。天井石はない。
- 11月21日 堅穴系小石室の検出を終える。また8号墳石室の掘方についても全ラインを検出した。9号墳は墳丘南側と北側の断面図を作成した。石室玄門部にはかまち石状に二つの石が置かれている。
- 11月25日 9号墳は南面する土層の実測を行なう。
- 11月26日 8号墳は西への排水溝について調査を始めた。こちらも石組の排水溝で規模は東側のものより大きい。9号墳は石室内の掃除を行なう。
- 11月29日 8号墳石室入り口と石室内縦方向の断面実測。奥壁と掘方の関係は下4段が掘方内にはいり、これより上の石は盛り土により覆われている。9号墳は2区の墳丘土を除去し始めた。
- 11月30日 8号墳の西側排水溝は端部を検出するまでにはいたっていない。また東側の排水溝との取り付けも不明である。9号墳は昨日の作業を継続する。
- 12月2日 昨日の作業の継続。
- 12月3日 西側の排水溝は途中で二列に分岐し5mほどでまた一列に戻る。端はラップ状に開き素掘溝で谷地へ流れている。
- 12月4日 堅穴系小石室の断面実測。
- 12月5日 堅穴系小石室1は床面まで調査が

	進んだ。遺物はないようである。 2は途中で終わる。		につながっている。
12月6日	堅穴系小石室2の調査も終える。 写真撮影。9号墳は墳丘土を取り 終えた。	1月21日	東側と南側の掘方ラインの検出を 行なう。
12月9日	堅穴系小石室の実測を開始する。 東側排水溝の蓋石を取り除き、内 部の掃除を行う。9号墳は北側の 盛土を調査する。	1月22日	石室基底石の据え付け跡の調査を 行ない、小形の石材が入れられて いる。根石状の使い方をしている。
12月10日	東側の排水溝は内部の土砂からの 遺物は出土しなかった。堅穴系小 石室2の実測を開始する。	1月23日	奥壁基底石の据え付け方は、直接 地山に置いてその前面に締まった 粘土質の土で安定させている。
12月12日	9号墳の掘方全体の検出を終えた。 南側は1m以上の幅で広く取って いる。	1月24日	昨日に引き続き掘方内の調査を継 続する。地山に小ピットが作られ 玄門部にも根石が置かれている。
12月13日	8号墳西側排水溝の断面と東側排 水溝も石16部分の断面図の作成。 午後から9号墳の写真撮影。	1月27日	8号墳の掘方全体の実測を行なう。 奥壁基底石の西側から鉄鋤先が出 土した。出土状況から副葬品とは 違う意味合いがあるであろう。
12月16日	8、9号墳とも写真撮影のために 掃除を開始する。	1月28日	8号墳は写真撮影の準備を行なう。 9号墳は実測準備を行なう。
12月17日	終日空撮を行なう。	1月29日	午前中に9号墳の掘方の実測を行 なう。午後から8号墳の断面写真 の撮影を行なう。
12月18日	9号墳の平面実測。8号墳は墳丘 の調査継続。	1月30日	午前中は断面の写真撮影。午後よ り断面実測。
12月19日	8号墳の奥壁石を出しながら掘方 の検出を行なう。9号墳は奥壁と 側壁の実測を行なう。北側側壁は 最下段以外は羨道と玄室の区別が 付かない。	2月4日	東側排水溝の実測。
12月24日	8号墳の北側の土堤の精査と掘方 ラインの写真撮影。9号墳は南側 壁の実測を行なう。	2月5日	西側排水溝の蓋石を取り除く。途 中で分岐する部分では南側が大き くなり、丁寧な配石を行なってい る。
12月25日	9号墳の遺物の取り上げを行なう。	2月6日	中央と西側の排水溝の掃除を行な う。
平成4年(1992年)		2月7日	西側排水溝の掃除を行なう。午後 は中央排水溝の未検出部分につい て調査を行なう。
1月7日	8号墳の掘方の実測を行なう。天 気が悪くはかどらない。	2月10日	西側排水溝の写真撮影を行なう。
1月10日	午後石室の実測。	2月11日	中央排水溝の実測。
1月13日	午前中は石室内の写真撮影。	2月13日	中央排水溝の立面図の作成と東西 溝の平面図の作成。
1月14日	8号墳は奥壁の一部を残して全て の石材を取り除いた。基底石の大 きさが不揃いで、30~40cmを据え 付けている。	2月14日	昨日の作業の継続。
1月16日	9号墳の石材を取り除いて掘方の 調査を行なう。全体に30~40cmの 溝が回っている。	2月15日	〃
1月17日	9号墳の写真撮影。	2月16日	〃
1月20日	8号墳の西北隅の掃除を行ない、 掘方ラインの検出を行なう。南北 ラインは直線で奥壁の裏側ライン	2月17日	〃
		2月18日	〃
		2月19日	南カット面の断面図の作成を行な い、全ての作業を終了した。

第3章 8号墳の調査

第1節 墳丘の現状と規模（図3）

8号墳は、1～5号墳が北側の丘陵から派生した尾根筋に立地しているのに対して、豊田山丘陵の最高所から北へ派生した尾根筋上に築かれている。このような立地環境からは、1～5号墳とは同一の支群として取り扱えない面もある。

墳丘の現状は、標高約150m前後に立地し、北へ派生した尾根を横断するように切断した、いわゆる丘尾切断の山寄せの立地を呈している。墳丘南側の尾根切断面は、現状では高さ3m以上の急な法面をつくっている。

墳丘の現状は、東西約20m、南北約16mの規模で、高さは約4mである。墳丘中央部には、南に向いた盗掘孔が大きく開口している。そして石材の一部も露出している。墳丘は腰高で裾部の残存状況も良好である。しかし葺石などの外部施設は見られない。墳丘の東側は裾部の形状が残らず、急斜面となって道路に落ち込んでいる。北側については裾部が比較的よく残存し、その外側は緩く傾斜するものの平坦面を作っている。ただ濠状の窪みは現状では見られず、また発掘調査の結果でも検出していない。

以上のようなことから、墳丘の規模は直径約20m、高さ約4mの円墳と言えよう。しかし墳丘形状は完全な円を描かず、南側のラインは法面に沿って直線的である。

8号墳の北側には、規模の小さい古墳状隆起があり、調査を行ったが主体部などは検出されなかった。また8号墳と9号墳の間には谷筋が入るが、この最奥部には斜面地をコの字形に平坦にした地形が観察された。

第2節 遺構の検出概要（図4）

8号墳は墳丘中央部に南側に開口する横穴式石室を1基検出した。天井石が玄室部奥に2石分が残存しているが、これ以外の天井部は取り外されていた。しかし石室のこれ以外の部分については良好な状態で検出された。

石室前面はかなりの土砂が堆積していたが、調査の結果、墳丘裾部を廻り込むような状況で東西方向に伸びた墓道を検出し、この下部で暗渠排水溝を検出した。

排水溝は石室内では羨道部中ほどを起点とする中央排水溝と、東西の排水溝で、いずれも側壁と蓋を人頭大の礫石を使用して組まれている。特に西側のものは入念に組まれ、一部では水路が二重に分岐している。

8号墳の墳丘調査では、西南区において2基の堅穴系小石室が検出された。東西方向に残した観察畔によると、8号墳の墳丘を穿って墓壇を作っていることが明らかになった。

このほかには、墳丘北側で円筒埴輪片を1点検出したが、墳丘を囲繞する埴輪は検出されず、8号墳では埴輪は使用されていないと判断される。また葺石についても明確なたちでは検出されていない。

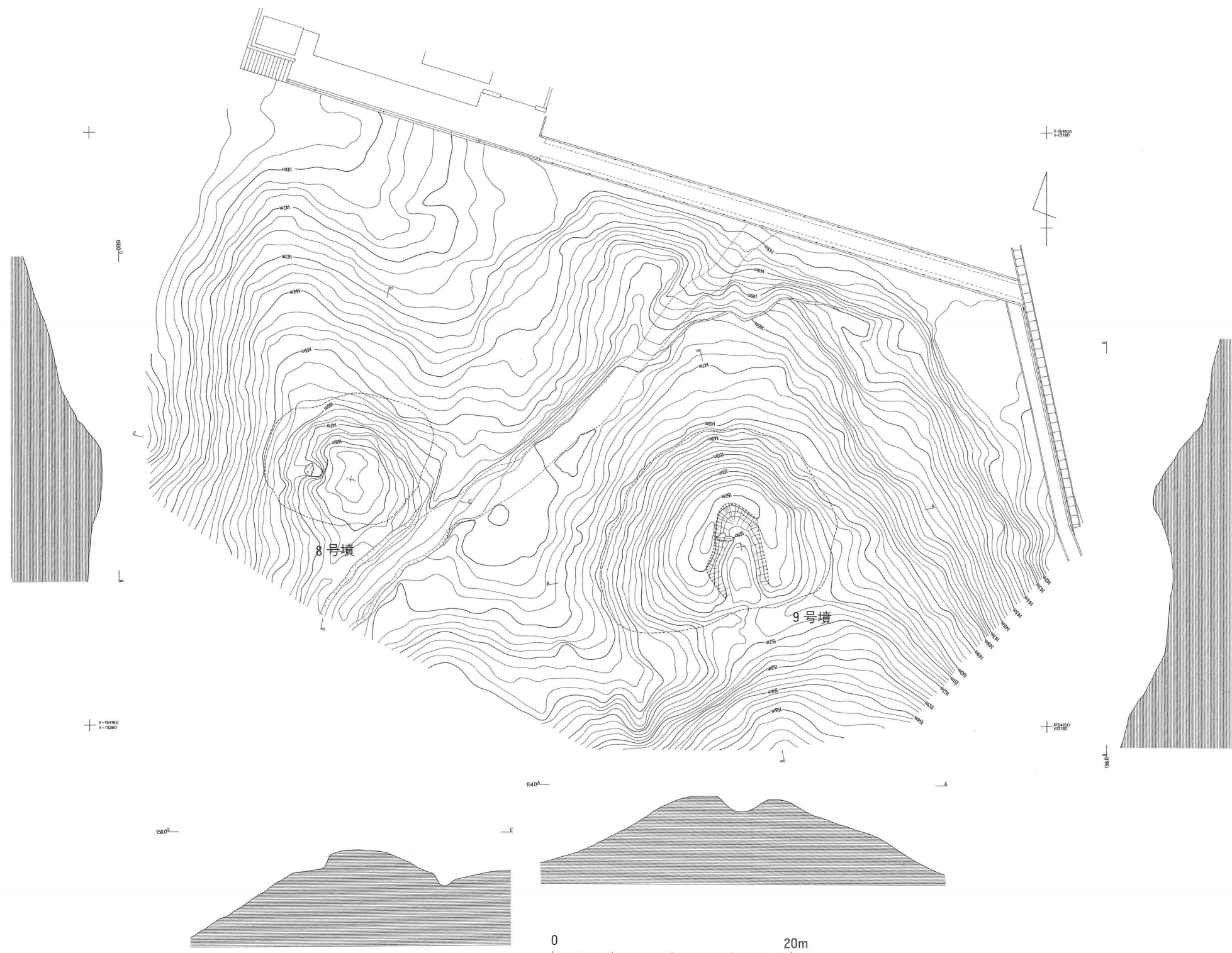


图3. 8、9号墳現況測量図

X-154120
Y-13200



X-154150
Y-13200



(S = 1/160)

图4. 8号墳遺構検出状況

第3節 墳丘断面と墳丘の築成（図5）

墳丘の築成は裾部からすべてが盛土によっているのではなく、下半部は地山整形により円墳状に形作られ、中央部には石室構築のための墓壙が穿たれている。石室墓壙については後述することになるので、先に墓壙と墳丘の築成状況を見る。

図5の1に墳丘東西の横断面を示すが、石室構築の墓壙の東西幅は4.1mあり、二段墓壙で下部1.6mは垂直の壁面を作っている。

上部1.5mは平坦面を作り、それより西側へは穏やかな斜面で墳丘裾部まで続いている。墳丘断面で見ればAは石室裏込め土、Bは天井石の被覆土、Cは盛土と考えられる。Aは20層に分層されるが、墳丘土に比較して細かく入れられている。そして下部より茶褐色粘質土に灰青色粘土のブロックを含む土が固く締められている。この層によりほぼすべての側壁が被覆される。Bの天井石を覆う土は、70cmの厚みのある暗灰青色粘質土できつくは締まっていない。Cおよび西側の盛土は、茶褐色粘質土系の土が全体に多く使用されている。墳丘裾部は表土が切れる地点に求めると、二段墓壙が穿たれる上面の肩部から西側へ10mとなる。

なお墳丘の見かけ上の高さは、墓壙底からは4.15mで、盛土部は2.3mとなる。このことは見かけ上の半分が地山整形によって墳丘を形作っているのである。これは東側の墳丘断面でも同じように観察できる。東側の地山整形による上部の平坦面はやや広く2mを測る。墳丘裾部までは西側よりも緩い傾斜で東へ整形されているが、裾部そのものは判然としない。一応墓壙肩部から東へ9mの地点が推定されよう。

次に図5の2では墳丘縦断面を示す。ただ中央より左側の断面（縦断面1）は石室を少し外れた部分の盛土の様子であり、右側（縦断面2）は石室奥壁の中央を通る縦断面を示しているため、層位面が必ずしも一致しない。

縦断面1は茶褐色粘質土と灰茶色粘質土の互層で、層厚は30～40cmと厚いが、叩き締められたような硬さはない。またこの部分では



写真1. 墳丘東西横断面土層

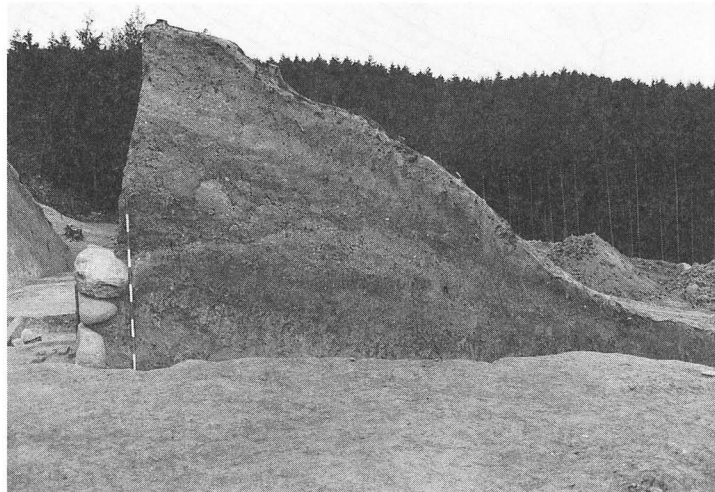
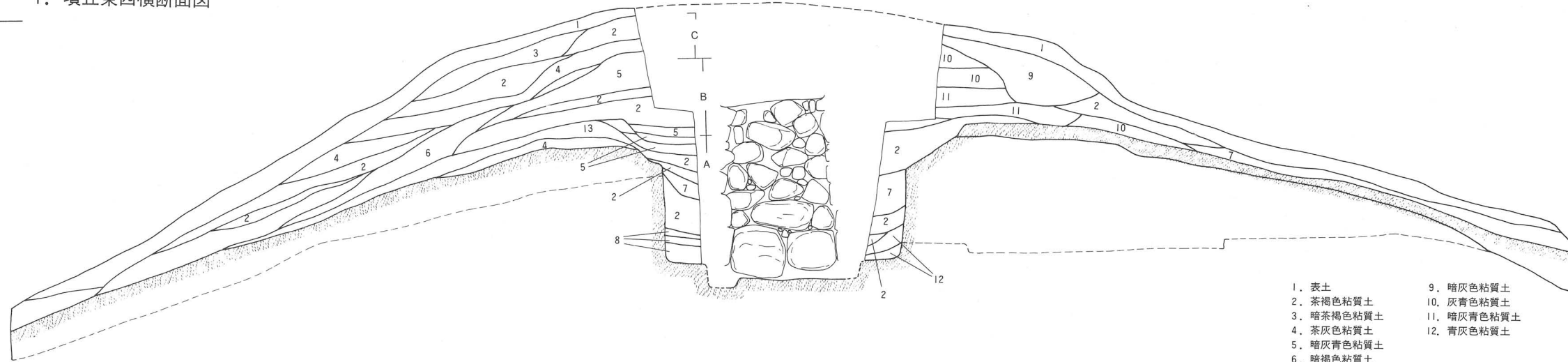


写真2. 石室北側墳丘縦断面土層

1. 墳丘東西横断面図

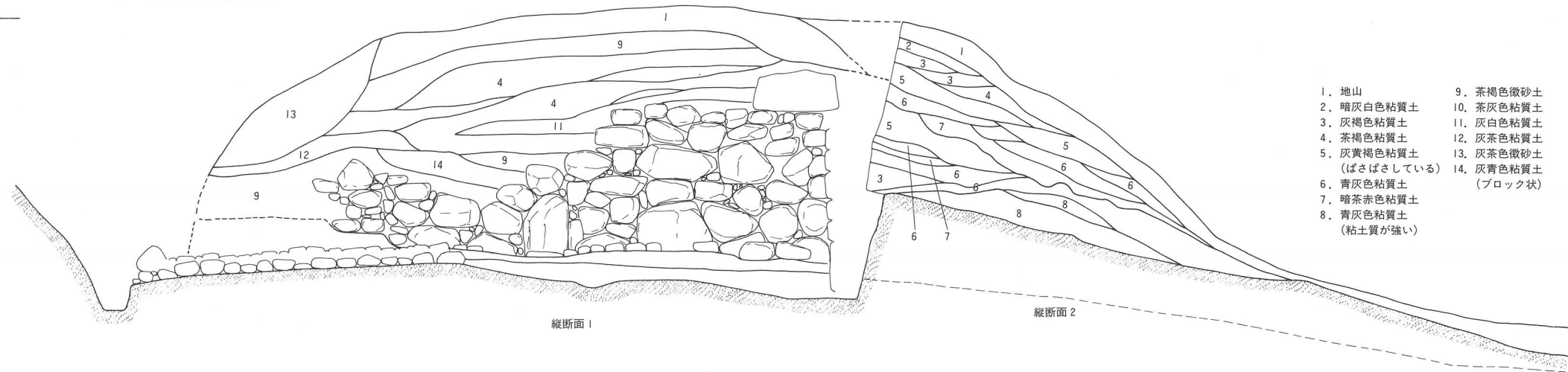
L=153.0m



- | | |
|----------------------------|-------------|
| 1. 表土 | 9. 暗灰色粘質土 |
| 2. 茶褐色粘質土 | 10. 灰青色粘質土 |
| 3. 暗茶褐色粘質土 | 11. 暗灰青色粘質土 |
| 4. 茶灰色粘質土 | 12. 青灰色粘質土 |
| 5. 暗灰青色粘質土 | |
| 6. 暗褐色粘質土 | |
| 7. 灰茶色粘質土 | |
| 8. 茶褐色粘質土
(灰青色粘土ブロック含む) | |

2. 墳丘南北縦断面図(西面)

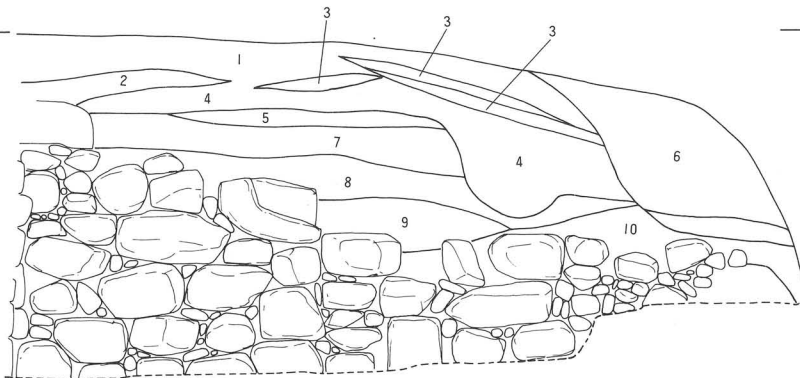
L=153.0m



- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1. 地山 | 9. 茶褐色微砂土 |
| 2. 暗灰白色粘質土 | 10. 茶灰色粘質土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 11. 灰白色粘質土 |
| 4. 茶褐色粘質土 | 12. 灰茶色粘質土 |
| 5. 灰黄褐色粘質土
(ばさばさしている) | 13. 灰茶色微砂土 |
| 6. 青灰色粘質土 | 14. 灰青色粘質土
(ブロック状) |
| 7. 暗茶赤色粘質土 | |
| 8. 青灰色粘質土
(粘土質が強い) | |

3. 墳丘南北縦断面図(石室部分東面)

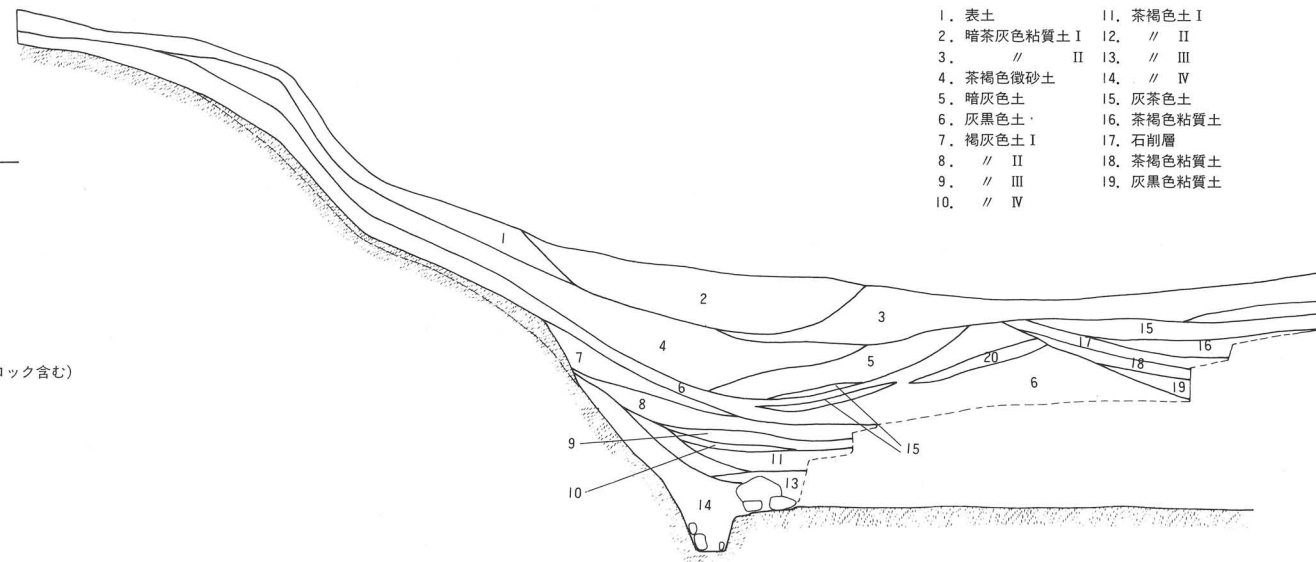
L=153.0m



- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. 表土 | 7. 灰白色粘質土
(青色粘土ブロック含む) |
| 2. 茶灰色微砂土 | 8. 灰白色粘質土
(赤味が強い) |
| 3. 灰白色粘質土 | 9. 赤褐色粘質土 |
| 4. 茶灰色粘質土
(灰青色粘土ブロック含む) | |
| 5. 茶褐色粘質土 | |
| 6. 茶灰色土 | |

4. 墳丘南北縦断面図(暗梁排水部西面)

L=153.50m



- | | |
|--------------|------------|
| 1. 表土 | 11. 茶褐色土 I |
| 2. 暗茶灰色粘質土 I | 12. // II |
| 3. // II | 13. // III |
| 4. 茶褐色微砂土 | 14. // IV |
| 5. 暗灰色土 | 15. 灰茶色土 |
| 6. 灰黒色土 | 16. 茶褐色粘質土 |
| 7. 褐色土 I | 17. 石削層 |
| 8. // II | 18. 茶褐色粘質土 |
| 9. // III | 19. 灰黒色粘質土 |
| 10. // IV | |

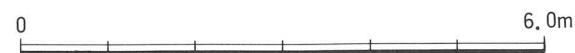


図5. 8号墳墳丘断面図

水平に近い堆積を示している。墳丘の南側に見られるレンズ状の土層(13)は、茶灰色のさらさらした山土状で厚さが90cmにもなる。同様の形状の堆積土が東側(16)にも存在しているところから、石室を最終的に閉塞した土であると推定される。

石室閉塞土は東西の両断面では、盛土を切っていることがわかるが、追葬が石室内で確認されなかったことを考えると、石室がいったん作られた後に、入り口部を含めて盛土により完全に覆われたことが考えられよう。そして埋葬時に入り口部だけが開口され、埋葬が終了した後に再び別の山土により閉塞されたのである。

縦断面2は奥壁部の基底石を3石残して、墓壙と墳丘の関係を観察した。奥壁部の墓壙は約15度の角度で1.45mが立ち上がり、これより北側は緩く傾斜している。そしてこの傾斜面には黄灰色粘質土が固く締められ、墓壙肩部から2.3mは水平に整地され、これより北は階段状に墳丘裾部まで作られている。この固く締められた整地土は、奥壁を据え付ける作業場的な整地面と考えられる。奥壁を構成している大型の石材は、ちょうど三段目が地山掘方の上面に一致しているところからも、三段目までは堅固な構築を行い、これより上部については、盛土による石室の被覆を行ったのである。

墓壙の切断面と奥壁の裏側は、広いところでは50cm足らずであり、墓壙のカットラインに接するように石材が据え置かれている。これは石材を安定させる最良の構築方法であると考えられよう。奥壁基底石の底部は地山との間に暗灰色の整地土を入れて安定させている。盛土については東側の横断面で見られるものと同じように、第6層は天井石までの石材の被覆用で、灰褐色粘質土と青灰色粘質土が互層に盛られている。上層の墳丘盛土は、高さ2.6mで墳丘裾部からは約4mにあたり、全体の $\frac{1}{2}$ を地山整形により墳丘の形状を作り出しているのである。

墳丘裾部は、奥壁墓壙の掘方下部からは6.7mの地点であり、現況で観察された裾部と一致している。墳丘北側はほとんど改変を受けていないものと判断された。

第4節 掘り割と丘尾切断

8号墳の調査前における墳丘の観察では、墳丘南側裾部と尾根頂部は約3mの比高差があり、また裾部周辺は幅約2m程度の掘り割状の窪地が認められた。そして図4に示す通り、墳丘南側の尾根は標高155m付近から150mまでの垂直方向で5m、東西の幅が24m、傾斜角度35~40度で尾根が切断されている。これは墳丘築造当初の大掛かりな造成工程を示すものである。

掘り割は墳丘の南側にあり、これはちょうど暗渠排水溝を埋めて



写真3. 石室前庭部堆積土

つくっている。東側は約11mで幅は入り口部で2m、東端部は1.5mである。西側は長さ約13.5m、幅は中央部が約2mである。西端付近はラッパ状に広がる。掘り割はこの南側以外には検出されない。

図5の4は掘り割と石室前面における土砂の2次堆積状況、暗渠排水溝の埋め土の縦断面を示したものである。この断面図の1～8までは掘り割を埋めた2次堆積土、9～14は排水溝を埋め戻した土層、15～19は石室内の2次堆積土などである。

まず1～8までの土層について説明するが、実は6層を境として明瞭に上下に区分されている。6層はやや締まりがあり、全体にわたって灰黒色を呈している。この層が石室前面の上部にまで右上がりに厚く堆積していることから、この層の上面がかなり長期間露出し、石室前面を2次に被覆した層位面であると推定される。これより上部の比較的厚みのある堆積土は、盗掘にともなって破壊された墳丘土であると考えられる。

なおこの6層は尾根側でも斜面に張り付いている。斜面上から須恵器片が出土するところから、尾根頂部に築かれている古墳に由来する墳丘土が流出したものであろう。

7～14の茶褐色土と褐灰色土は暗渠排水溝を被覆した土層である。そして7層の上面は細かい地山土でしかもある程度の締まりがあるところから、古墳築造時の露出面であると考えられる。遺物はこの中からは出土していない。

15～19は石室前面の堆積状況を示している。17層は石屑を大量に含む盗掘時の層位面であり、18層は石室開口時の床面と考えられ、6層に対応している。

第5節 墓壙と石室架構

墓壙の調査は石室奥壁の基底石のみを残して実施した。発掘を開始した当初は、古墳の築造予定地をすべて平坦面として造成していると予想していたが、墳丘盛り土をすべて除去した結果、実際の盛り土部分は約 $\frac{1}{2}$ であり、下部は地山整形による墳丘の作り出しを行っていることが確認された。中央部は石室構築のための墓壙が南北約12m、奥壁部での深さ約1.6mの規模で地山が穿たれている。石室石材の搬入は南側の掘り割部分では狭いため、墳丘上面から陥れるという工程があったものと推定される。この点については改めて述べる。

墓壙の平面形状(図7)は、外側のラインを見れば玄室から羨道に向かって狭まる徳利形を呈している。そして排水溝用の素掘溝も一体的に作られている。

各部の規模を最初に示しておく、墓壙掘方の全長は石室前面のカット面から南北12mである。この古墳

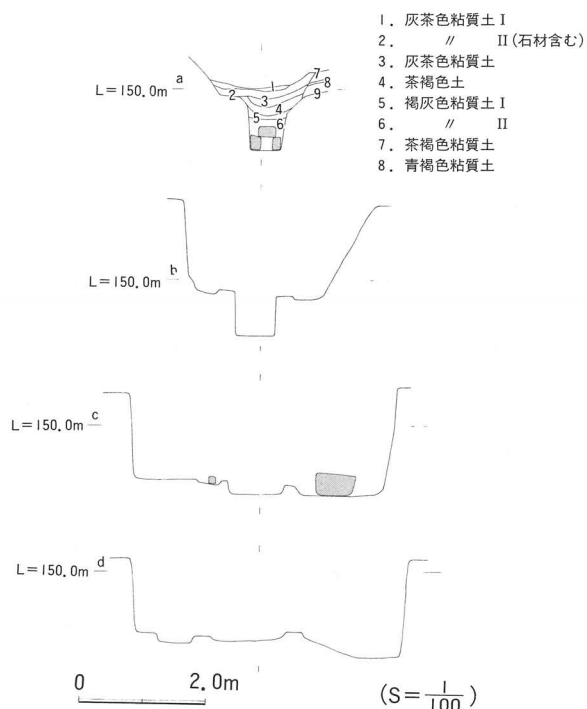


図6. 8号墳石室墓壙と中央排水溝横断面図

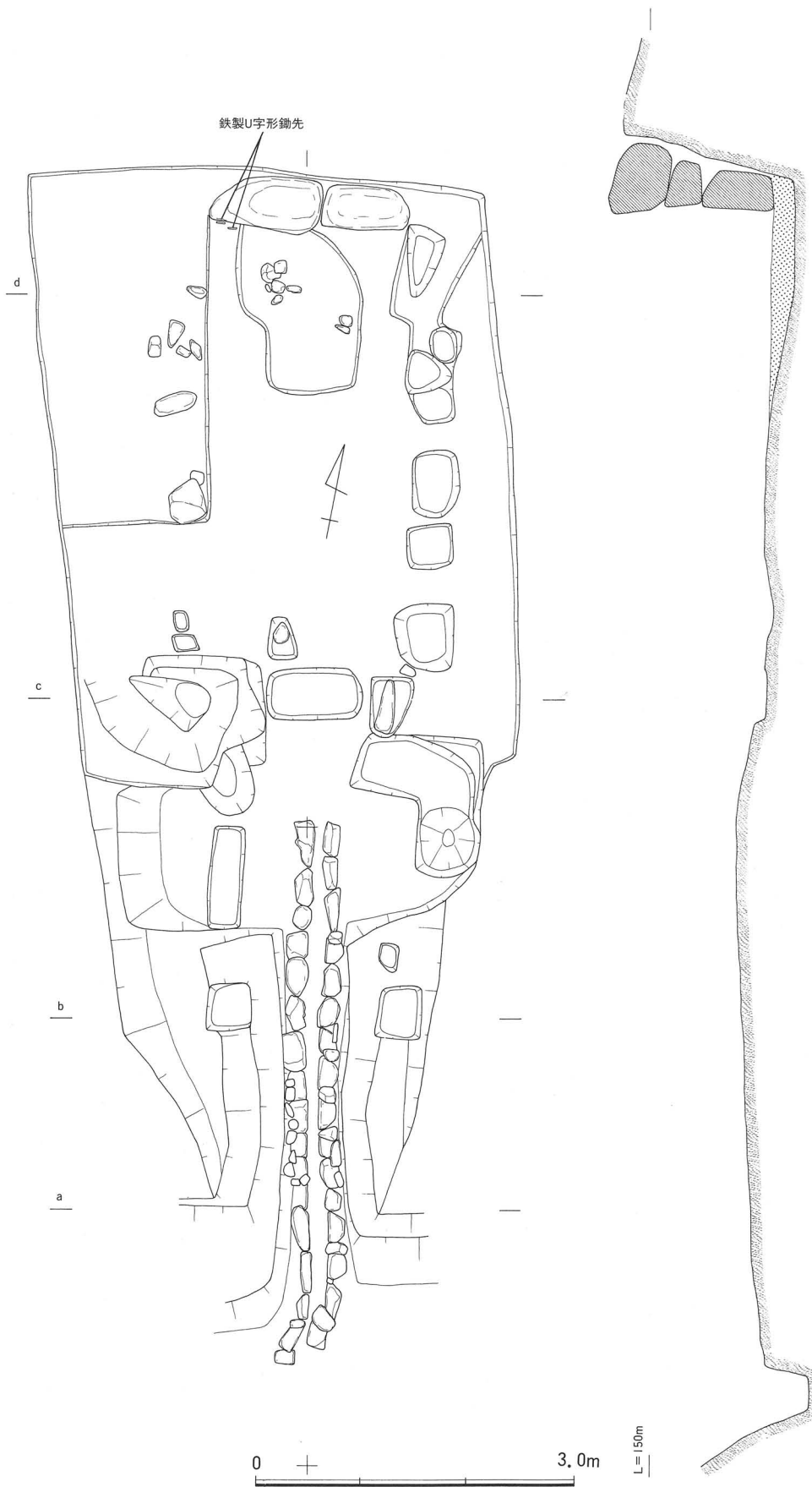


図7. 8号墳墓壙と中央排水溝検出状況 (s = $\frac{1}{60}$)

は石室羨道入り口部と墓壙掘方の入り口部は一致していないが、墓壙入り口部の幅は1.5mあり、素掘溝は南側約1mから始まる。図6の断面bでは墓壙上面幅は3.05m、深さ1.4mである。排水溝用の素掘溝は幅65cm、深さは65cmである。cはちょうど玄室入り口部に当たるが、墓壙幅4.25m、深さ1.35mである。dでは幅4.4m、深さ1.3mである。図7の墓壙中央部の断面で見れば排水溝の最奥部が高くなり、石室側へはかなり急な傾斜面となる。これでは排水溝としての機能はないと判断される作りである。

図8は墓壙掘方と石室基底石の配置状況を重ねたものである。基底石を配置するための通常の掘方は布掘り程度であるが、この古墳の場合は、玄室と羨道の配石を当初から意識した掘方がなされている。このことは、基底石の配置が掘方にほとんど重なるようにして一致していることから判断される。玄室左側壁は5カ所の方形ピットのラインにほぼ一致し、右側の側壁は大型方形掘方ラインに一致しているのである。

羨道部分も同様の一致が見られる。ただ玄室入り口部にあるL字形の土壇は左右でずれを見せている。右側の土壇が掘り返された跡が見られるところから、一個分を玄室側へ後退させ、この結果、左側の掘方も羨道部分が一石分だけ追加されたことが考えられる。このようなことから、玄室入り口部は左右で一直線には一致していないのである。玄室入り口部の中央には90×50cmの方形土壇が穿たれているが、この部分はちょうど框石が2石配置された地点に当たっている。

土壇内には3カ所に自然石を入れているものがあるが、これは基底石を安定させる

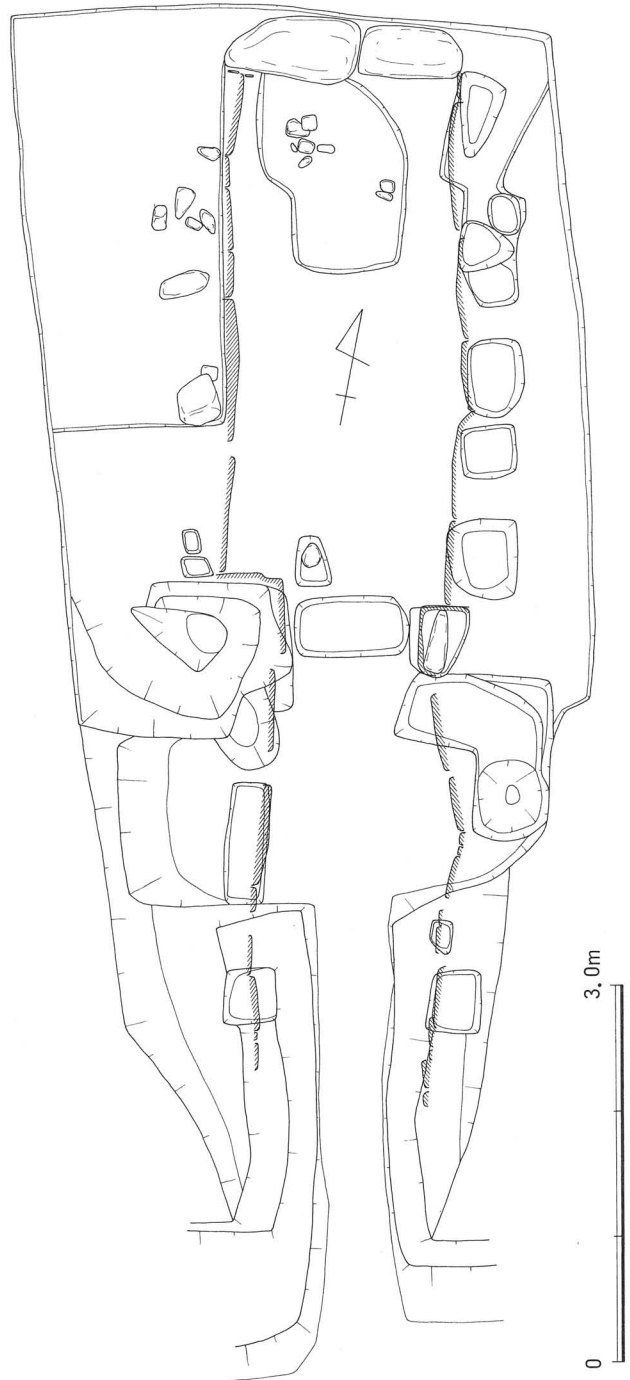


図8. 8号墳石室基底部と墓壙 (S=1/60)

根石的な機能を持たせたのであろう。ただ方形土壙自体はかなり早い時点で埋められてしまうため、基底石の基準として機能するものか疑問がないわけではない。また羨道入り口部付近にある土壙は左右対称の地点にあり、羨道部の石はこれを越えていて、どのような意味を持つものか考えがたい。

玄室部左右の基底石内側ラインと掘方の空間を見ると、左側は約90cmから110cmであるのに対して、右側では約140cmから170cmと2倍の空間がある。左側は基底石を配置すれば、奥壁基底石と同じような状況を呈するものと思われる。

右側部分は3.35×1.6mがさらに浅く穿たれている。恐らくこの空間が石室石材を墓壙内へ搬入した作業場的な空間であり、配石の工程としては右側壁を最後に仕上げたことが考えられる。

両側壁の墓壙基底ラインは、5m地点で右側は15cm、左側では45cmの立ち上がりを作る。そしてこのラインから入り口部の側壁の積み方が大きく変化する。

以上が墓壙掘方の示すところであり、玄室部の左側壁と奥壁は3～4段は地山掘方内に納まることから、奥壁のように、掘方法面に対して接するように配置すれば、非常に安定した石室構造とすることができる。他方、墳丘盛土の量は大幅に削減することが可能となろう。

石室内墓壙整地土（図10網目部分）は、石室内の墓壙底では奥に行くにしたがい深くなるが、敷石を設置する以前に、暗灰茶色粘質土を厚みをもって整地している。しかし土質は柔らかく叩き締められているような状況ではない。また整地土内からは遺物は出土しなかった。

第6節 石室（図9・10）

図4に8号墳において検出した遺構の関係を平面図に示す。墳丘は盛り土を除去した状況であり、これにより地山整形と尾根の切断の関係が良く観察される。墳丘は円墳の状況になく、北東方向と北西方向では地山の整形が強い。

石室については改めて触れるが、ここでは石室全体と暗渠排水溝の関係、および墳丘状に作られた堅穴系小石室1と堅穴系小石室2の関係を示しておく。もちろん暗渠排水溝は地表面に現れることなく、この部分は石室への通路あるいは墓道としての機能が考えられよう。

図9は石室検出の平面図である。天井石は当初2石が架構されていたが、手前の石は転落する恐れがあるところから、この図面を製作する以前に取り除いた。

石室の閉塞の状況は自然石を乱積みするだけで、羨道入り口部にはすでに残っていない。わずかに掘り割部分に残るのみである。しかし図5の2、3における縦断面では、左右の両端部に石室入り口部を閉塞したと思われる土が観察されるのである。石室内には追葬が認められないところから、埋葬が行われる以前に一旦墳丘が完成され、埋葬時に再び開けられた入り口部が、地山土により最終的に閉じられたと推定される。

石室構造（図10）石室は南に開口する横穴式石室である。調査当初は山がまじかに迫るため、西あるいは北への開口が予想されたが、盗掘穴の方向に開口していた。しかしこの開口方向は、山を目前にしていることに変わりなく、また石室内に溜まる水の排水も調査の結果では機能していなかった。

石室は両袖式で玄室部は敷石により床面を作る。羨道部の敷石は不明である。石室の規模は全長8.18m、玄室部の長さは4.25m、幅は奥壁部で1.6m、中間部では1.75m、玄室入り口部では1.7mである。玄室部の天井部までの高さは奥壁部では2mであるが、敷石の下は約50cmの整地土が入られている。整地土の厚みは墓壙の地山ラインが入り口部から奥にかけて傾斜しているため均一ではない。

羨道部は長さ3.97mあり、入り口部の幅は1.27m、中央部は1.4m、袖石部では0.98mである。羨道中央部付近がやや乱れた石の並びを見せている。

奥壁 床面での幅は1.65m、高さは2.1mである。しかし地山面からは高さは2.9mである。整地土と敷石のために基底石と第二段の石はほとんど見えない状況である。

石材は自然石を横方向に6～7段を積んでいるが、小口面の調整は見られない。壁面の内側へのもち送りの傾斜は約1.5度あり、強い傾斜角度で

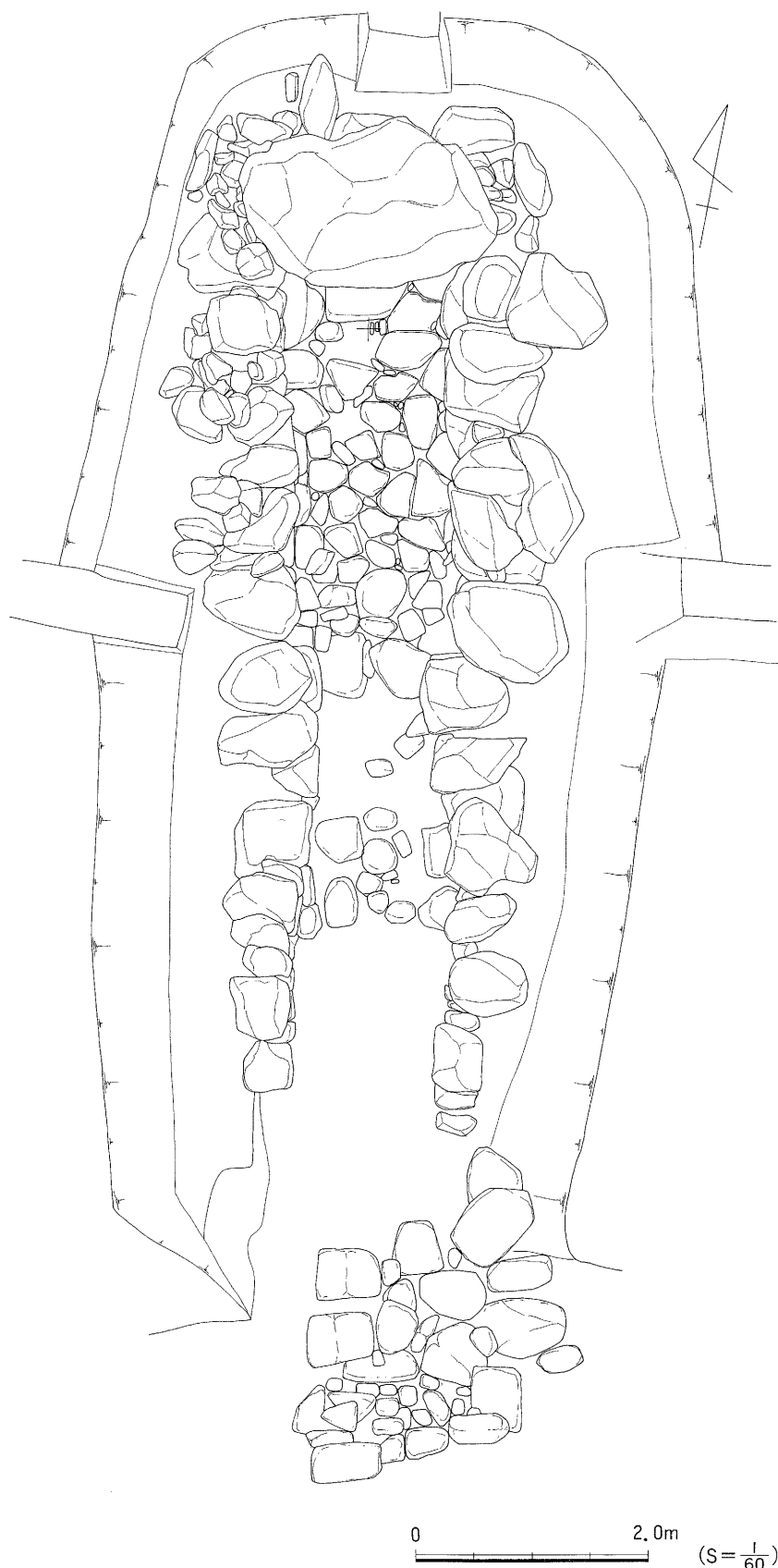


図9. 8号墳石室現況平面図

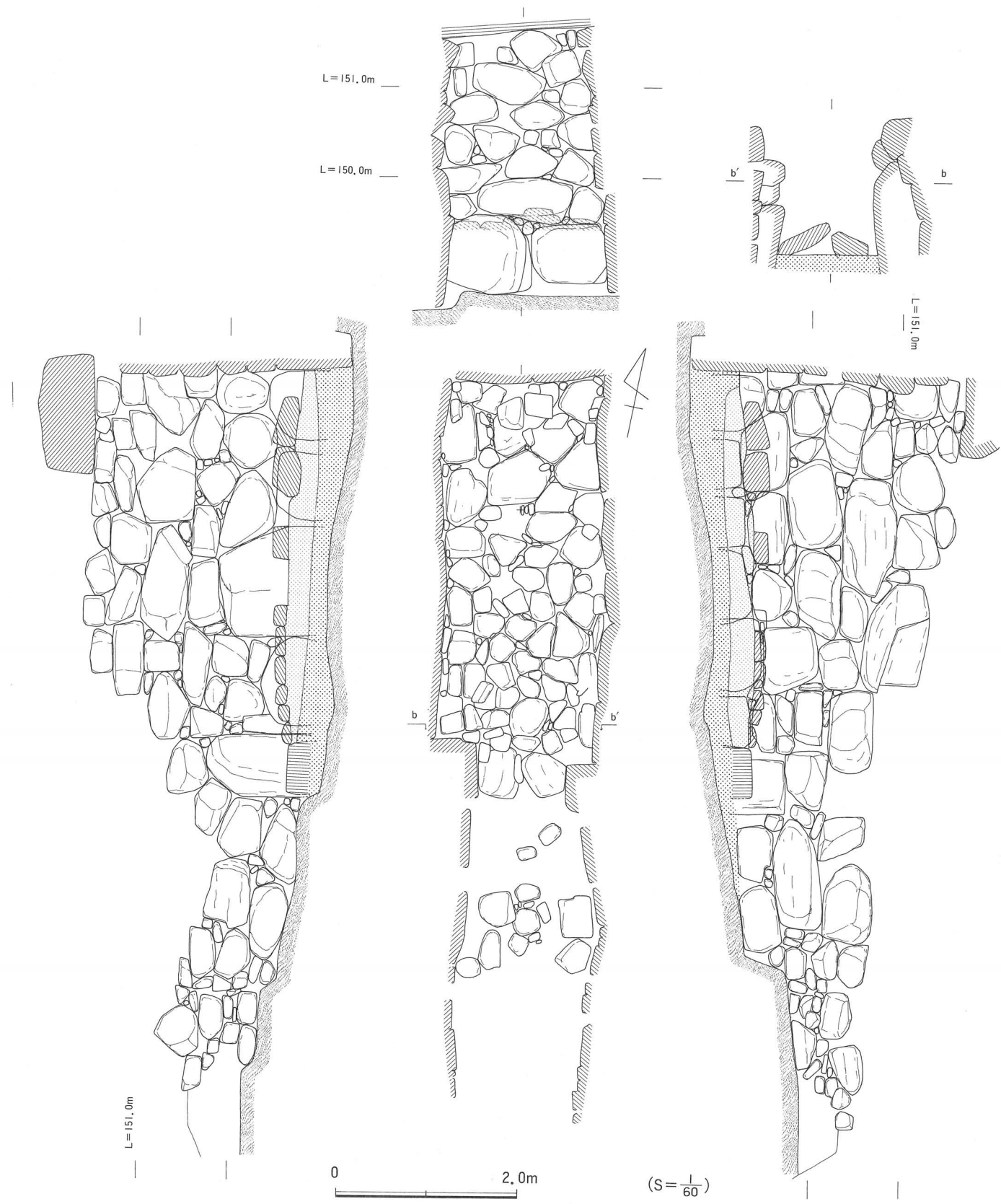


图10. 8号墳横穴式石室実測図

はない。

側壁 右側壁の架構の特徴は、玄室部、羨道部と羨道入り口から1.3mの3カ所に分けることができる。まず玄室部では袖石と基底石が立てて使われる。袖石は100×70cmの大型石であり、基底石は小さな石材でも80×50cm程度の大型石を使用し、一石ごとに高低差をつけて、この間にはさらに小型の石材が空隙を埋めている。そして水平方向のほぼ中間で（敷石から約90cmの高さ）横方向の目地通りが見られる。羨道部では入り口より1.3mの間が、基底部から小型の石材を使用し、積み方もやや乱雑である。調査当初は追葬による積み替えが行なわれたものと考えられた。図10では側壁に対しても墓壇の縦断面と敷石のレベル面を入れている。これによると玄室、羨道部とも基底石は半分以上が埋まる結果になる。

左側壁は袖石を立てる以外、羨道部まで石材を横方向に使用している。そして基底石から3段目には横方向に目地を通して、羨道入り口部は右側に見られるように、ここでも入り口2mほどは小型の石による乱雑な積み方が見られる。

また右側壁で見られたが、基底石が床面敷石によりほとんど見えない状況となり、2段目があたかも基底石となっているのである。石室平面図の基底石配置状況図もこのため2段目から書かれている。

天井石 天井石は当初は2石残存していたが、手前の石には亀裂がはいり今にも石室内に落ちかけていた。このため玄室最奥部のみを残して調査を行なった。最奥部のもは東西幅約2m、南北幅約1.5m、厚みは50cm以上の大きさがある。玄室部では、天井石の架構は3枚で構成されていたものと考えられる。

床面敷石 羨道部の敷石はほとんど残存していないが、玄門部にあたる床面では框石が2石置かれている。現状では中央部で合掌するように、両側から迫り上がったような状態になっている。

玄室部の敷石は奥から約2mにやや大きな石材が使用され、これより玄門部にかけては小型の石材が並べられている。すべての石材が自然石のままのため、敷石上面は均一な状況になく凸凹が激しい。また棺台に利用できる石材も見られない。

石室内整地土 石室墓壇内のうち、玄室部と羨道部の5m付近から内側では、墓壇底部が奥に向かって傾斜しているため、敷石との間にはかなりの厚みをもって整地土が入れている。羨道部から玄門部までは茶褐色砂質土、玄室部では暗灰褐色粘質土が入る。そして奥壁基底石の部分では、青灰色粘土が石材の底部を巻くように裏込め土として入れられている。この部分では整地土の厚みは約30cmである。ただ整地土の性状としては、固く締められているわけではなく、敷きつめただけという状態である。両側壁部では石の底部には入れていないところから、奥壁基底石が石室構築では最初に設置されたものと考えられる。また整地土は敷石を除去した状況では、中央部が盛り上がり平坦面を作っていない。

第7節 排水溝（図11・12・13）

排水溝は石室羨道部から南へ延びる中央排水溝と、墳丘掘り割に沿って延びる東西列の2本の排水溝で構成されている。3本とも小型の石材を使用して、側壁と蓋を作る構造である。底部に

は石組は見られない。各々の規模や特徴については後述するが、この排水溝は最終的には石室内からの排水の機能が果たされていないということである。どのような経過でこのような事態にいたったのか興味深いところであるが、結論的には石室全体の墓壙を掘削する段階での石室底部のレベルと排水溝底部のレベル設定に齟齬ができたのではないかとと思われる。排水溝の設置順序は西排水溝→東排水溝→中央排水溝と考えられるが、この点についても後述する。各排水溝は中央、東、西の順序で説明を加えたい。ただ東西排水溝は墳丘に沿って設置されているため、実測については立面図においてこのカーブに見合う理論的な図面が取れていない。立面図の全長がやや間延びしている。

中央排水溝 (図11) 中央排水溝は羨道の半ばを起点として南へ約5m設置されている。このうち起点の1mは素掘溝を外れて構造物が作られ、素掘溝そのものは全長3.5m、幅は北側では70cm、中央部では50cm、南端部では90cmの規模で開口部に行くにしたがい広がる。深さは底部の起点と南端とは約30cmの比高差があるが、底部が石室の奥に向かって傾斜している。このため、実際の排水溝としては機能していない。石組構造は蓋石と両側壁により構成され、蓋石は25石よりなり、40×20cmの自然石を羨道部から配置し、南端では65×42cmの一回り大きな石を置いている。厚みは40cm程度あり、中央排水溝と東西の排水溝の合流点を象徴的に示すものと考えられる。

側壁の構成は、石材の長辺を横にした一段組である。石材は40×20cm程度で、このことは蓋石の石材と基本的には同じものを使用している。石組による平面的な規模は、高さ20cm、幅は10～20cmである。南端部では西側へ少し屈曲している。また起点での1m分は素掘溝からはみだし、墓壙底に直接置かれている。側壁石の上面には部分的に細かな石が挟まれているが、これらは蓋石の安定を測るためのものであろう。

図6は3m付近の暗渠の埋土状況を示している。上部の2層は2次的な堆積土であり、これより下層の4層分が埋土にあたる。茶褐色系の地山土を裏ごめ土として素掘溝を充填している。石組溝の内部は灰黒色粘質土が詰まり、遺物は出土していない。

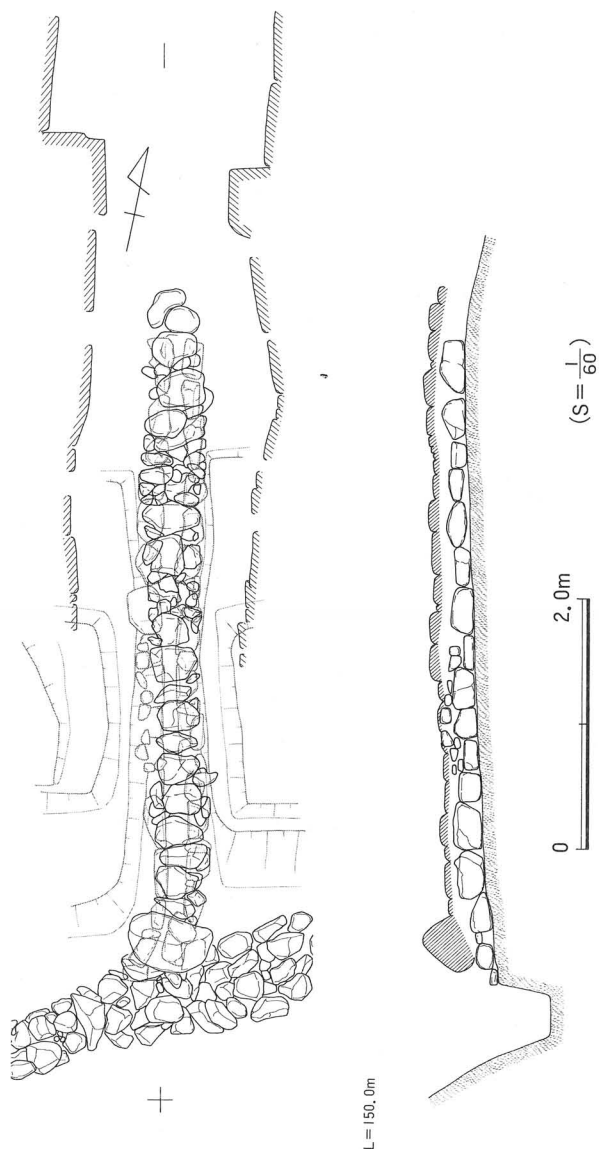


図11. 8号墳中央排水溝

東排水溝（図12）東排水溝は中央排水溝の出口部分の分岐点から始まっているのではない。東へ約2.6mの地点から始まる。なぜこのような状況であるのかはある程度推測することができるが、この点に関しては後述したい。

東排水溝は墳丘の掘り割に沿って、墳丘築造の当初から計画的に素掘溝として掘られている。素掘溝の規模は全長約9.3mである。石材は蓋石が36石、側壁石は両側あわせて66石が使われている。東端部1.7mは、幅約60cmの素掘溝が丘陵崖面へ落ち込んでいる。溝の両端部の比高差は約42cmである。

蓋石は整然と敷きつめられ、40×20cm程度の石材が使用されるが、東端部では約60×40cmと一回り大きい石が置かれている。この点は中央排水溝での南端におかれた蓋石の配置状況に良く似ている。また蓋石の間隙には小型の石が詰められている。

両側壁の石の配列は高さ約15cm程度で長辺を横に使う。図12のb-b'は蓋石のNo.14石の断面を示している。この図12の縦断面により、南側の尾根切断面がそのまま素掘溝の掘方となり北側で少し肩を作る。底部は平坦面を作る。溝内は粘質土で満たされているが遺物は包含していない。

西排水溝（図13）西排水溝は規模の大きい施設で、墳丘の裾回りに沿って延びている。規模は全長約16.6mあり、東排水溝の2倍の大きさである。特に平面図でも明らかなように、中央排水溝から西へ約5mの地点で水路が二方向に分岐し、さらにこの地点から約3.5mでまた再び一本に収束する構造である。このためもあってか、二重構造の水路部分の掘方の幅は約1.3m前後もある。

西排水溝の東西両端での比高差は約1mであるが、全体的には穏やかな傾斜を示し、二重排水溝を越えるあたりから傾斜をもち始める。西端部約2.5mについては30cm以上落としている。そして石組を過ぎればラッパ状に開いた素掘溝となり西側の谷地に排水されている。

蓋石は全体で113個の自然石が使用されている。中央排水溝と東排水溝をあわせても約2倍程度の数があり、西側排水溝の規模の大きさがわかるであろう。ここでも40×20cm程度の石材を多く使用しているが、西に行くに従い50×30cm程度のやや大型の石が目立つようになる。しかし西端では特別大型の石が使われることはない。両側壁の流路の幅は約15～20cmである。しかし西端部の2.5mについては、これよりやや大型の石材を使い、部分的には2段積みになっているところも見られる。また先端部1mの区間は底部に敷石状に設置した石が3石確認できた。

中央排水溝と東、西溝の関係（図11）中央排水溝は西排水溝とは直接繋がらず、中央排水溝が約40cmの落差で落ち込んでいる。そしてこの接点の所は、中央排水溝の側壁の下に西排水溝の側壁が作られているため、この結果西排水溝→中央排水溝という構築順序が考えられる。またこの落差により石室内部の排水は機能していないことになる。

次に西排水溝と東排水溝の関係は、石室の中軸線から東へ約2.6m離れた地点で見ることができる。図12 a-a'はこの地点の断面を示しているが、西側と東側では溝底部が約50cmの比高差がある。溝底部は地山の段差であるので、溝としては直接繋がっていない。このため西排水溝→東排水溝と言う構築順序が考えられよう。しかしなぜこのように、排水溝がお互いに繋がっていないのか、あるいはまた石室の中軸線から大幅にずれて50cmもの段差が生じたのかという問題があろう。

また石室の排水を担っている中央排水溝ですら、玄室掘方の底部よりずいぶん上来ていて本

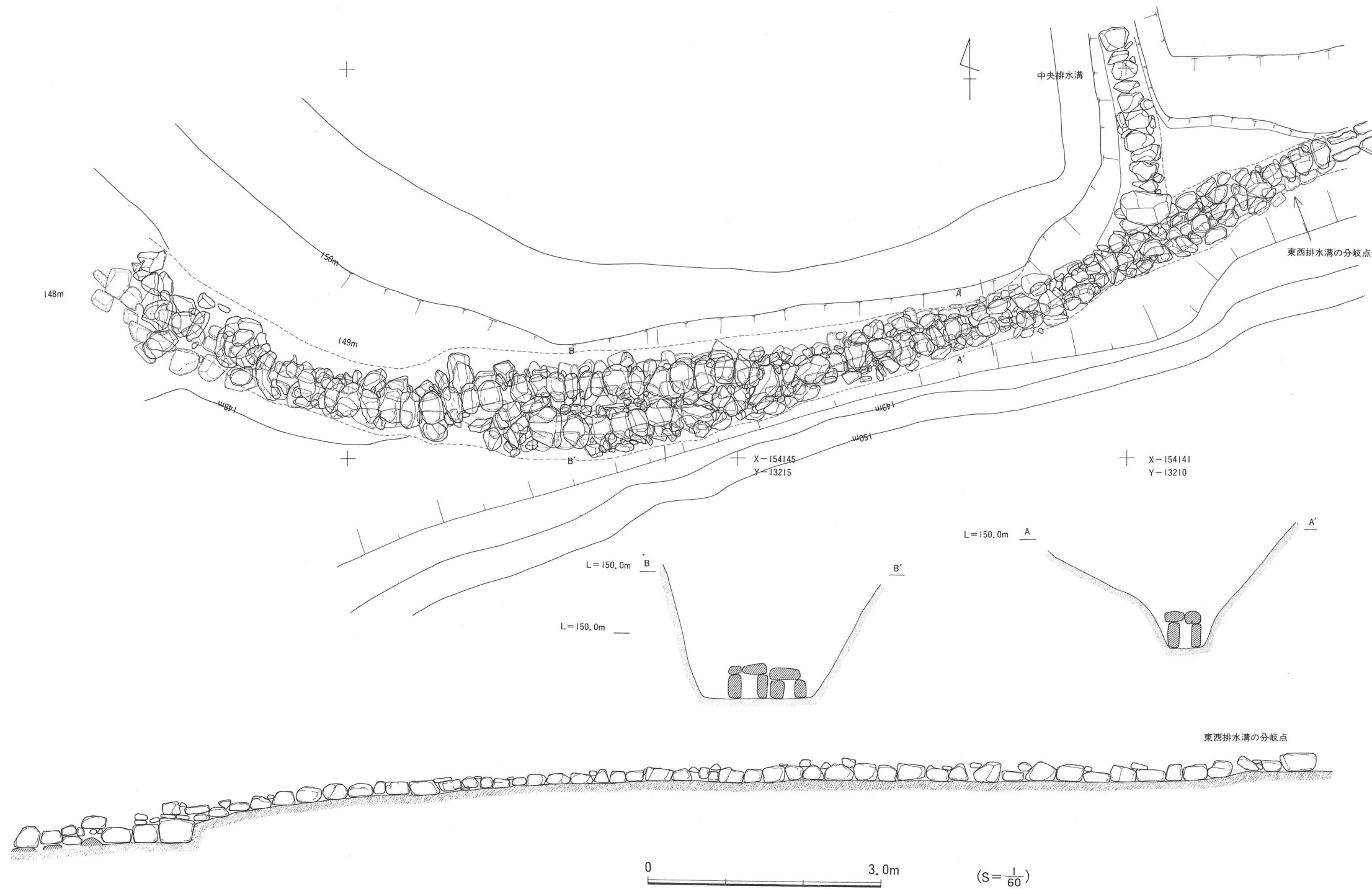


図13. 8号墳西排水溝

来の機能を果たすことはできない状況である。

このようになった原因は恐らく、地山を削り出して作られた石室掘方の底部と排水溝底部の高さの設定に問題があったのではないだろうか。現状でも石室掘方の底部と西排水溝底部のレベルがほとんど同一であることを示されている。

本来であれば中央排水溝は、現在の底よりはさらに50cm以上掘り下げなければ機能しないのであり、この作業は当然東西の溝の掘り下げと言う事態に波及するのである。排水溝は最終的には暗渠として埋められることでもあり、このような作業量の大幅な変更を避けてしまった結果であろうと考えられる。

しかしこのことにより、排水溝が機能しないことに加え、中央排水溝の蓋石を石室内の整地土の基準にしなくてはならない事態を招き、石室本体の基底石は完全に整地土層に覆われ、また天井までの高さも80cm以上減じることになった。

以上、中央排水溝と東、西溝の関係について記述した。この排水溝が機能していないと言う問題は、石室掘方の底部のレベルの設定に問題があったことが原因であり、またこれに対して溝レベルを修正しなかったことが結果であろう。

第8節 遺物の出土状況 (図14)

遺物は石室前庭部と石室内および墳丘周辺から出土しているが、前庭部と墳丘周辺の遺物は2次的な堆積土から出土しているため触れない。

石室羨道部からは須恵器長頸壺、高杯、杯身、土師器は小型短頸壺が出土している。須恵器高杯の脚部のなかに耳環が入ってい

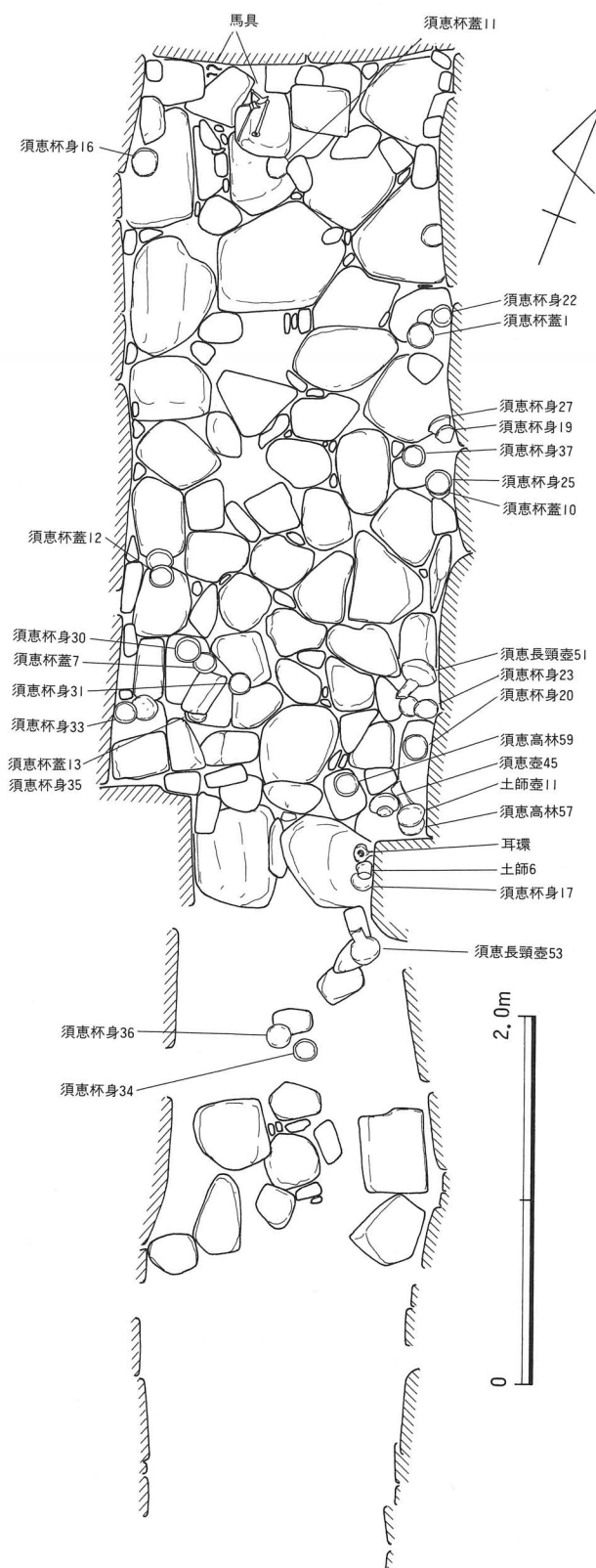


図14. 8号墳石室遺物出土状況

たが、原位置を保っているわけではない。

玄室内では左右袖部と玄室左側壁中央付近、および奥壁付近である。左袖部では須恵器高杯、杯蓋、身、長頸壺、壺と土師器壺などである。右袖部では杯蓋、身が集中して出土した。出土状況は蓋と身が少し離れているものもあるが、No.17, No.18・19, No.20, 21はセット関係として取り扱い、ほぼ原位置に近いところにあるものと判断された。左側壁中央付近では須恵器杯蓋・身が中心であるが、ここではセット関係を示すものはNo.29, 30しかなく、移動している個体が多いものと判断される。奥壁部では須恵器は2点のみで、あとは馬具の部分品が出土している。このほかには鉄釘や刀は細かな破片として出土していて、特に鉄釘により棺の位置を復元することはできない。

以上が石室内における副葬品の出土状況の概要である。しかしこれ以外に注目される遺物が出土している。

図7は敷石と整地土を除去して土壌面を検出した状況を示している。この時点で西側の奥壁基底石に接して鉄製品が出土した。2片に割れているが鋤先である。ただ接合する資料ではなく1個体分の量ではない。しかしこのような出土は、奥壁基底石を設置した段階において鋤先の破片が置かれたのである。この点からすると、石室構築のごく初期段階において何らかの祭祀行為が執り行われたことを推測させる。

第9節 出土遺物

8号墳から出土した遺物は須恵器、土師器、馬具などの鉄製品、鉄滓、耳環、埴輪片1点などである。しかし量的には須恵器類が多数を占めている。

須恵器 (図15～19、図版24～29)

須恵器は器種としては10種類あり、杯蓋・身(1～41)と破片をあわせて42個体、短頸壺(42～45)は破片をあわせて4個体、小型壺(46)、壺蓋(44)、脚杯長頸壺(47～53)7個体、甕(54)1個体、甕(55、56)は2個体、高杯(57～60)4個体、このほか破片として壺と提瓶がある。

杯蓋(1～15)、身(16～41) 蓋と身は全体の大きさや色調などによりI類とII類に分類が可能である。I類は蓋口縁部直径の平均は14.2cm、身口縁部直径の平均は16.9cmであるのに対し、II類では蓋口縁部直径の平均は12.4cm、身口縁部直径13.3cmとなる。I類とII類の口縁部を比較すると蓋では1.8cm、身では3.6cmの差があり、II類は小型品であると言える。さらにI類とII類の色調を比較すると、I類では全てが青灰色で硬質な焼成であるのに対して、II類では硬質なものと灰白色で軟質の焼成であるものが混在している。

I類蓋は1、3、5、8、11、身は16、17、19、20、21、23、25などがある。II類のうち硬質に分類されるのは身のみで27、34、36、37の4点があり、軟質に分類されるのは蓋では7、10、12、13、身では31、33、35である。これら杯蓋・身は出土状況に照らし合わせてみると、I類では29と30が蓋と身のセットとして復元され、II類では17が当初からセット関係にある以外、18・19と20・21、22・23のあわせて4セットが組み合わせとして復元できよう。これらはすべて玄室右側壁の近くにあり、原位置は保っていないものの、当初に配置された状況に近い位置と考えられる。

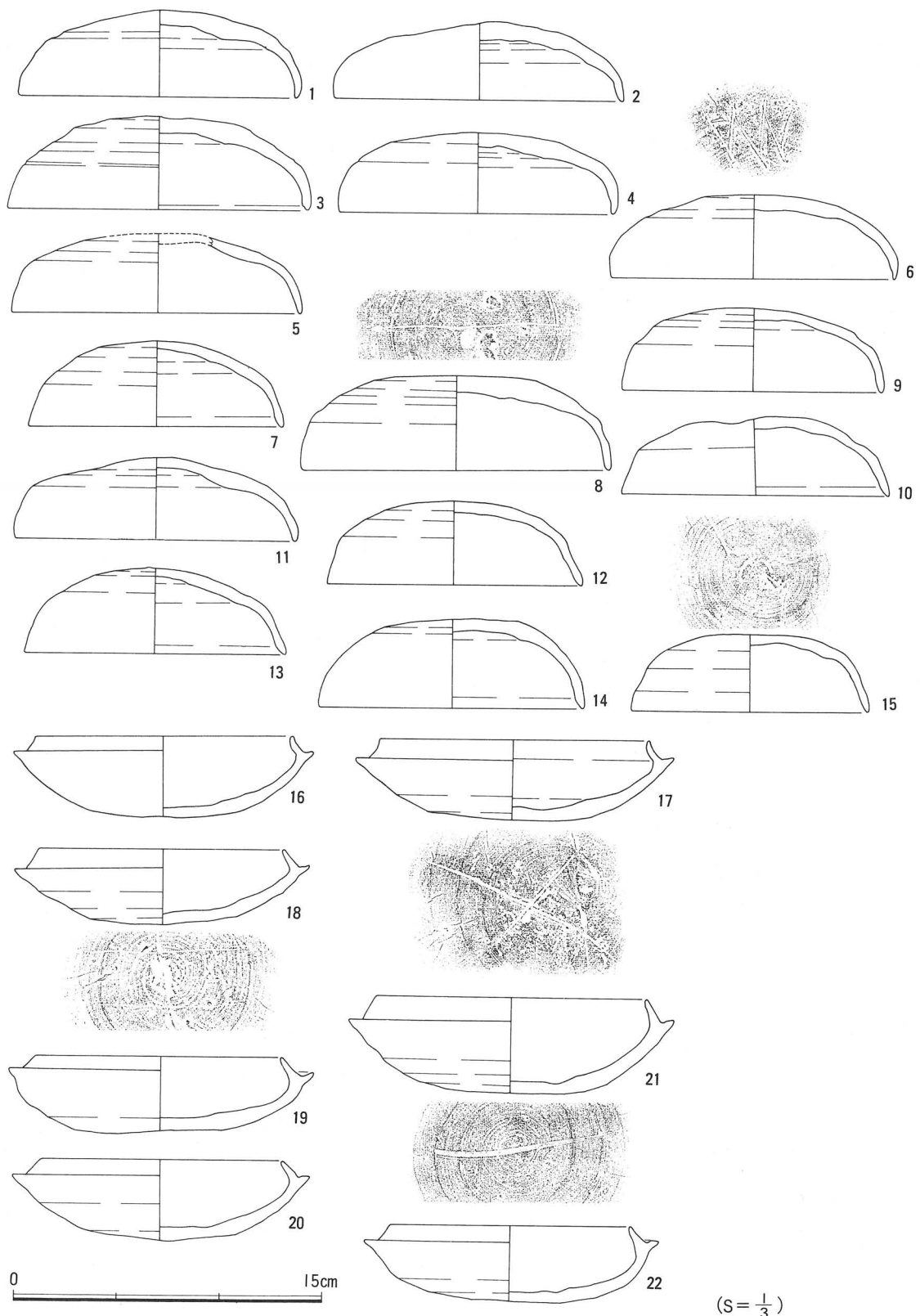


图15. 8号墳出土土器(1)

そしてⅠ類がこの点に関してあまり良好ではないことは、Ⅰ類とⅡ類の杯が置かれた時期に差があると考えられる。

杯蓋Ⅰ類 1、2、3、4、5、6、8、11の8点である。1は口縁部直径13.8cm、器高4.2cmである。体部は天井から立ち上がりにかけて緩く傾斜を作り、端部は尖り気味に丸く納めている。端部外面はヘラにより削りを加えている。調整は天井部が軽く回転ナデ調整をおこなっている以外はハケ調整である。2は口縁部直径14.1cm、器高3.8cmである。天井部はややゆがみ気味で、立ち上がりにかけては緩い傾斜を作り、口縁端部は丸く納めている。調整は天井部を軽く回転ナデを施している。3は口縁部直径14.7cm、器高4.5cmである。天井部から立ち上がりにかけては緩く傾斜をもつが、稜線部では軽く凹線を引いている。口縁部内面ではゆるく段を作る。このような特徴はⅠ類の中でもやや古い要素であろう。しかし、天井部の調整は軽い回転ナデを施すだけであり、粘土を完全に削り取っていない。4は口縁部直径13.6cm、器高4.0cmとⅠ類では小振りの個体である。天井部から立ち上がりにかけて丸みを作り、緩く傾斜する。端部外面はヘラ削りを施してやや内湾気味である。天井部を軽く回転ナデ調整を施す。この個体の色調は茶黒色を呈して固く焼成されている。5は口縁部直径14.2cm、器高3.9cmあるが、約 $\frac{1}{3}$ が欠損している。体部は立ち上がりにかけて緩く傾斜している。端部は丸く納めている。調整は天井部から稜線にかけて、全体に軽くナデ調整を行っている。6は口縁部直径14.0cm、器高4.1cmである。体部は天井部から立ち上がりにかけて緩く傾斜し、口縁端部付近ではやや内湾気味である。調整は天井部のみ軽く回転ナデを施している。この個体には稜線付近に鋸歯紋状のカマ印を施している。杯身ではこれに対応するカマ印は見当たらない。8は口縁部直径15.1cm、器高4.6cmである。この個体はⅠ類のうちでも大きい部類にはいる。天井部から立ち上がり部にかけてはやや四角張る形態を呈して、稜線部ではゆるい段を作る。調整は稜線部まで軽いヘラ削りを施す。No.3とともにやや古い要素を残す資料である。11は口縁部直径13.6cm、器高4.0cmである。全体に丸みを帯びた器形を呈し、口縁端部はやや内湾気味であるNo.4と色調を同じくし、法量も一致する。

以上が杯蓋Ⅰ類の概要であるが、法量で言えば口縁部直径は13.5cm以上が目安である。またNo.3、8は成形や調整面にやや古い要素を残している。

杯蓋Ⅱ類 7、9、10、12、13、14、15の7点である。7は口縁部直径12.4cmである。天井部から口縁部にかけてゆるく傾斜しながら丸みのある体部を作る。調整は天井部より回転ナデを施す。色調は灰白色を呈してやや軟質気味である。9は口縁部直径12.5cm、器高4.0cmである。全体に丸みを持つが、稜線部はやや大振りな凹部が回る。調整は回転ナデがこの部分である。色調は青灰色で固く焼き締まっている。10は口縁部直径13.9cm、器高3.8cmである。器形は全体的に丸みを呈している。色調は灰白色を呈して軟質の焼成である。12は口縁部直径12.3cm、器高4.0cmである。調整は天井部を軽く回転ナデにより仕上げている。色調は灰白色を呈している。13は口縁部直径12.6cm、器高4.2cmである。この個体も全体的には丸みを持つが、立ち上がり部は外方へ開き気味である。調整は天井部から稜線にかけて軽い回転ナデにより仕上げられている。色調は灰白色を呈している。14は口縁部直径12.8cm、器高4.3cmである。全体には丸みをもつものの、回転調整が天井部に限られているためやや天井部が高くなる。色調は青灰色を呈して硬質の焼成である。Ⅱ

類のなかで硬質な焼成はNo.9とこの2点にすぎない。15は口縁部直径11.5cm、器高3.7cmである。全体に丸みを持つが天井部の回転ナデがやや強く施されている。立ち上がり部は屈曲する。色調は灰白色を呈する。また天井部には×印のカマ記号を印している。

II類の杯蓋は以上であるが、5個体はやや軟質気味で灰白色を呈している。法量的には口縁部直径が13cmまでの大きさである。しかしI類とII類の器高での区別はできない。またII類の器形的なバラツキは少ないようである。

杯身I類 16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、41の11点である。

16は口縁部直径12.9cm、受部径14.6cm、器高3.9cmである。体部はやや偏平であるが、丸みのある器形である。立ち上がりは短く、端部は外上方を向く。調整は天井からヘラ削りを施す。17は口縁部直径13.1cm、受部径15.5cm、器高3.9cmである。体部はやや偏平であり、立ち上がりも短く、端部は尖り気味である。受部には蓋の立ち上がり端部が溶着している部分が見られる。調整は天井から回転ヘラ削りを施している。そしてこの部分に×印のカマ記号を施している。18は口縁部直径12.1cm、受部径14.4cm、器高3.7cmである。器形は前二者に比較して偏平である。立ち上がりも短くやや小振りである。調整は天井部に軽く施すだけである。そして=印のカマ記号を施している。色調は全体に灰白色であるが硬質の焼成である。受部には蓋の立ち上がり部の溶着がみられる。19は口縁部直径12.1cm、受部径14.8cm、器高3.8cmである。この個体も天井から偏平な作りで、立ち上がりも短くやや内傾する。調整は天井部を軽く回転ナデを施している。20は口縁部直径13.2cm、受部径15.8cm、器高4.6cmである。体部はやや大振りで立ち上がりは高い作りである。天井部は軽く回転ナデを施す。そして頂部には一印のカマ記号を施している。21は口縁部直径11.9cm、受部径14.5cm、器高3.9cmである。天井部は軽く回転ナデを施している。立ち上がりは短く外上方を向いている。22は口縁部直径11.7cm、受部径14.3cm、器高3.7cmである。天井部は約 $\frac{2}{3}$ 程度を回転ヘラ削りを施している。色調は灰白色を呈するが硬質の焼成である。23は口縁部直径13.0cm、受部径16.0cm、器高5.0cmである。この個体は20と同様で、杯身I類の中でも特に大形品であり、古い要素を残している。体部は大振りで調整は天井部を軽く回転ナデを施している。立ち上がりも高く大きい。天井部には一印のカマ記号を施している。このカマ記号も20と共通している。24は口縁部直径11.7cm、受部径14.1cm、器高3.7cmである。体部はやや偏平気味であり、立ち上がりも短い。天井部は軽い回転ナデを施し×印のカマ記号を施している。25は口縁部直径11.6cm、受部径14.3cm、器高3.5cmである。天井部から $\frac{2}{3}$ 程度の軽い回転ナデを施し、立ち上がりは短く外上方を向く。受部には蓋部の溶着が認められる。色調は灰白色を呈するが硬質の焼成である。41は全体の $\frac{1}{4}$ 程度の個体である。口縁部直径12.2cm、受部径14.6cm、器高3.3cmである。全体にやや偏平で立ち上がりも短く立ち上がる。天井部は回転ヘラ削りを施している。

杯身II類 26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40の15点である。

26は口縁部直径11.5cm、受部径13.7cm、器高4.2cmである。やや天井高のある体部を呈し、調整は軽い回転ナデ仕上げである。立ち上がりは短く外上方を向く。色調は茶褐色を呈し硬質の焼成である。27は口縁部直径10.5cm、受部径13.1cm、器高3.8cmである。天井部は軽い回転ナデを施す。受部立ち上がりは短く、内傾するものの端部は短く外上方を向く。青灰色の硬質な焼成である。

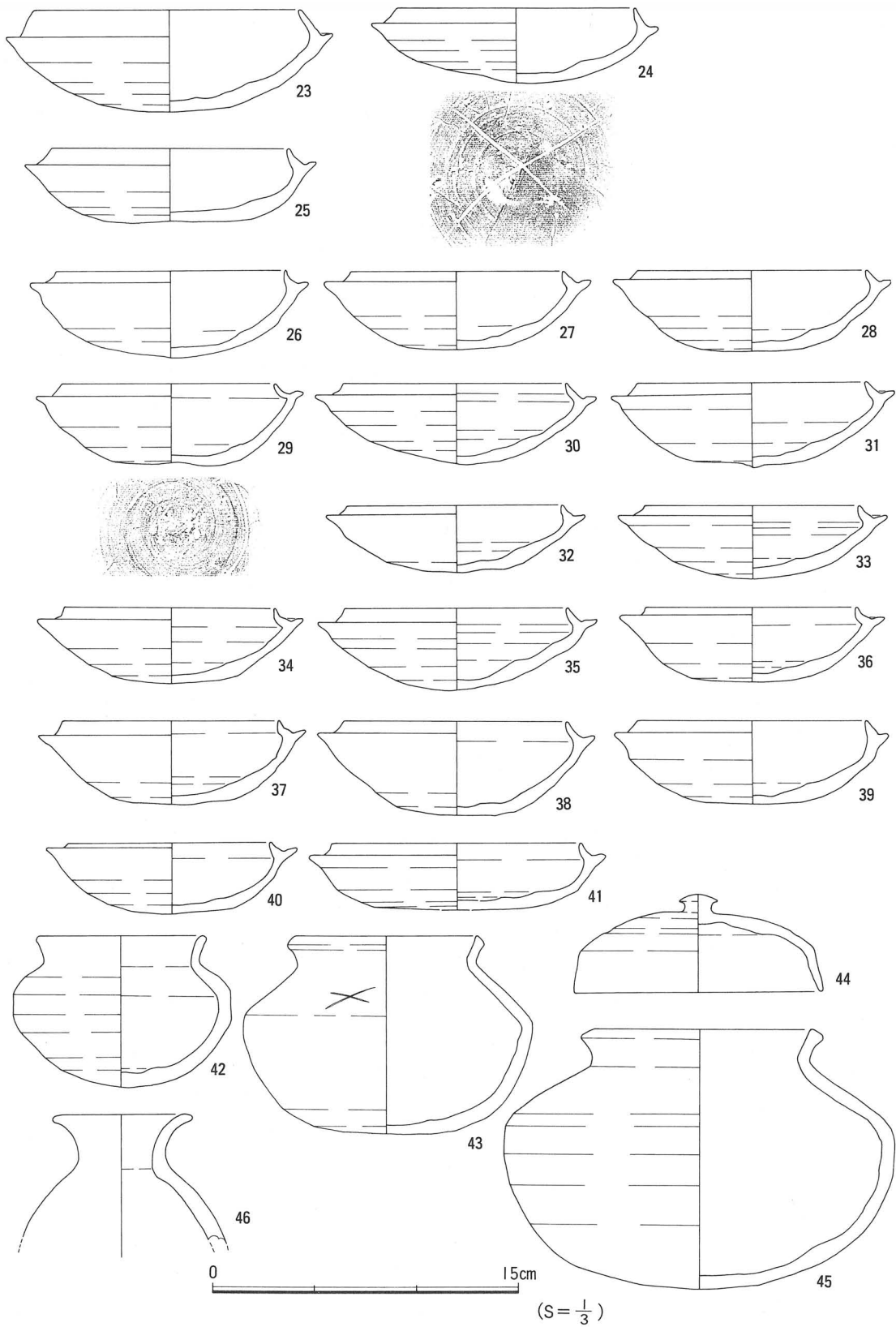


图16. 8号墳出土土器(2)

28は口縁部直径11.2cm、受部径13.7cm、器高4.0cmである。やや天井高のある体部で、立ち上がりは短く内傾気味である。灰白色を呈し、軟質の焼成である。29は口縁部直径10.5cm、受部径13.1cm、器高4.0cmである。体部は楕円状にゆがみが生じている。天井部は軽い回転ナデを施している。そして一印のカマ記号を施している。30は口縁部直径10.9cm、受部径13.8cm、器高4.0cmである。体部はやや扁平気味で、立ち上がりはやや内傾するものの、端部は鋭く外上方を向く。調整は天井部は軽い回転ナデを施している。色調は灰白色を呈しやや軟質の焼成である。31は口縁部直径11.2cm、受部径13.9cm、器高4.2cmである。II類のなかではやや大きい部類である。立ち上がりは内側へ内傾気味である。調整は軽い回転ナデを施す。色調は灰白色を呈し軟質の焼成である。32は口縁部直径10.5cm、受部径12.7cm、器高3.3cmである。II類では最も小さい個体にあたる。体部は扁平で立ち上がりは内傾する。外面は天井部を少し調整するのみで、粘土が残る。色調は灰白色を呈するがやや硬質の焼成である。33は口縁部直径10.4cm、受部径13.0cm、器高3.7cmである。体部はやや屈曲気味で、立ち上がりは内傾し、端部は鋭く外上方を向く。調整は軽く天井部をナデている。34は口縁部直径10.3cm、受部径13.1cm、器高3.7cmである。体部はやや屈曲気味で、立ち上がりは内傾し端部は鋭く外上方を向く。調整は軽く回転ナデを施している。35は口縁部直径10.9cm、受部径13.7cm、器高4.0cmである。体部は調整によりやや尖り気味である。立ち上がりは外上方を向く。天井部の調整は $\frac{2}{3}$ 程度まで回転ナデを施している。36は口縁部直径10.9cm、受部径13.7cm、器高4.0cmである。体部は丸みをもち、立ち上がりは一旦内側へ折れ、鋭く外上方を向く。調整は天井部分のみ軽くナデている。37は口縁部直径10.6cm、受部径13.1cm、器高4.1cmである。全体には楕円状に歪みが見られ、立ち上がりは外上方を向く。調整は天井部分のみ軽くナデている。色調は青灰色を呈し硬質の焼成である。38は口縁部直径10.9cm、受部径13.1cm、器高4.2cmである。天井高のある体部を呈し、立ち上がりは外上方を向く。調整は天井部分を回転によるナデを施している。39は口縁部直径11.2cm、受部径13.4cm、器高4.1cmである。II類ではやや大きい部類に属している。体部は丸みをもち、立ち上がりは外上方を向く。調整は体部全体を軽くナデ仕上げを施している。40は口縁部直径10.0cm、受部径12.3cm、器高3.5cmである。II類でも最も小さい器形の部類に属している。体部はやや丸みをもち、立ち上がりは小さく外上方を向く。調整は天井部まではほとんど及んでいず、部分的に軽く回転ナデを施している。

鈕付蓋杯(44) 口縁部直径12.2cm、器高4.8cmあり、天井部には小さめの鈕が付く。壺の蓋であろうと推定される。体部には浅い凹線を巡らせ、この部分まで軽い回転ナデ調整を施している。立ち上がり部の稜線は緩やかで、立ち上がりはやや外上方を向く。胎土は白色の砂粒を多く含む。

短頸壺(42、43、45) 42は口縁部の一部と体部下半が残る個体である。口縁部直径8.1cm、器高約7.5cm、胴部最大径10.6cmである。口縁部は短く外反し端部は丸く納めている。体部は扁平な作りで肩を張るような成形である。肩部上半部から底部にかけては回転ヘラ削りを施し、更にもその上から一印のカマ記号を施している。43は口縁部直径9.0cm、胴部最大径14.1cm、器高9.7cmである。口縁部は短く外上方を向き、端部は外側で角頭形を作る。体部は直線的で肩部を明瞭に作り、底部は平底気味である。調整は肩部から下はカキ目を施し、底部はナデの後にさらに手持ちによるヘラケズリを施している。色調は全体的には灰青色を呈するが硬質の焼成である。肩部に

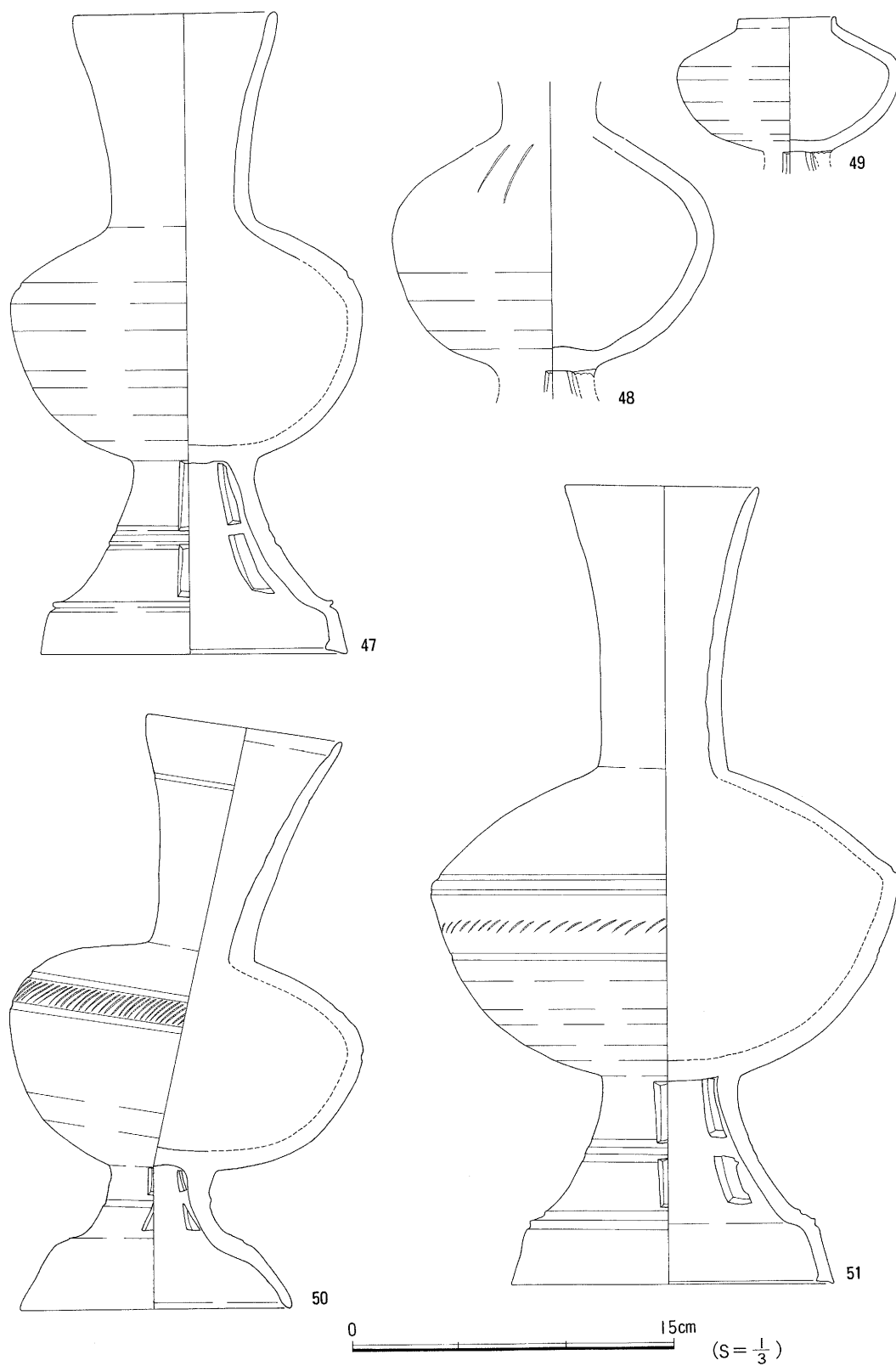


图17. 8号墳出土土器(3)

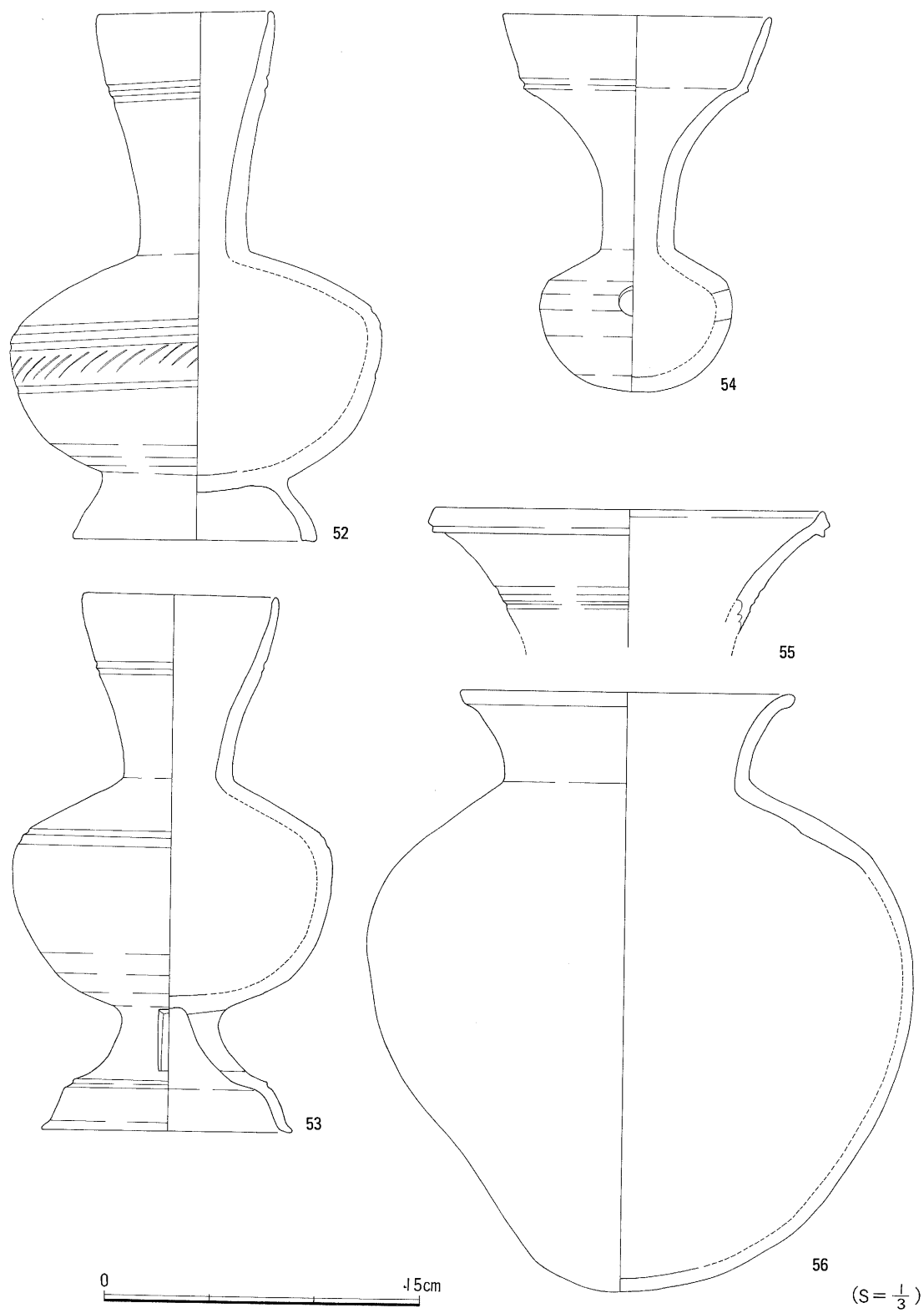


图18. 8号墳出土土器(4)

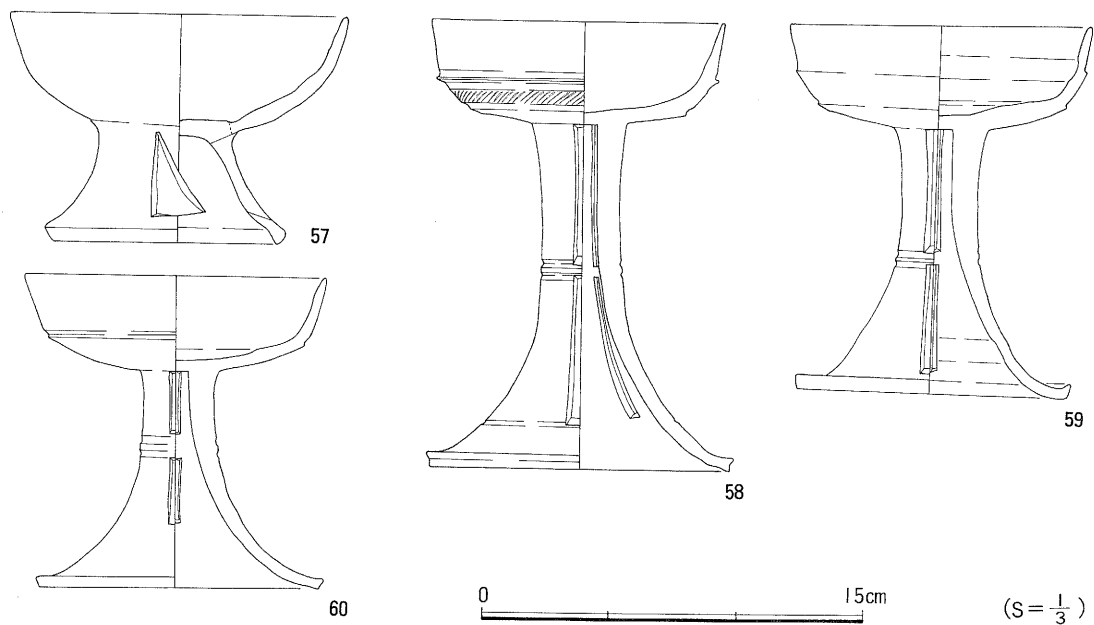


図19. 8号墳出土土器(5)

は×印のカマ記号を施している。45は口縁部直径10.8cm、胴部最大径19.2cm、器高12.8cmである。頸部は短く外反し体部は全体にやや扁平である。底部は平底をしている。肩部は自然釉が水滴状に付着している。調整はナデを基本としているが、底部はさらに手持ちによりヘラケズリを施している。色調は灰白色を呈し硬質の焼成である。

提瓶(46) 口縁部と体部の一部を残す個体である。口縁部直径6.9cm、残高4.3cmである。頸部は短く口縁端部は外側へ折れる。肩部はなで肩で、張りのない形態を呈している。7号墳でも提瓶が出土しているが、口縁部の形は違う。

脚付長頸壺(47、48、49、50、51、52、53) 47は口縁部直径9.4cm、胴部最大径16.3cm、脚高9.0cm、脚底径14.2cmである。壺頸部は太く、口縁部付近で外側に膨らみ気味である。肩部は直線的で太い凹線を施している。脚部は三方向で長方形の二段の透し孔を穿つ。脚端部は踏ん張る形態を呈している。調整は基本的にはナデ仕上げであるが、体部下半部は軽くヘラケズリを施している。48は体部は完全に残っているが、頸部、脚部を欠いている。胴部最大径14.9cm、残高12.0cmである。体部は明瞭な肩部を作らず、丸みを持って成形している。調整は体部下半を軽く回転ヘラケズリを施している。脚部の透し孔は三方向である。49は脚部を欠いている。口縁部直径4.6cm、胴部最大径10.4cmと小さい個体である。口縁端部は短く直立して、体部は扁平な作りである。肩部は直線気味であり、これは蓋の付く脚付壺と考えられる。調整は体部下半をヘラケズリしている。50は成形後の乾燥過程で壺部が歪んでいるが完形品である。口縁部直径9.1cm、胴部最大径16.5cm、脚高6.6cm、脚底径12.7cmである。頸部は外上方を向き約3cm下でゆるく段を作る。肩部は張り気味で、胴部にかけて3本の浅い凹線を施し、中間には文様帯を作っている。文様は簡単な刺突文でヘラの小口部を原体としたものである。脚部は短く端部は開いている。透し孔は二段であるが、上段は長方形、下段は三角形を呈している。調整は体部下半を軽くヘラケズリを施し

ている。胎土は砂粒が多く含まれ、焼成についても器壁の表面がかなり荒れている。一部には口縁部から胴部にかけて自然釉が流れている。51は口縁部直径9.0cm、胴部最大径22.0cm、脚高9.7cm、脚底径15.0cmである。大型品であるが全体には完成度の高いものとなっている。頸部は全体に細く外上方を向いている。肩部は直線気味であり稜線は明瞭である。稜線をはさんだ両側と約4cm離れて浅い凹線を巡らせ、下側2本の間は文様帯をつくり刺突文を施している。50の個体と良く似た資料である。脚部はしっかり踏ん張る形態であり、透し孔は三方向で二段の長方形を呈している。調整は基本的にはナデ仕上げであるが、胴部下半は軽いヘラケズリを施している。肩部から胴部にかけての形態は、これ以外の脚付長頸壺に比較してやや新しい要素と考えられる。52は口縁部直径8.3cm、胴部最大径17.5cm、脚高3.1cm、脚底径11.6cmである。頸部はやや細く外上方を向く。口縁端部から下へ3cmの部分では浅い凹線が2本巡らされている。体部は肩部が張り気味で浅い2本の凹線と文様帯を下部に巡らせている。文様は粗い刺突文を施している。脚部は短く踏ん張る形態を呈しているものの透し孔は入れていない。焼成は硬質な仕上げであるものの、自然釉が全体に付着し表面は荒れている。53は口縁部直径9.1cm、胴部最大径15.1cm、脚高6.0cm、脚底径12.0cmである。頸部は広がり気味に外上方を向き、端部から下へ3cmで浅い凹線を施している。体部は全体に丸みを持ち、2本の浅い凹線を巡らせているが、文様帯は付けていない。脚部は短かめで踏ん張る形態である。透し孔は二方向一段の長方形を呈している。調整は体部下部 $\frac{1}{2}$ について軽い回転ヘラケズリを施している。

甕 (54) 口縁部は $\frac{1}{2}$ 程度欠くものの、ほかの部分については完存している。口縁部直径12.7cm、胴部最大径9.1cm、器高17.9cmである。頸部は細く口縁部に向けて大きくラップ状に開いている。体部は丸みを帯びて小さい作りである。肩部稜線に直径1.5cmの円形孔を開けている。調整は体部下半部で回転ヘラケズリを施している。そして底部には一印のカマ記号を施している。

甕 (55、56) 55は口縁部の破片である。復元の口縁部直径18.5cm、残高6.0cmである。口縁部は外上方へ開き、端部は角頭形で鋭い。下部には1条の凸帯を巡らせている。また端部から5cm下部には2条の浅い凹線を巡らせている。調整はやや粗い回転ナデが施されている。56は石室前底部から出土した。細かな破片でほとんど接合する。石室の閉塞に際して使用されたものが、その後破砕されたものと考えられる。口縁部直径15.9cm、胴部最大径25.8cm、器高28.5cmである。口縁部を含めて全体に歪みが生じている。頸部は外上方に延び端部は丸く納める。体部は底に向かってやや角張り気味で安定性にかける。調整は体部から底部にかけて全体にカキ目を施している。

無蓋高杯 (57、58、59、60) 57は口縁部直径13.3cm、器高9.1cm、脚底径8.7cmである。杯部は丸みを持ち、端部は丸く納めている。脚部は短く外側へ大きく開く。透し孔は三方向の三角形を呈するが一部では長方形のように形が崩れているものもある。杯内面は脚部との接合痕跡を粘土で完全には隠さずに露出している。調整は内外ともナデを施している。58は口縁部直径11.5cm、器高17.8cm、脚底径11.7cmである。全体に薄く成形されて杯部立ち上がりは外上方を向く。下部の文様帯には本来は刺突文が入れられているものの、この資料では線刻による表現があり簡略化されている。脚部は均整が取れていて、透し孔は二方向で二段の長方形を呈している。60はやや小振りの大きさである。口縁部直径11.8cm、器高12.5cm、底径12.5cmである。杯部は外上方を向き

稜線は1条の凸帯を巡らせるものの文様帯は作っていない。脚部はやや踏ん張る形態を呈し、透し孔は二方向で二段の長方形孔を穿つ。

土師器 (図20、図版30、34)

土師器は椀5、高杯9、長頸壺2、小型壺(柑)3、甑把手3のほか、甕の破片などが出土しているが、このうち図示できたものは12点である。

椀(1、2、3、4、5) 1は残存状況が悪く $\frac{1}{4}$ 程度の破片である。復元口縁部直径約11.8cm、器高約4.5cmである。体部全体は丸みを持ち、口唇部も丸く仕上げている。外表面は叩き締めが十分ではなく、粘土巻き上げ上部に沿って細かいヒビがはいる。色調は茶褐色を呈している。2は約 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。復元口縁部直径12.1cm、器高約4.6cmである。体部全体は丸みを持つが、底部は平底気味である。この資料も叩き締めが不十分で、粘土巻き上げ上部に沿って細かいヒビが見られる。色調は茶褐色を呈している。3は口縁部の一部を欠くだけでほぼ完形品である。口縁部直径11.7cm、器高4.1cmである。体部は丸みを持つものの底部は平底気味である。調整痕跡は判然としない。4は口縁部を少し欠くだけでほぼ完形品である。口縁部直径約17.9cm、器高約6.6cmである。体部は丸みを持つが底部は平底である。口唇部は端部を少し外側へ折り返す。調整は外面では体部をハケ調整を施すが、底部はさらに手持ちによりケズリ調整を加えている。内面は口唇部から見込みにかけて暗文を施している。ただ見込み部には特別な暗文は見られない。5は約 $\frac{1}{3}$ 程度の破片である。体部は偏平な形態を呈し、口唇部で屈曲し端部は外上方を向く。体部の成形は完全ではない。以上椀は1～3と4、5の三形態に分類が可能である。

小型壺(6) 口縁部直径8.5cm、器高8.1cmである。体部はやや胴長形で底部は丸みを持つ。口唇部で屈曲し端部は内側へ少し折り返す。体部の成形は叩き締めが十分ではなくヒビ割れが見られる。

高杯(7、8、9、10) 7は口縁部の一部を欠くもののほぼ完形品である。口縁部直径約17.2cm、器高13.6cm、底径10.0cmである。杯部は斜め上方へ伸びて開く。脚部は面取りの痕跡が認められ中央部で太くなる。裾部は短く踏ん張る形態を呈している。内面見込みは平坦である。8は基本的には7と同形である。杯部の $\frac{1}{2}$ 程度の残存資料である。復元口縁部直径約16.1cm、残高7.0cmである。9は脚部の残存資料である。脚高3.5cm、底径8.3cmである。脚部は外湾気味で裾部は大きく開く形態を呈している。器壁も薄く小型の高杯である。10は杯部のみの完形品である。口縁部直径15.6cm、残高6.0cmである。体部は丸みを持ち稜線の作りはない。口縁部にかけては上方へ直立気味である。体部下部には見込みと口縁部の接合痕跡が残存し段を作る。これによると口縁部側が外側から接合する様子を見ることができる。

長頸壺(11、12) 11は口縁部直径9.6cm、器高約26.5cm、胴部最大径14.3cmである。頸部は外上方へ大きく伸びる形態を呈する。体部から底部にかけて丸く成形している。調整は口唇部は横方向のハケ、頸部は縦方向のハケを施し、体部は胴部中央まで粗い縦方向のハケ、底部では細かいハケを施している。色調は灰白色を呈しているものの焼成は堅固である。12は口縁部直径8.3cm、器高約22.0cm、胴部最大径16.0cmである。11よりやや小型であるが同形である。体部はやや偏平

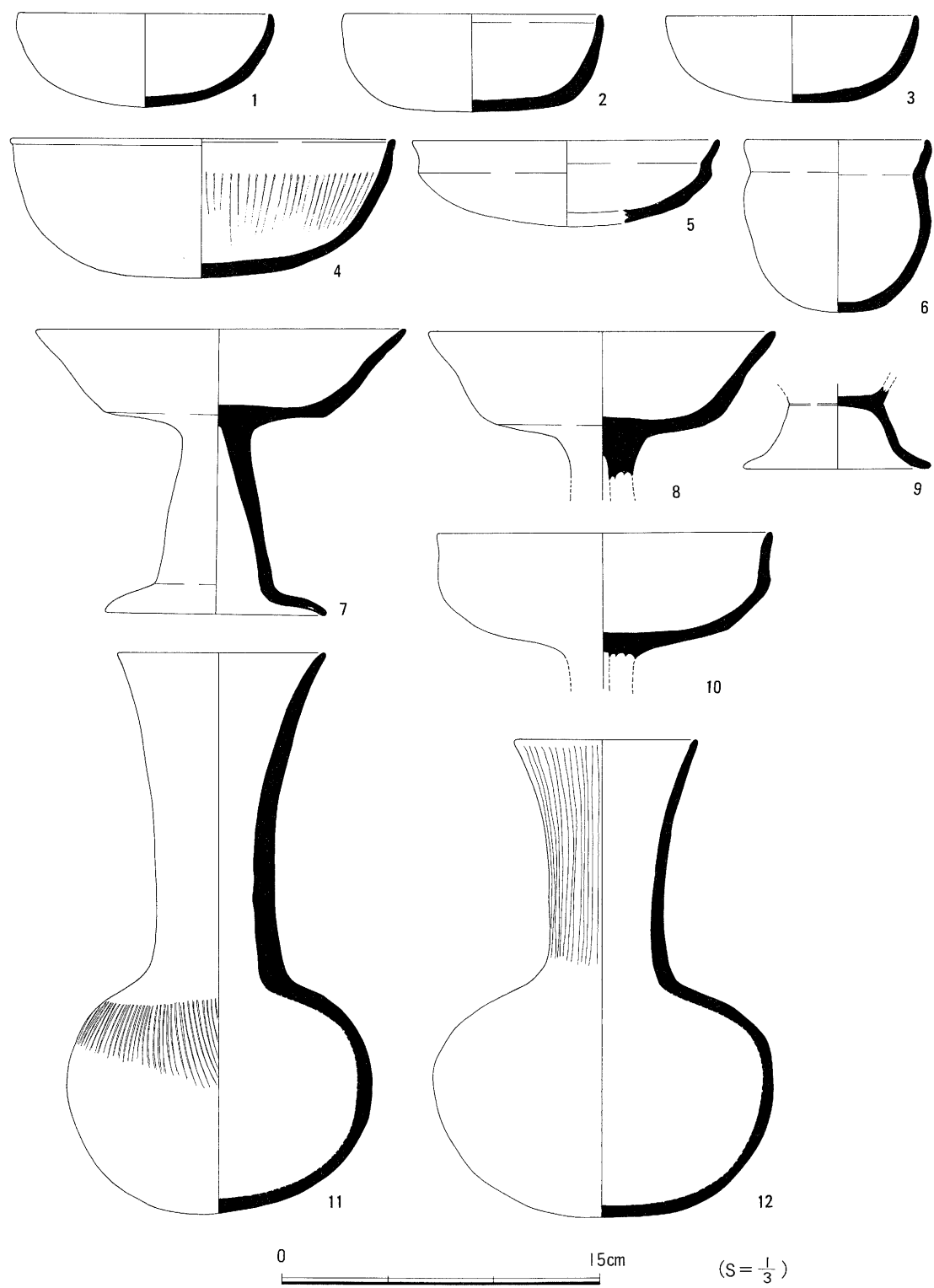


图20. 8号墳出土土器(6)

な形を呈している。調整は頸部が縦方向の粗いハケを施し、体部は全体に細かいハケを施している。

金属製品ほか

耳環(図21-1、2) 1は左右直径2.4cm、天地直径2.3cmあり、断面は長楕円形を呈し、断面長径約5.5mm、短径4mm、重量5gである。中実で金張りを施し、錆により剥落の部分もあるが良好な資料である。2は左右直径2.2cm、天地直径2.6cmである。断面の形状は円形を呈し、直径約5.5mm、重量10gである。中実であるが表面のメッキ部分が完全に剥落している。

馬具(図21-3) 3はT字形鏡板付轡である。鏡板は厚さ約4mmの鉄板をT字形に加工し、中央には長辺2.0cm、短辺6mmの方形孔を穿ち、銜と接続している。また両翼の加工は単純なT字形ではなく、端部の隅角部分を丸く切断している。両端の長さは10cm、幅は1.5cmである。立間の長さは3.0cm、幅は2.5cmである。銜は二連式で鏡板間の幅は約17.6cmあり、銜1本は長さ10.4cmである。棒状部分は方形で一辺約6mmあるが、鏡板に接続する部分は一辺1.8cmの方形環を作る。引手は円形環の遊環1個を介して鏡板と繋がる。一辺9mmの方形鉄棒で長約18.5cmあり、先端は環状の引手壺を作っている。引手壺は内側に折り曲げられ、長径4.0cm、短径3.5cmである。

絞具(図21-4、5、6) 4は完形品である。全長約8.5cmあり円環部分は左右長5.7cmである。7mmの丸棒を用いて足には帯皮を止める金部が連結している。ただ鋏の部分は留めていない。5はほぼ4と同形であるが、6は円環部分が小さく屈曲が強い。

鉄鏃(図21-7、8、9) 鉄鏃は三角形有茎鏃と両刀長頸鏃の2種類に分類される。7は両刀の腸袂式で鏃頭部の長3.4cm、幅約3.0cm、厚み2mmである。茎部は6×4mmあり、現状では長約11cmである。8~12の鏃頭部はいわゆる柳葉形を呈し、このうち8は全長14.2cm、鏃頭長3.5cm、幅1cm、厚みは3mmである。茎部は長10.5cmあり、断面は6×4mmである。9は全長約11cmあり、鏃頭長3.4cm、幅9mm、厚みは3mmである。茎部は長7.2cmあり、断面は7×4mmである。このほか茎部と考えられる破片は多数見られる。

鉄釘(図21-14~24) 14は全体の形態が判明する資料である。全長7.7cmあり、頭部は円形で直径1.5cmである。身部は断面8×9mmの方形を呈している。当資料の下部は横方向の木目痕跡を残している。15は頭部のみで直径約1.0cmである。このほかは身部の資料であり、木目には横方向の痕跡を残す18、24と縦方向に残す16、22、23、27などがある。

鋸(図21-25、26) 2辺はそれぞれ直角に屈曲しているところから鋸と判断した。25は全長6.3cmあり、断面は9×4mmの方形を呈している。そして一辺には横方向の木目痕跡を残している。26についてもほぼ同じ大きさである。

鋤先(図21-13) 2個の資料は墓壙奥壁部から出土したものであり、石室の副葬品とは区別される。2片で直接接合する資料ではないが、同一個体と判断される。いわゆるU字形鋤先と考えられ、湾曲部の長さは約11cm、幅約2.3cmである。内面にはV字形の溝があり、鋤本体の接合部に当たるが、木目痕跡は確認されない。全体の復元幅は約17~18cm、上下の大きさは約15cm程度であろう。

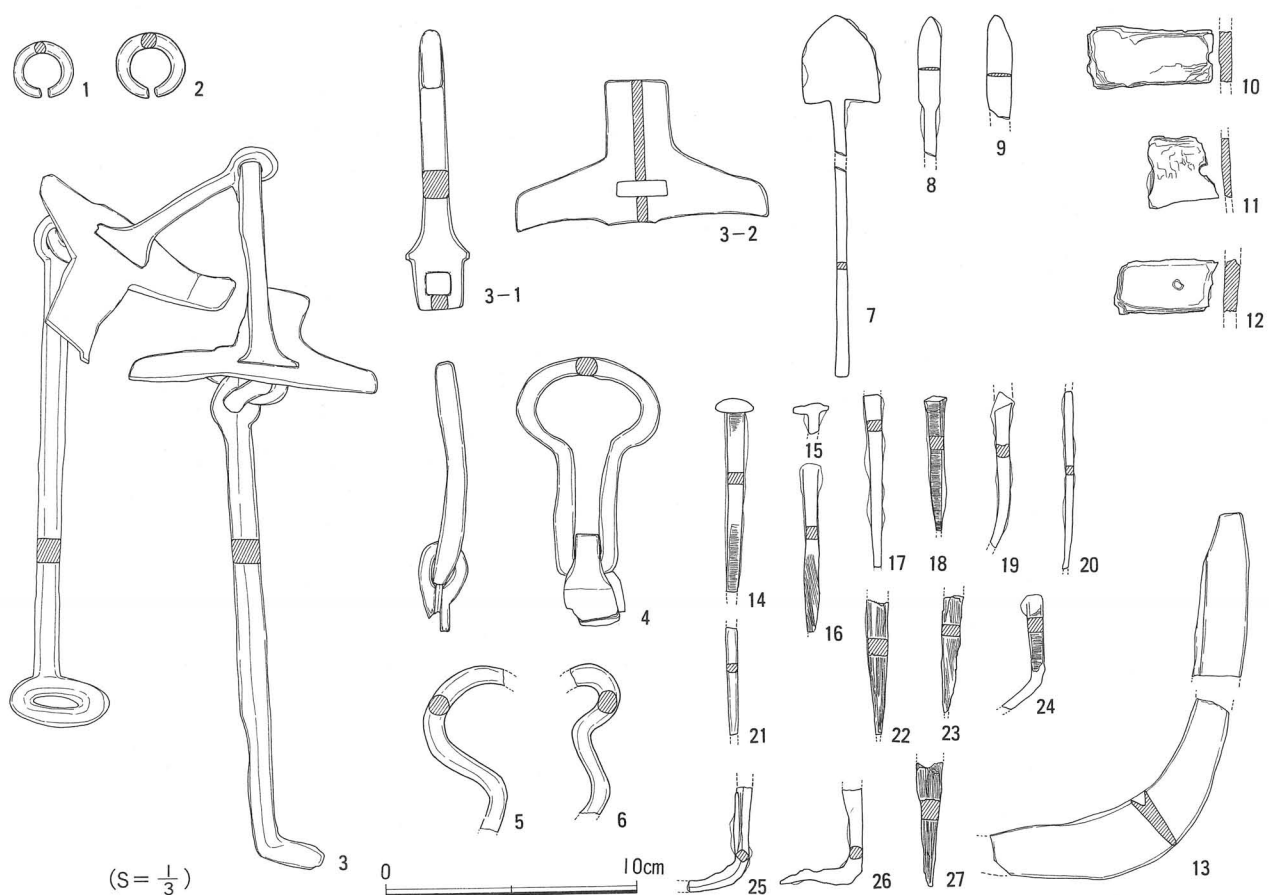


図21. 8号墳出土鉄製品、耳環

鉄刀(図21-10、11、12) 鉄刀片は全体で14片を数えるが、図示したものを含めても幅などの判明するものはなく、わずかに目釘孔を残す資料を図示した。

その他の金属性は鉄芯銀張の飾り金具がある。現状は長5.3cm、幅は上部で8mm、下部で5mmである。厚みは3mmあり、裏側には別の鉄錆が付着している。大刀の貴金具状であるが鋌留痕跡がなく、飾り金具の一種と推定される。

鉄滓(図版31) 鉄滓は玄室、羨道と石室前底部から出土し、総数は24個体、総重量は1005gである。1個当たりの最大重量の個体は125gあり、平均すると50~60g程度のものが多い。これまで石上・豊田古墳群での鉄滓の出土状況は、石峰南2号墳(石峯A2号墳のことか)は4個で182g、石上北A5号墳は4個で220g、石上北B3号墳は45個体で4450g、タキハラ3号墳は10個体で1080gなどである。以上のような状況を見れば、8号墳出土の鉄滓の量は多い部類にあると言えよう。

その他の遺物

埴輪片(写真4) 円筒埴輪の底部破片である。8号墳墳丘北側から出土した。これ以外埴輪はまったく出土していないところから8号墳に埴輪が使用されていたとすることはできないだろう。破片は9×10cm程度の大きさで、外面は粗いヘラケズリを施しハケを消している。底部は平坦に

作り、端部を内側へ折り返している。内面は2次調整をせず粘土巻上痕跡を残す。

石鏃は8号墳の東側から出土した。凸基有茎三角鏃で先端と茎部の一部は欠けている。全長4.5cm、最大幅2.2cm、厚み6mmあり、刃をつくる剥片は粗く仕上げられている。

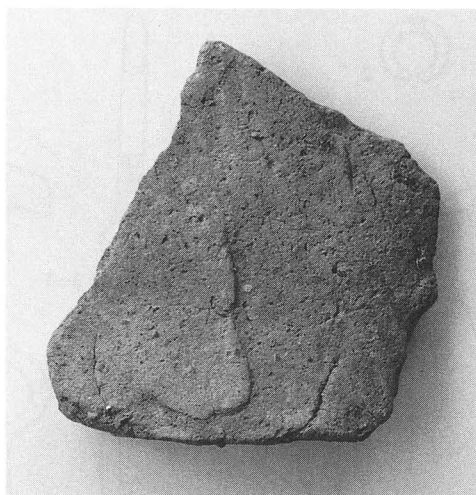


写真4. 8号墳墳丘北側出土埴輪

第10節 小 結

遺 構 8号墳は南に開口する横穴式石室である。開口方向は山側を臨む方向を示し、石上・豊田古墳群の中でも開口方向としては異色である。通有は被葬者の住居地を臨む方向、あるいは平地方向を開口方向としている場合が多いのである。また石上・豊田古墳群の調査の中では、直径20m、高さが4mの規模の古墳は最大のものである。このため石室規模、暗渠排水溝などは見るべきものを備えていると言えよう。

しかし実際の築造を見ると、石室の基準面と暗渠排水溝の基準面に、施工上の齟齬が生じて石室内の排水機能を果たしていないと言うことが調査で明らかになった。またこのことは、石室の基底石をほとんど埋めて床面を作ると言うことにもなり、石室内の高さを十分には取れないと言う結果も生じている。

墳丘は高さが4mを測るが、調査の結果では2mが地山整形により墳丘が作り出され、実際の築成のための土量は $\frac{1}{2}$ で済むように計画されいたようである。

暗渠排水溝は石室羨道部の半ばから延びて、墳丘の裾部に沿うように東西の二方向へ分岐させている。東側は長さ約9.3m、西側は約16.6mの規模があり、蓋石を被せて両側壁を作る溝である。このような規模の暗渠排水溝も石上・豊田古墳群では初出である。

遺 物 遺物は土器類と鉄製品、耳環などである。このうち石室での棺体の配置、数量を復元するのに欠かせない鉄釘は、すべて原位置を保つものではなく、棺体配置などは不明である。

土器類では、須恵器杯は法量によりI類とII類に分類した。しかしこれは型式上の差異を表しているとはできない。ほかの個体では脚付長頸壺51や52、あるいは土師器碗4などはやや新しい要素を持つ土器と考えられる。須恵器の全般的な型式はII型式-4段階(TK43)に比定される。そして追葬についてはなかったものと判断された。

第11節 竪穴系小石室

竪穴系小石室は8号墳の西南区で、墳頂から少し下がったところ、標高152mと151mラインの間に2基検出された。2基とも南北方向に主軸を置き、約2mの間隔を置いて並列している。上部にある石室1は明らかに8号墳の墳丘を切り込んで墓壙を作っていることが、8号墳の断面観察畦から見られた。このことから小石室の築造は8号墳の完成以後である。また石室2について

も築造時期は同様のものと考えられる。ただ遺物が出土していないため具体的な時期を推定することはできない。

竪穴系小石室1（図22）石室墓壙は東と北の二辺が検出されただけで、西側と南側は斜面で削平され、その規模は不明である。しかし東側は石室の側壁にほぼ接しており、北側も石室と20cm程度の間隔が開いているだけである。石室は30×20cm程度の自然石を使用して、両小口と側壁を構築している。南北の小口部は基底石2石を用い、幅は共に50cmである。南側は2石が積まれ、高さは約25cmである。側壁の規模は長さ1.55mあり、5石により2段積みの部分が残存し、高さは約25cmである。この石室は8号墳の墳丘土の取り除き作業の際に検出したため、当初の側壁の高さはもう少しあったものと考えられる。副葬品は出土していない。

竪穴系小石室2（図22）墓壙掘方は東側で一部を検出したが、ほかの部分が削平されていた。石室は構成している石材は1と同じである。そして東側壁と南側小口部が残るのみである。側壁は南北長さ2.25mあり、4段積みで高さは65cmである。南小口部は幅75cmで4段積みの部分が残る、高さは45cmである。西側壁は2石残る。また床面は敷石を敷きつめている。石室2についても天井石に該当する石材は検出されていない。また副葬品についても出土していない。

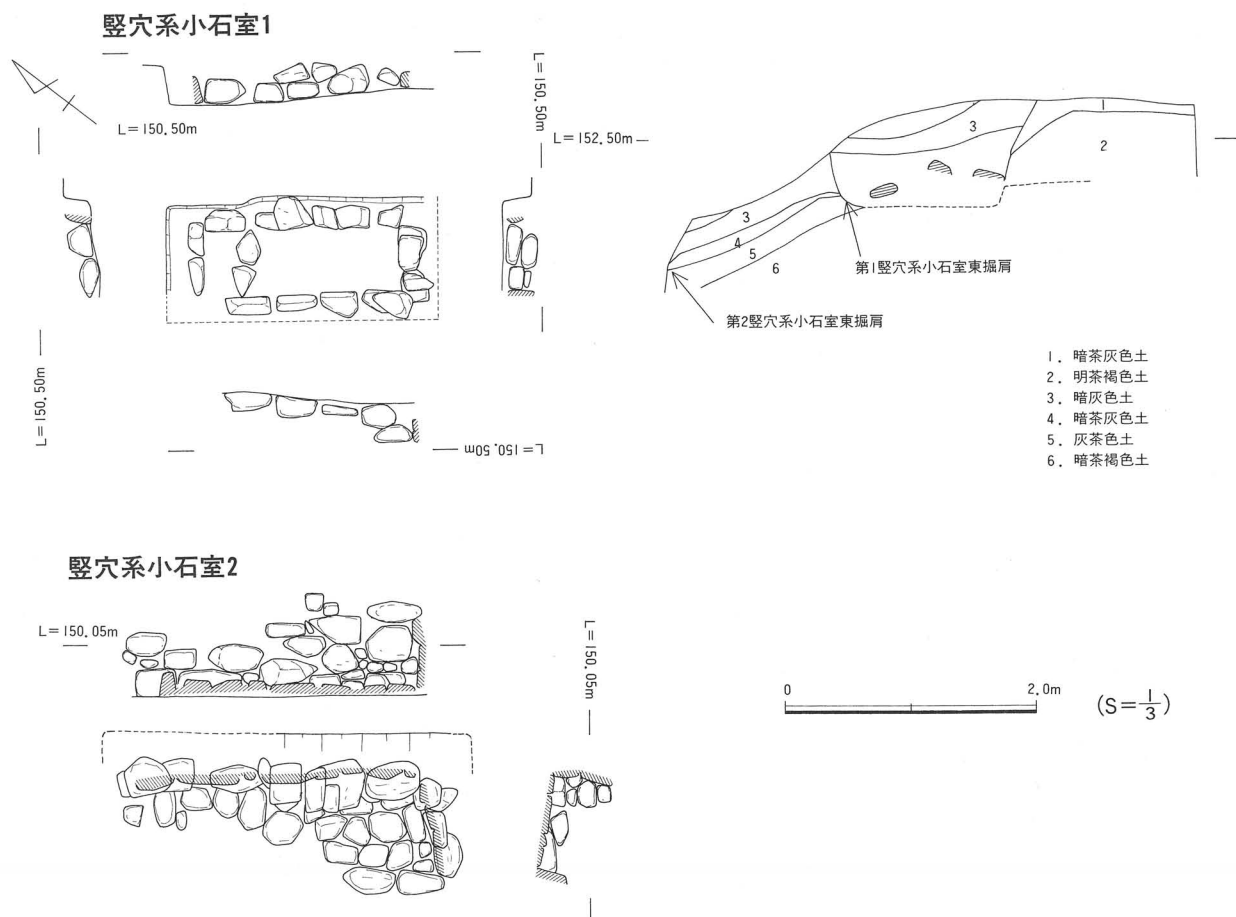


図22. 8号墳墳丘上竪穴系小石室1、2の実測図

表 1. 8号墳出土須恵器、土師器計測表

	器 種	器 高(cm)	口縁部径(cm)		出土地点
1	須恵器 杯 蓋	4.2	13.8	—	石室内No.29
2	”	3.8	14.1	—	前庭東区
3	”	4.5	14.7	—	石室内No.15
4	”	4.0	13.6	—	墳丘西裾部
5	”	3.9	14.2	—	石室内No.6
6	”	4.1	14.0	—	前庭西区4層
7	”	4.2	12.4	—	—
8	”	4.6	15.1	—	石室内No.8
9	”	4.0	14.3	—	石室堆積土
10	”	3.8	13.0	—	石室内No.25
11	”	4.0	13.5	—	石室内No.33
12	”	4.0	12.3	—	石室内No.22
13	”	4.2	12.6	—	石室内No.17
14	”	4.3	12.8	—	石室前庭と7号石室内
15	”	3.7	11.5	—	石室内No.21
16	杯 身	3.9	12.9	受部径14.6	石室内No.34
17	”	3.9	13.1	” 15.5	石室内No.4
18	”	3.7	12.1	” 14.4	石室前庭5層
19	”	3.7	12.1	” 14.8	石室内No.27
20	”	4.6	13.2	” 15.8	石室内No.11
21	”	3.9	11.9	” 14.5	石室内No.4
22	”	3.7	11.7	” 14.3	石室内No.30
23	”	5.0	13.0	” 16.0	石室内No.13
24	”	3.7	11.7	” 14.1	前庭部西区4層
25	”	3.5	11.6	” 14.3	石室内No.24
26	”	4.2	11.5	” 13.7	墳丘東側
27	”	3.8	10.5	” 13.1	石室内No.28
28	”	4.0	11.2	” 13.7	石室内3区
29	”	4.0	10.5	” 13.1	—
30	”	4.0	10.9	” 13.8	石室内No.19
31	”	4.2	11.2	” 13.9	石室内No.16
32	”	3.3	10.5	” 12.7	石室堆積土
33	”	3.6	10.5	” 13.2	石室内No.20
34	”	3.7	10.3	” 13.1	石室内No.1
35	”	4.0	10.9	” 13.7	石室内No.17
36	”	3.7	10.4	” 13.0	石室内No.2
37	”	4.1	10.6	” 13.1	石室内No.26

	器種	器高(cm)	口縁部径(cm)		出土地点
38	杯身	4.2	10.9	受部径13.1	石室前庭5層
39	"	4.1	11.2	" 13.4	" 5層
40	"	3.5	10.0	" 12.3	石室入口部
41	"	3.3	12.2	" 14.6	石室前庭5層
42	短頸壺	7.5	8.1	—	" 5層
43	"	9.7	9.0	—	" 4層
44	短頸壺蓋	4.8	12.2	—	石室内No.25
45	短頸壺	12.7	10.8	—	石室内No.9
46	壺口縁部	6.9	—	—	
47	脚付壺	30.5	9.4	脚丁高 9.0	石室前庭西区5層
48	"	—	—	現高 11.0	" 5層
49	脚付短頸壺	—	4.5	現高 6.3	石室前庭閉塞石
50	脚付壺	27.9	9.1	脚高 6.6	石室内No.1
51	"	37.4	9.0	" 9.7	石室内4区
52	"	25.2	8.3	" 3.1	
53	"	25.5	9.1	" 6.0	石室内No.3
54	甗	17.9	12.7	—	石室内No.24
55	甗口縁部	—	18.3	—	—
56	甗	28.5	15.9	—	石室前庭東区5層
57	高杯	9.1	13.3	脚高 4.5	石室内No.37
58	"	17.8	11.5	" 13.7	石室前庭西区5層
59	"	14.8	12.0	" 10.5	石室内No.10
60	"	12.5	11.8	" 8.7	石室内No.3
土師器					
1	杯	4.5	11.8	—	玄室内右袖埋土
2	"	4.6	12.1	—	"
3	"	4.1	11.7	—	羨道部入口No.1
4	"	6.5	17.0	—	玄室内右袖埋土
5	"	4.0	14.2	—	石室前庭部
6	小形壺	8.1	8.5	—	石室内No.5
7	高杯	13.6	17.2	脚高 9.0	石室前庭東区5層
8	"	現高 6.5	16.1	—	石室堆積土
9	高杯	" 3.5	—	—	石室内No.12
10	"	" 6.0	—	—	"
11	長頸壺	26.5	9.6	—	石室内堆積土
12	"	22	8.3	—	石室内No.2

第4章 9号墳の調査

第1節 墳丘の現状と規模（図3）

9号墳は標高163mの尾根頂部から、北へ派生する小丘陵上に築造されている。8号墳との間隔は約34mである。この間には小さな谷を挟んでいるが、この谷には8号墳の排水が流れこむ。

墳丘の現状は標高146m付近に立地しているが、西側は自然地形の急斜面となり、また北側の尾根筋も斜面傾斜が強い。

墳丘の現状は北側では146mラインまで墳丘を形成しているようであるが、南側まで回らない。南側では147.50m付近でようやく墳丘状にかたち作られる。このため形そのものはゆがみ、東西方向に長い楕円形状を呈している。現状での最大規模は東西約13m、南北約11m、高さ約2.5mである。

墳丘西側には石材が露出し一部開口している部分が見られる。また墳丘頂部は大きく凹み石室石材も露出している。

第2節 墳丘の築成状況と墳丘断面（図23）

墳丘中央東西畦について、南面する墳丘盛り土を観察すると、標高147.50mにおいて石室墓壇の奥壁部分にあたる掘方が見られ、西側へ4.8mは墓壇底の平坦面が作られている。これより以西は急斜面となり自然地形状を呈している。墳丘盛り土は、この147.50mより上部に6層が観察され、15～25cmの層厚で変化に乏しい均一な盛り土を形成している。東西両側において墳丘裾部にあたる盛土の仕舞いは明らかにしがたい。ただ墓壇奥壁肩部から東側は1.4mが平坦面を作っているが、これよりさらに東は斜面の地山となるところから、この転換点付近が東側の裾部と推定しておきたい。墳丘中央部での盛土高は頂部まで1.5mである。

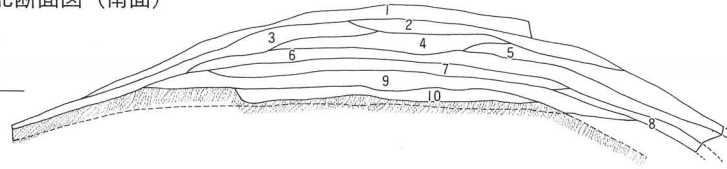
南北畦のうち南側の墳丘断面は、標高147.30m付近で地山整形の平坦面のラインが検出される凹凸が見られる。墳丘は現況では削平を受けていることが断面観察からうかがえる。石室側では5層の墳丘土が、左上がりの方向で盛土されている。それより以南の灰黒色土2層についても、同じく左上がりに斜行していて墳丘土であると判断される。このため南側の墳丘裾部は明確にはしがたい。

北側の墳丘断面は、石室側壁側では地山面は標高146.30mで検出され、南側とは1mの比高差が生じている。このため墳丘断面を見ると標高146.70mを境として、この下では灰茶色土および灰褐色微砂土の2層による整地土が形成され、これより上部が墳丘盛土となっている。この整地土は石室掘方により切られているため、地山整形のごく初期の段階において、北側部分の平坦面が狭小のためにこれを拡張する必要から整地を行ったものと考えられる。整地面は北側へは緩い傾斜を持ち、石室側壁から北へ4mの地点である。

墳丘盛土は下2層の灰黒色土と灰青色粘質土は、緩い傾斜の盛土であるが、これより上部の盛土は右上がり傾斜が強い。断面に現れた北側の墳丘裾部は灰青色粘質土が途切れる、石室側壁から4mの地点であると判断される。

1. 墳丘南北断面図 (南面)

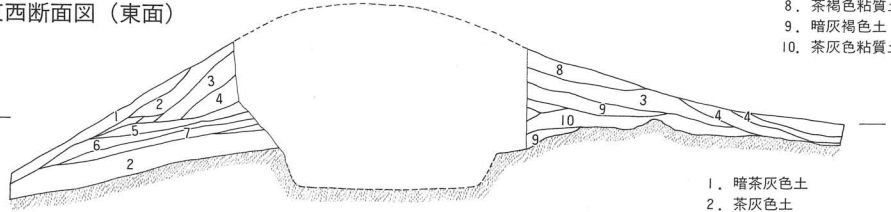
L=147.50m



1. 暗茶灰色土
2. 茶灰色土
3. 灰白色土
4. 暗灰青色粘質土
5. 茶灰色土
(白色粘土ブロック含む)
6. 暗灰褐色土
7. 灰青色粘質土
8. 茶褐色粘質土
9. 暗灰褐色土
10. 茶灰色粘質土

2. 墳丘東西断面図 (東面)

L=146.70m



1. 暗茶灰色土
2. 茶灰色土
3. 灰茶色粘質土
4. 灰黒色粘質土
5. 灰黒色微砂土
6. 灰茶色粘質土
7. 灰褐色粘質土
8. 茶褐色土
9. 暗茶色土
10. 灰茶色土
(石礫を含む)

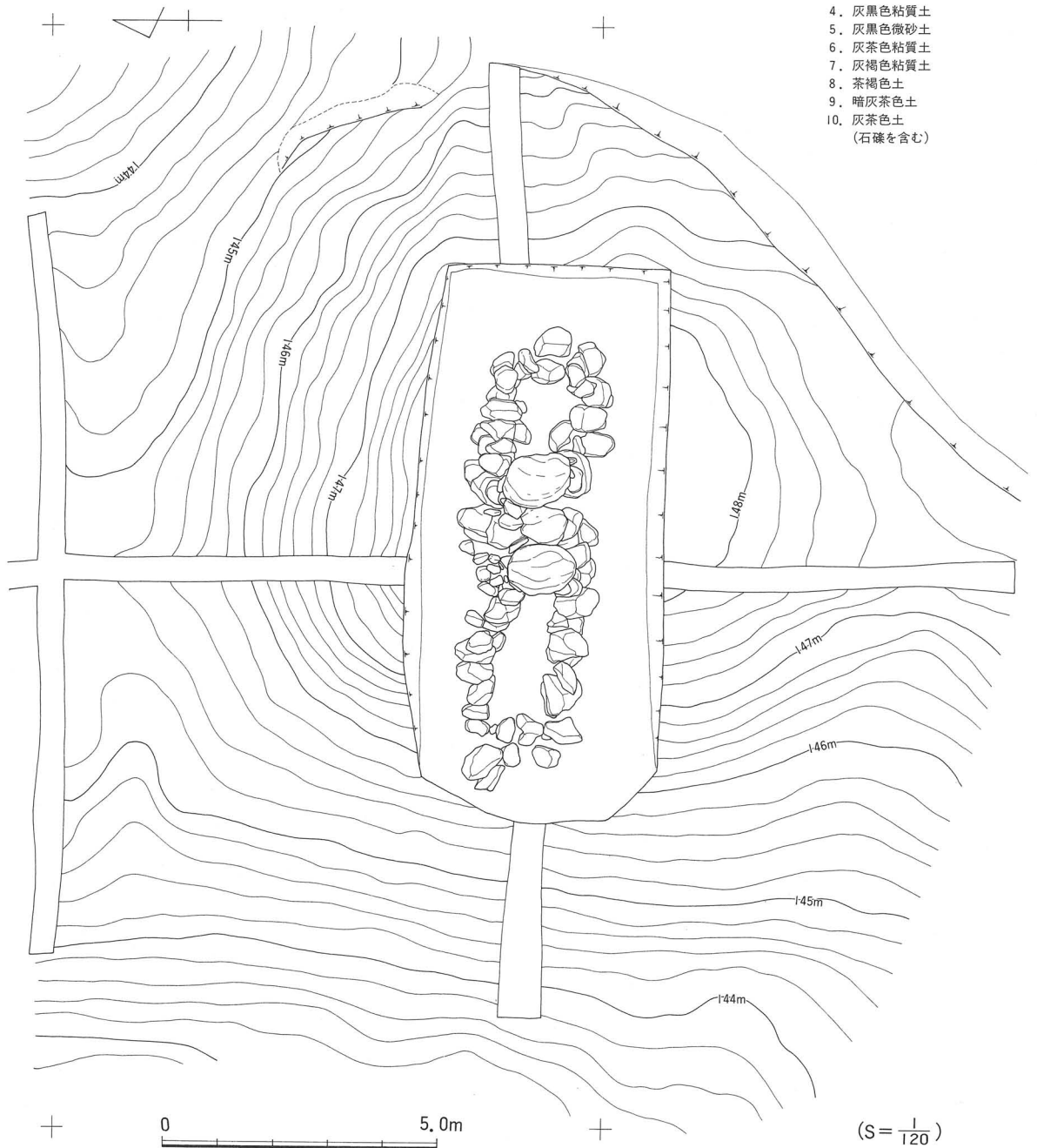


図23. 9号墳横穴式石室検出状況と墳丘断面図

以上のように墳丘盛り土の状況を見るならば、ある程度後世の削平を受けていることは免れないが、東側および南側は自然地形が上がり、北、西は急斜面で下るといふ傾斜変換点に作られ、墳丘自体当初の形状を復元してもきれいな円墳状を呈すると言ふことはないうである。

第3節 墓 壙 (図24)

墓壙の平面形状は隅丸長方形で、西側に開口している。そして開口部から短い素掘の排水溝が取り付いている。墓壙の東西長は6.2m、最大幅は3.4m、奥壁部では2.85mである。中央部がやや膨らみ、西側ではすぼまる形状を呈している。内部は石室床面に相当する部分は、奥壁から羨道部にかけて5.1mが平坦面の両側はちょうど両側壁が納まる幅で溝状に穿たれ、さらに長方形の小土壙が北側で6カ所、南側では5カ所穿たれている。北側の溝は奥壁から3mの地点で屈曲している。この屈曲部分は右側壁の基底石でもある袖石が配置される位置にあたり、羨道部と玄室の区分を、墓壙を穿つ時点で配慮したものと考えられる。このような屈曲は左側では見られない。墓壙の平面形状を見る限りは

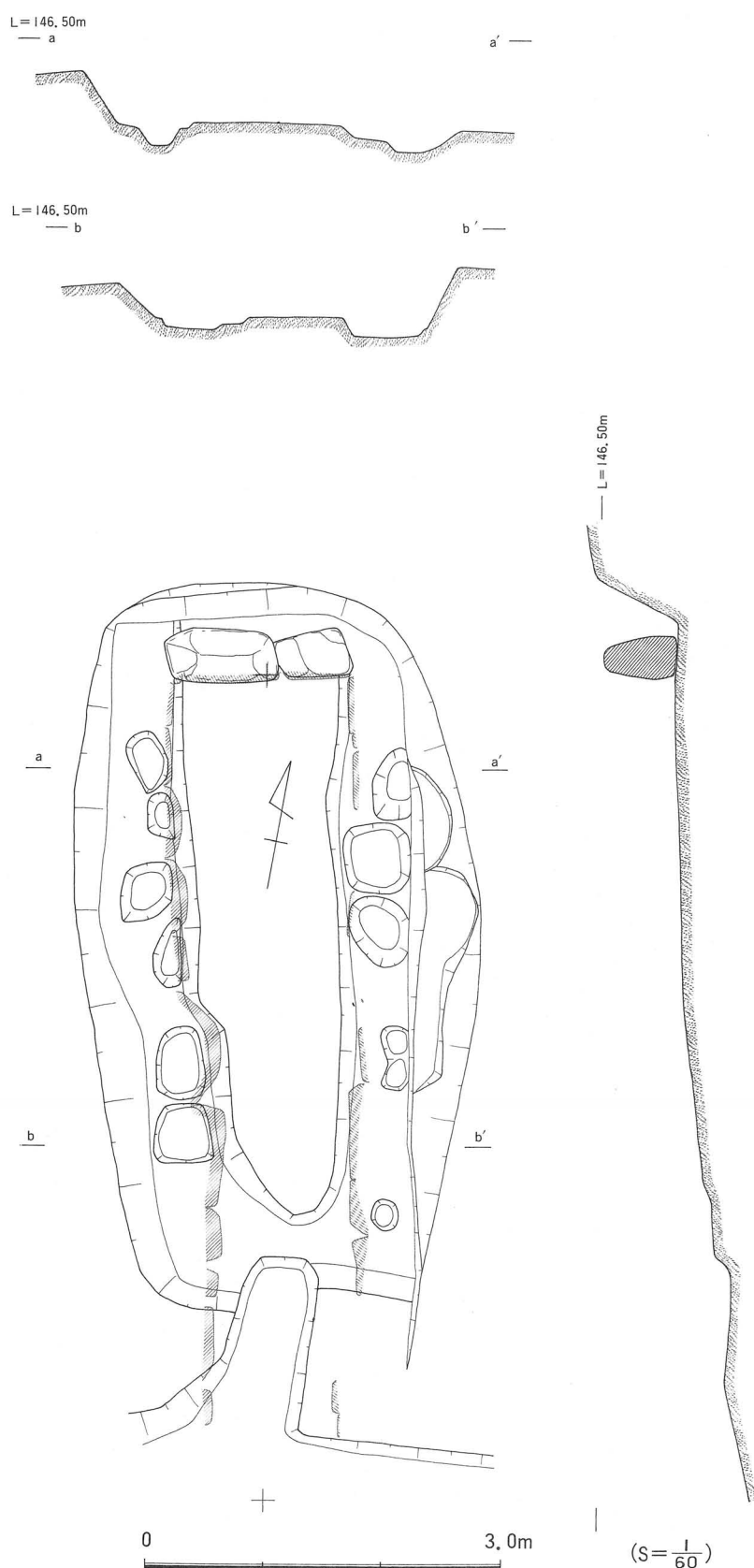


図24. 9号墳石室墓壙と基底石

片袖式の側壁を考えることができよう。溝内に穿たれた小土壙は、8号墳にも見られたが側壁基底石に対応した位置に穿たれているところから、基底石を安定的に据えつけるためのものと推定される。ただ両側壁の最奥部と両羨道部ではこのような小土壙は穿たれていない。排水溝は素掘で羨道部の中央部付近から、西側にかけて1.5m穿たれ西側斜面に流されている。幅は奥部で65cm、深さは11.5cmである。

第4節 石室 (図25)

9号墳の石室は、横穴式石室の開口方向を北へ約87度振るものの、西側に開口している。石室の現状は、羨道部床面では全面に敷石が見られ、一部では三重に積み重なっている部分もある。しかし玄室においては、このような重複した敷石は見られない。このことから羨道部の敷石は石室の閉塞石であると考えられる。

玄室部の床面は約30cmの灰茶色粘質土が堆積している。石室の両側壁の遺存状況は、右側ではほぼ構築時のままであるが、左側壁は玄室部を中心に石材が抜かれている。

天井石についても玄室部の石材を1石を除いて遺存していない。羨道部では2石が残るものの、これら天井石は危険な状態にあるため、石室内を調査する以前に取り除いた。

石室構造 石室は両袖式の横穴式石室で、全長6.54mである。羨道部入り口の部分については、現状が自然の崖面となるため当初の状況は不明である。また石室を両袖式としたが、墓壙掘方の状況では右片袖式の石室とした。これはあくまでも墓壙掘方と石室構造による違いであり、石室構造

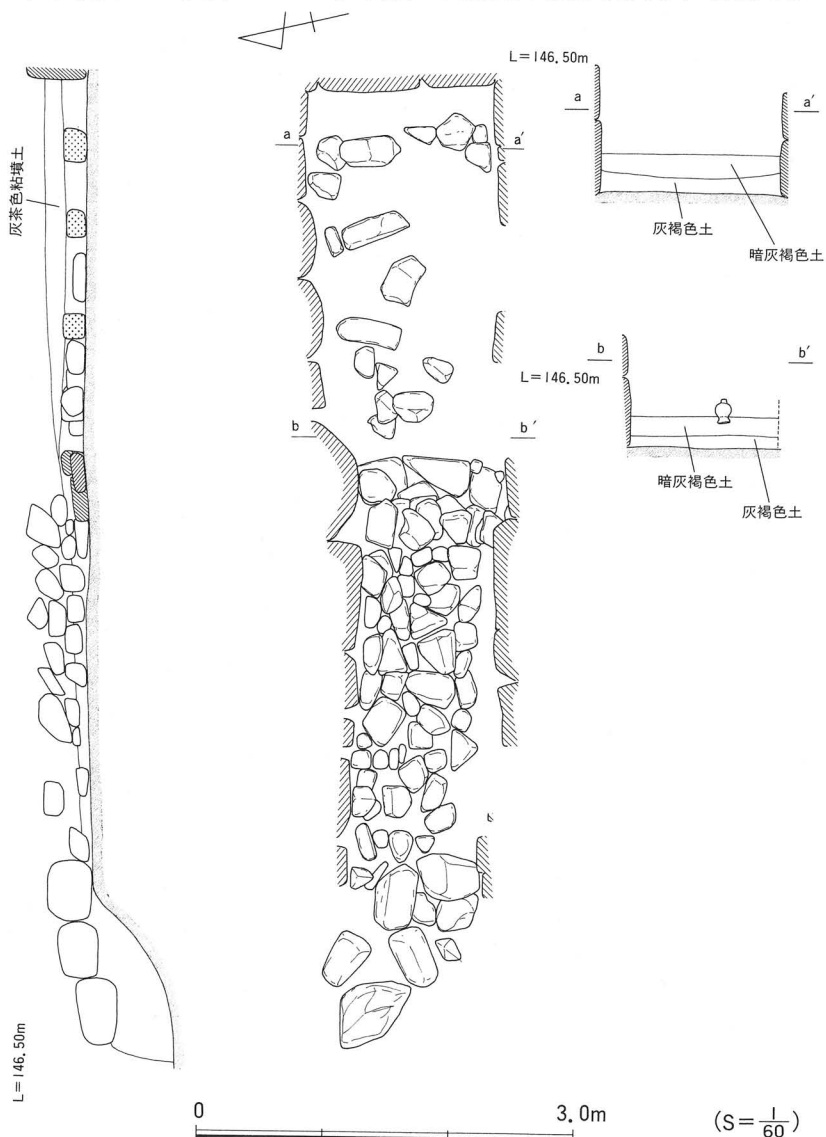


図25. 9号墳石室床面検出状況

上は両袖式石室である。しかしこの袖部分にも問題がある。

墓壇掘方の中で右側のラインに屈曲部があり、この部分に袖部を構成する石材が設置されていると考えた。実際ここには横幅1m、縦60cmの大型石で玄室側壁より30cm内側に据えられているが、これを右袖とすると、左側の袖石とは80cmほどずれて置かれていることになる。

また左側壁の袖石と対になる袖石は、右側にあるがここでも25cmほどのずれが生じているのである。

床面に注意してみると、右側壁の大型石に接して、3石が横並びに配置され、框石を構成している。この地点を玄室と羨道に分けるラインであるとするのが妥当であろうと考えられる。ここを計測ポイントとすると、玄室の長さは2.95m、羨道部の長さは3.5mと言うことになる。

玄室奥部の幅は1.47m、中央部では1.37mである。羨道部框石部での幅は1.18m、中央部では1.17m、入り口部では1.07mである。

框石と玄室床面の敷石 框石は中央に三角形の石と両側には30×40cm程度の方形の石が玄室側で直線になるように配置されている。またこの3石は上面の傾きが羨道部方向に低くしている。

玄室部の石材で注意されるのは、右側壁よりに側壁と直角に配置された長方形の3石である。石室中軸線より右側に配置され、最奥部の石材は50×27cm、中央部では50×20cm、羨道部側では50×18cmと均一な大きさである。最奥部の石は奥壁から35cm離れ、3石間は1.7mである。側壁とは10～30cmの間隔が開いているに過ぎない。

3石とも上面のレベルがほぼ均一なところから、棺台に使用されたことが推定される。またこの石列が右側に偏って配置され、左側がちょうど半分開いている状況である。

奥壁 基底石部での幅は1.5m、現況の高さは1.5mである。4段分が残存している。石材の構成は右側基底石が大型であるほかはほぼ均一で、すべて横方向に架構している。奥壁の傾きは基底石より2段目からすこし内傾する。

側壁 右側壁は玄室部中央が最も良好に残存し、6～8石積みで高さは2.3mである。奥壁部では1.9m、羨道部では1.4mが残存する。天井部の高さは、天井石の残存状況からここに示した数値を大きく外れることはないであろう。側壁の架構は自然石を乱積みし石材自体には加工を施していない。また架構には玄門を構成する大型石が基準になっているようである。この石材自体横方向に置かれて基底石となるが、これより玄室側の石材は縦方向と横方向に交互に配置している。これは羨道部の架構方法でも見られる。この基準石の高さは60cmであるが、この高さで目地が通り横方向に使用されたところは2段積みされている。この目地よりさらに80cmの間は、ほぼすべて横方向に架構し大きさも均一な石材を使用している。さらにこれより上部の石材は小型化する。

左側壁は基底石を含めて残存状況が悪く石材の架構方法などを詳しく検討できない。ただ残存部を見ると玄室では比較的小型の石材を基底石から横方向に積み上げているのが分かる。最奥部では6段分である。羨道基底石は幅が85cmと大型でやはり横方向に設置している。これより上部では小型の石で縦、横不規則に架構し、羨道入り口部では、長方形の大型石材が3段積みされている。

第5節 遺物の出土状況 (図26)

遺物は石室内および墳丘周辺から出土し、主として須恵器類である。石室内では奥壁部両側隅に壺12、13があり、この他には蓋杯身と甕8がある。蓋杯は敷石の上にあたりしているため移動している可能性があるものの、壺2点については原位置を保存しているものと考えられる。また玄門付近にある脚杯蓋10と杯身、土師器埴などは移動しているものと考えられる。この他甕7、蓋9、提瓶11などは石室外から出土している。

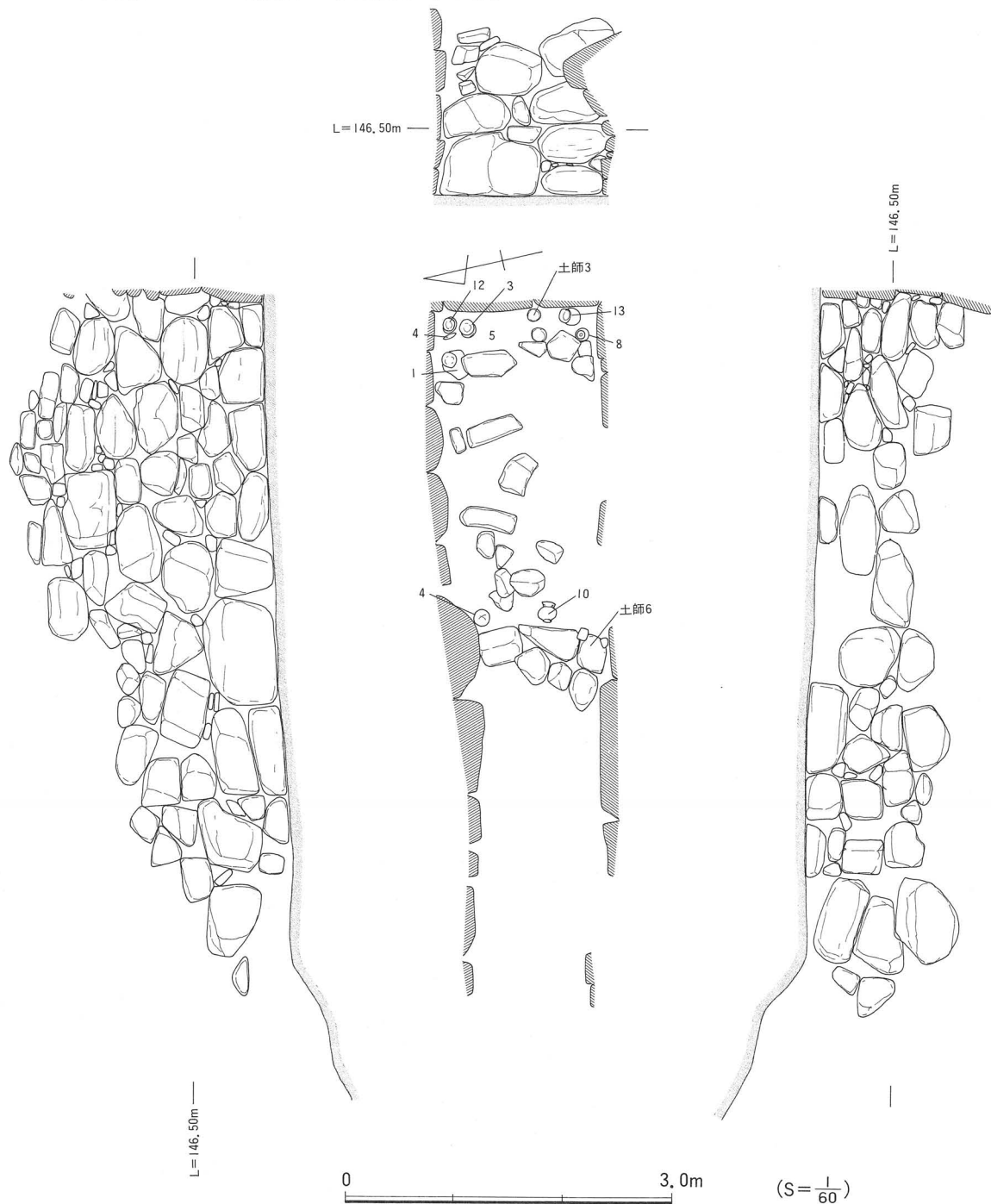


図26. 9号墳横穴式石室と遺物出土状況

第6節 出土遺物

9号墳から出土した遺物は須恵器、土師器、鉄製品であり量的には少ない。

須恵器 (図27、28 図版32、33)

杯蓋 2点出土しているが、1は口縁部直径14.3cm、器高3.8cmである。体部は全体に丸みを持ち立ち上がりの稜線も不明瞭である。口縁部端部は丸く納めている。調整は天井部を軽く回転ヘラケズリ調整を施している。2は口縁部直径12.9cm、器高3.0cmあり、1に比較してやや小型のものである。形態的には立ち上がりやや直立気味で、天井部は平坦である。稜線は不明瞭で口縁部端部は丸く納めている。

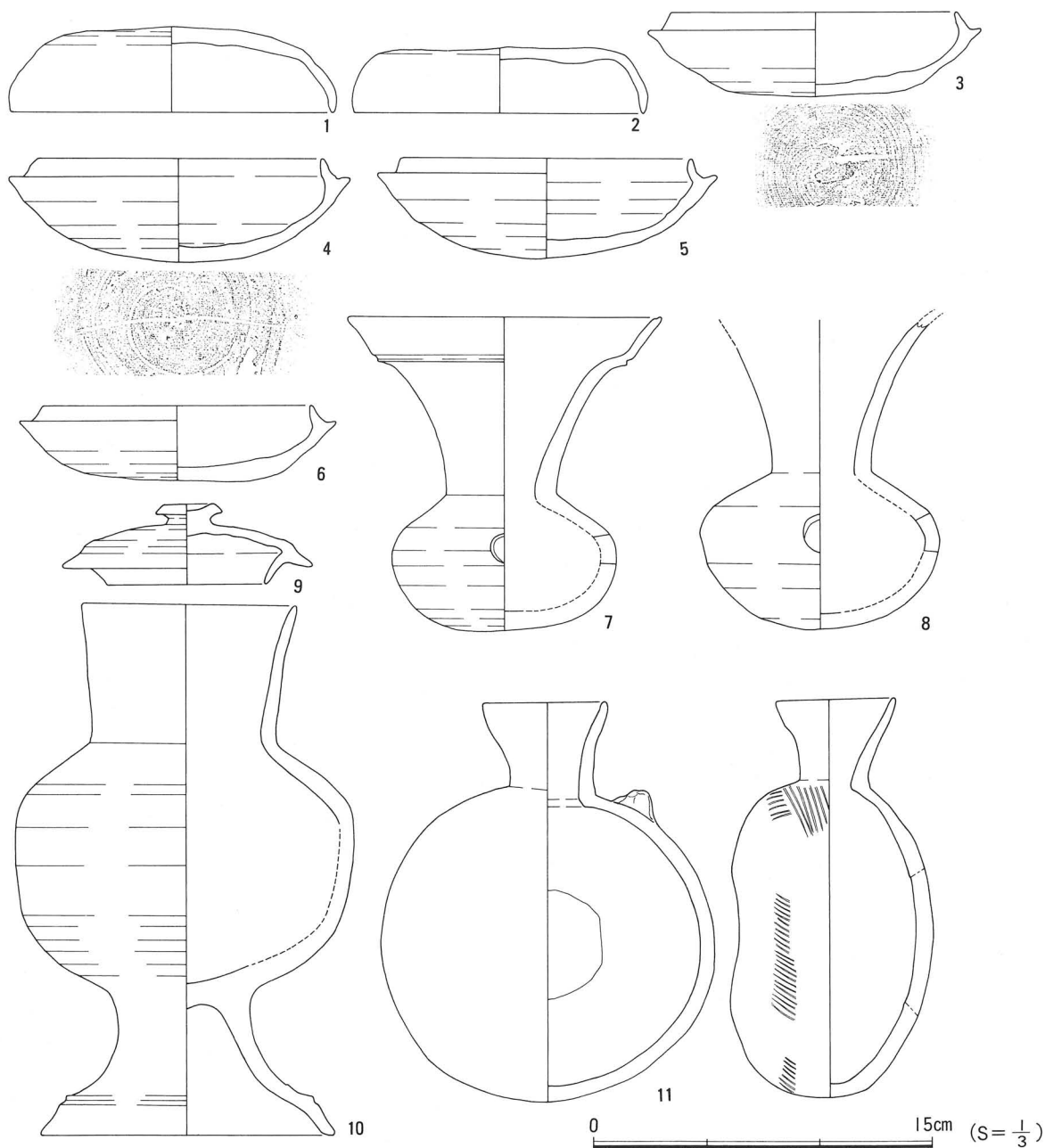


図27. 9号墳出土土器 (1)

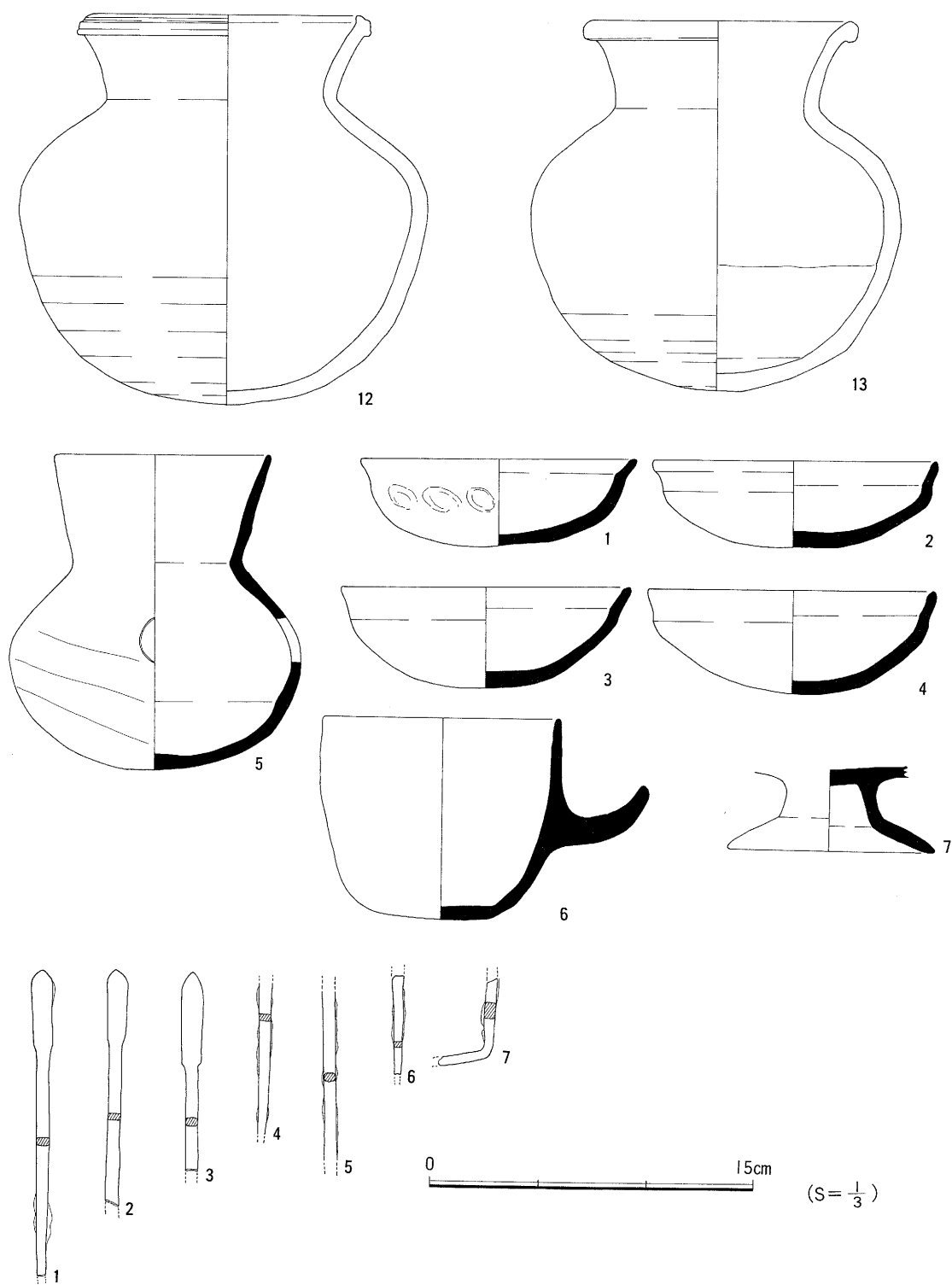


図28. 9号墳出土土器(2)、鉄製品

杯身は4点出土しているが、3は口縁部直径12.7cm、受部直径14.7cm、器高3.8cmである。内見込みは深く、立ち上がりもしっかりしている。調整は外面 $\frac{1}{3}$ 程度が軽く回転ヘラケズリを施している。底部には短い一印のカマ記号を施している。4は口縁部直径12.6cm、受部直径15.1cm、器高

4.6cmである。内見込みは深く、大振りのものである。立ち上がりも高くしっかりしている。体部外面は $\frac{1}{2}$ 程度で回転ヘラケズリを施している。底部には長さ9.5cmの直線で一印のカマ記号を施されている。5は口縁部直径12.8cm、受部直径15.0cm、器高4.5cmである。内側見込みは深く体部はやや丸みを持つが、立ち上がりは短かめである。体部調整は底部で軽く回転ヘラケズリを施している。6は口縁部直径11.9cm、受部直径14.0cm、器高3.4cmである。形態的にはこれまでのものに比べてやや扁平である。立ち上がりも短かく、受部も小さい作りである。体部の調整は $\frac{2}{3}$ 程度まで回転ヘラケズリを施されている。

甗(7) 石室外の墳丘西北斜面から出土した。口縁部直径13.9cm、器高14.0cm、頸部接合部は5.0cmである。体部は最大径が10.0cmである。形態的には口縁部は大きく外上方に開き、体部はやや扁平気味である。中央部には直径1.8cmの円形孔を穿っている。体部の調整は肩部から下部を回転ヘラケズリを施す。8は玄室奥壁の左隅部にあり、完形品であるが口縁部は全体に細かく打ち欠いている。現高13.6cm、頸部接合部径は4.4cm、体部最大径10.6cmである。形態的には口縁部にかけて大きく開き頸部はすぼまる。体部はやや扁平で中央部には直径1.8cmの円形孔を穿つ。調整は体部下半を軽く回転ヘラケズリ調整を施す。

壺蓋(9) 墳丘北側から出土した。口縁部直径7.1cm、受部直径11.1cm、器高3.6cmである。形態的には大きな鈕をもち立ち上がりも高いものである。体部はほぼ全面にわたってヘラケズリを施し、稜線も明瞭である。

脚杯壺(10) 器高23.6cm、口縁部直径9.5cm、体部最大径15.0cmである。脚部は高さ6.3cm、底部直径13.0cmである。形態的には口頸部はやや短く外側に広がり気味である。体部は大きく角張った体部を呈している。体部の調整は下半約 $\frac{1}{2}$ を軽くヘラケズリを施している。

提瓶(11) 器高17.7cm、口縁部直径5.5cmである。体部最大径14.8cm、頸部までは14.0cmである。頸部は口縁端部が短く外上方を向くが、全般的には直立気味である。体部は全体的に丸みを持ち、側面観は扁平な作りである。肩部には一カ所につまみ状の粘土塊が付けられている。また体部凸面には中央部に直径5cm程度の穴を詰めた粘土板が見られる。調整は体部には叩き痕跡が見られる。

壺(12、13) 2個体ともほぼ大きさが同じである。12は口縁部直径12.2cm、器高18.2cm、体部最大径18.8cmである。口縁端部は中央で凸線を作り、口唇部内側でゆるく段を作る。体部下半はやや角張る形態を呈している。調整は体部下半を回転ヘラケズリ調整を施す。13は口縁部直径12.0cm、器高17.2cm、体部最大径17.1cmである。頸部は外上方に開き、端部は角頭形を呈している。体部は全体的に丸みを持つ。体部の調整は下部を少し回転ヘラケズリを施す。

土師器 (図28 図版34)

杯身 4点出土している。1は口縁部直径12.6cm、器高4.1cmである。口縁部は屈曲して外上方を向く。体部外面には指頭圧痕が残存している。2は口縁部直径12.9cm、器高4.1cmあり、口縁端部は外上方を向く。調整は不明である。3は口縁部直径13.2cm、器高4.9cmであり、内側見込みが深い器種である。口縁端部は屈曲して外上方を向く。4は口縁部直径13.3cm、器高4.7cmであり、内側見込みは深い。口縁端部はゆるく屈曲する。

壺(5) 口縁部直径10.0cm、器高14.6cmあり、体部最大径は13.5cmである。頸部はやや短く、体部は中央で角張り気味の形態を呈する。また体部には直径2cmの円形孔を穿つ。調整は体部下半は右下がり方向でヘラ削りを施している。

埴(6) 体部中央に片把手を付けている。口縁部直径10.9cm、器高9.4cmある。全体に口縁部方向に広がる形態を呈し端部内面には凹線が一条巡る。体部の調整は不明である。把手は先端を上曲げている。

鉄製品 (図28 図版33)

鉄鏃は3点である。いずれも柳葉形を呈し、鏃部の長さは3.4~4.2cmである。茎は6×3mmの長方形を呈し、現状では10cm程度の残存である。この他の鉄製品は茎部の破片である。

第7節 小 結

遺 構 9号墳は西側に開口する横穴式石室である。つまり盆地部に開口しているのであり、8号墳とは異なる。

横穴式石室の平面形は細長く、両袖式であるにも係わらず明確な袖を作っていない。また玄室の長さとの羨道部の長さがほぼ等しく、この点からも全体として細長い平面形態の石室となっているようである。

玄室内の埋葬施設と考えられる、右側壁に偏して置かれている3個の石はいずれも細長いもので、3石が作る空間は東西約1.8m、南北幅約60cmの範囲に納まる。おそらく、この程度の大きさの木棺が安置されたものと推定される。そしてこの左側にもまったく、同じ大きさの空間が残る。このため追葬の空間として予定されていた場所であるかも知れない。ただ現状ではこの部分に追葬がなされたことは確認できていない。

遺 物 須恵器と土師器が出土遺物の中心である。埋葬当初に配置されたと推定されるのは玄室奥壁の両隅に置かれた一群である。しかし8号墳に比較しても出土数は少ない。須恵器は8号墳で出土した杯の分類のI類であり、ほぼ同一型式のII型式-4段階(TK43)と考えられる。このことは、8号墳と9号墳があまり時期を隔てないうちに築かれたと推定されるのである。

ただ9号墳は石室の平面形態や石材の構築方法などに、8号墳よりやや新しい要素を含んでいると推定される。

表 2. 9号墳出土須恵器、土師器計測表

	器 種	器 高(cm)	口縁部径(cm)		出土地点
1	須恵器 杯 蓋	3.8	14.3	—	石室内No.9
2	〃	3.0	12.9	—	〃
3	杯 身	3.8	12.7	—	石室内No.8
4	〃	4.6	12.6	—	石室内No.10
5	〃	4.5	12.8	—	石室内No.6
6	〃	3.4	11.9	—	石室内No.5
7	甗	14.0	13.9	—	墳丘西北区
8	〃	現高 13.2	—	—	石室内No.1
9	蓋	3.6	7.1	—	墳丘北側
10	脚 付 壺	23.6	9.5	脚高 6.4	石室内No.11
11	埴 瓶	17.7	5.5	—	墳丘北側
12	壺	18.2	12.2	—	石室内No.17
13	〃	17.2	12.0	—	石室内No.2
土師器					
1	杯	4.1	12.6	—	石室内No.12
2	〃	4.1	12.9	—	玄室内
3	〃	4.9	13.2	—	墳丘北側
4	〃	4.7	13.3	—	〃
5	壺	14.6	10	—	玄室内
6	把 付 埴	9.4	10.9	把手長 4.0	石室内No.13
7	脚 部	現高 3.8	脚高 3.4	—	墳丘



1. 調査地と周辺状況



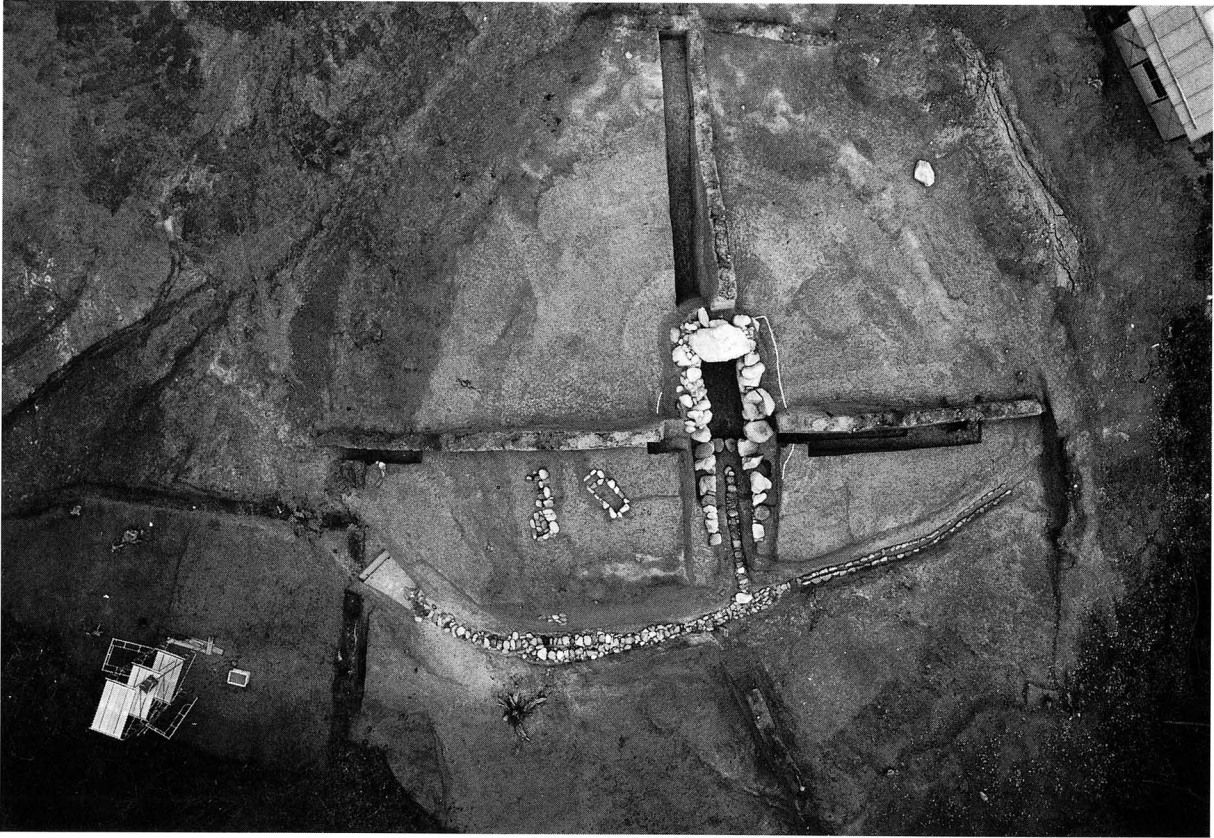
2. 8、9号墳全景 (手前が8号墳)



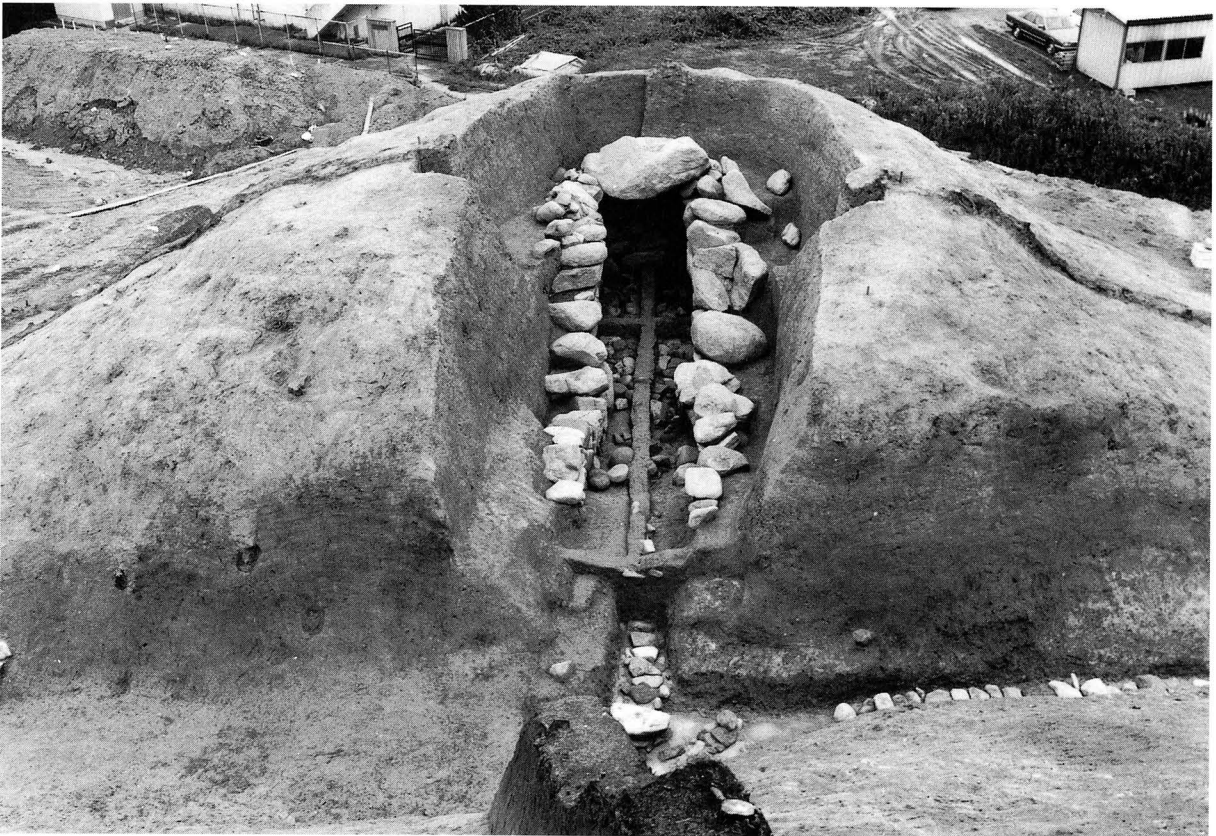
1. 調査前状況



2. 表土除去後の現状



1. 8号墳遺構検出状況



2. 横穴式石室検出状況（南から）



1. 横穴式石室検出状況（南から）



2. 横穴式石室床面敷石（玄室部）



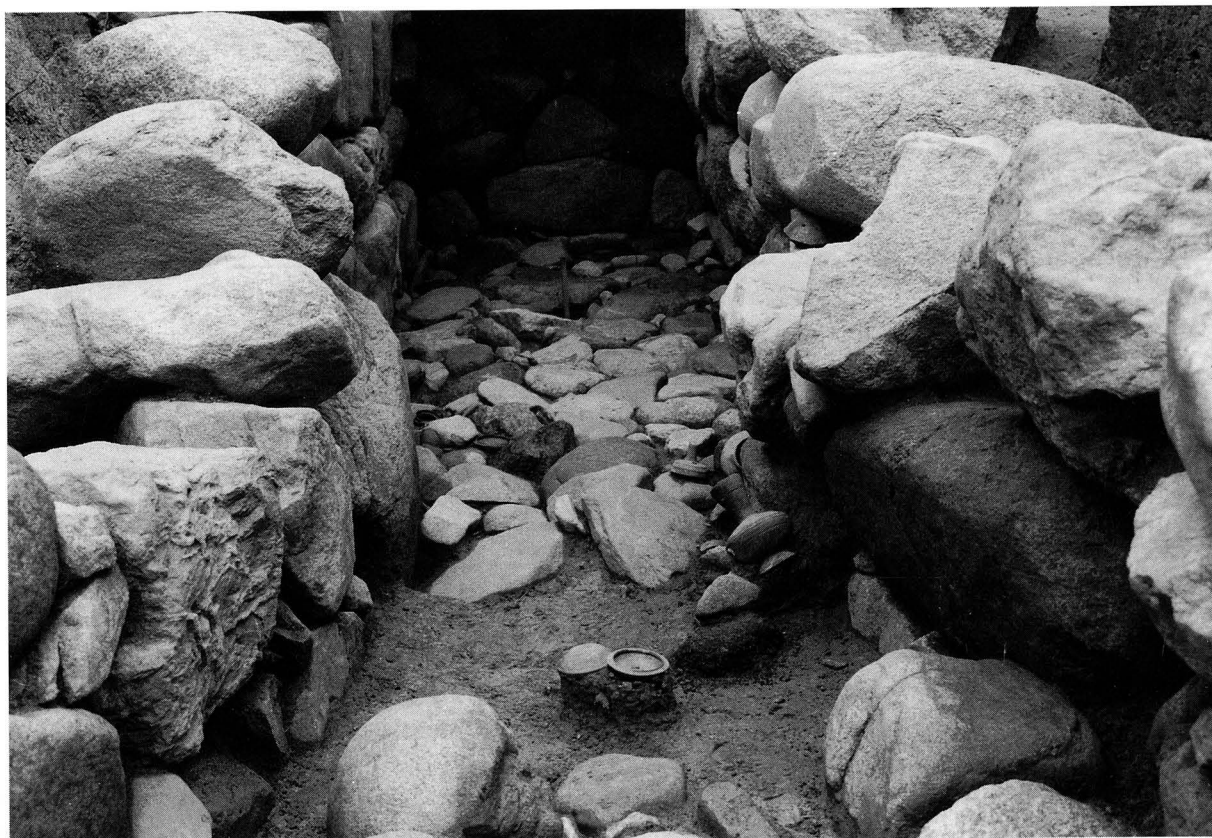
1. 羨道部と墳丘西側盛土状況



2. 同上 墳丘東側盛土状況



1. 遺物出土状況



2. 同上



1. 東玄門部付近遺物出土状況



2. 西玄門部付近遺物出土状況



1. 玄室内馬具出土状況



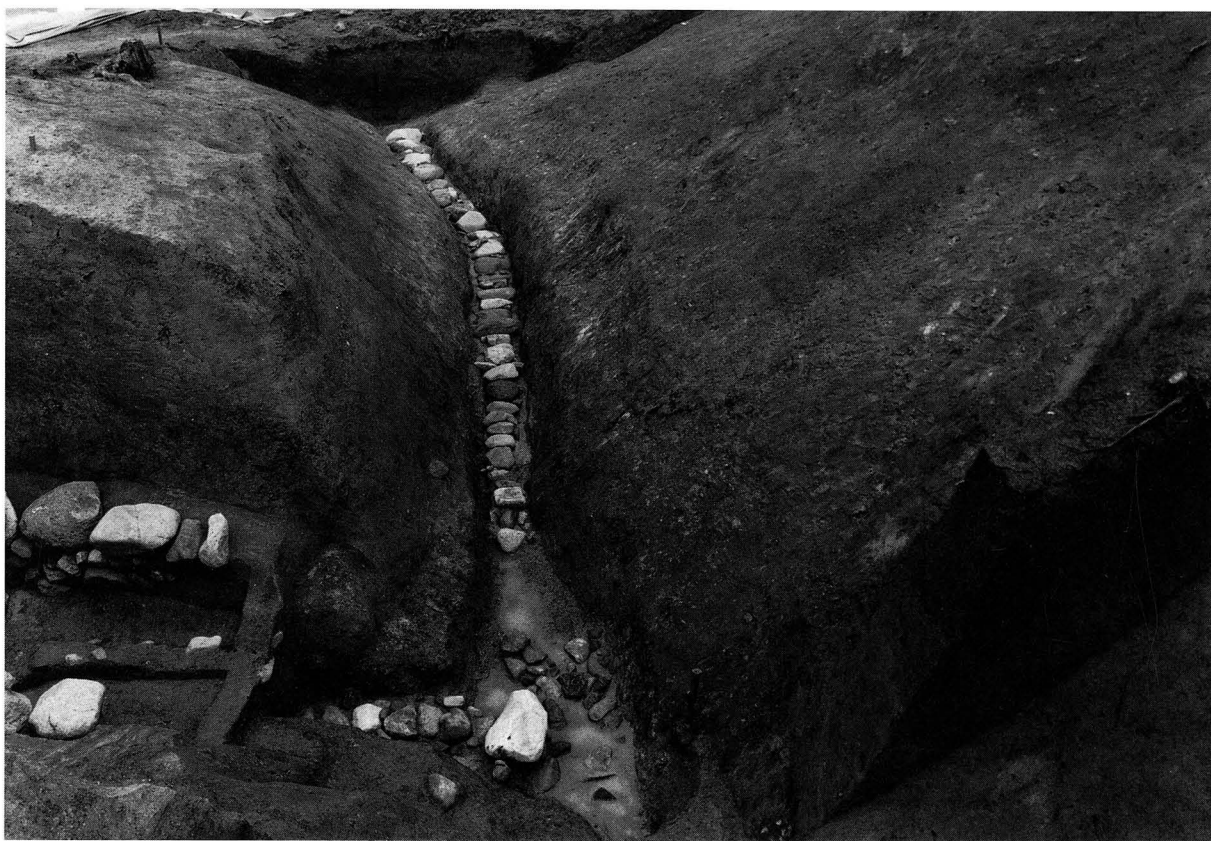
2. 石室前庭部遺物出土状況



1. 中央排水溝 (南から)



2. 同上 蓋除去後 (石室から)



1. 東排水溝（西から）



2. 同上 蓋除去後（木杭から奥が東排水溝）



1. 西排水溝 (西から)



2. 同上 (東から)



1. 西、中央排水溝と西排水溝覆土（東から）



2. 西排水溝分岐状況（東から）